

K2A-37 Z32-B88

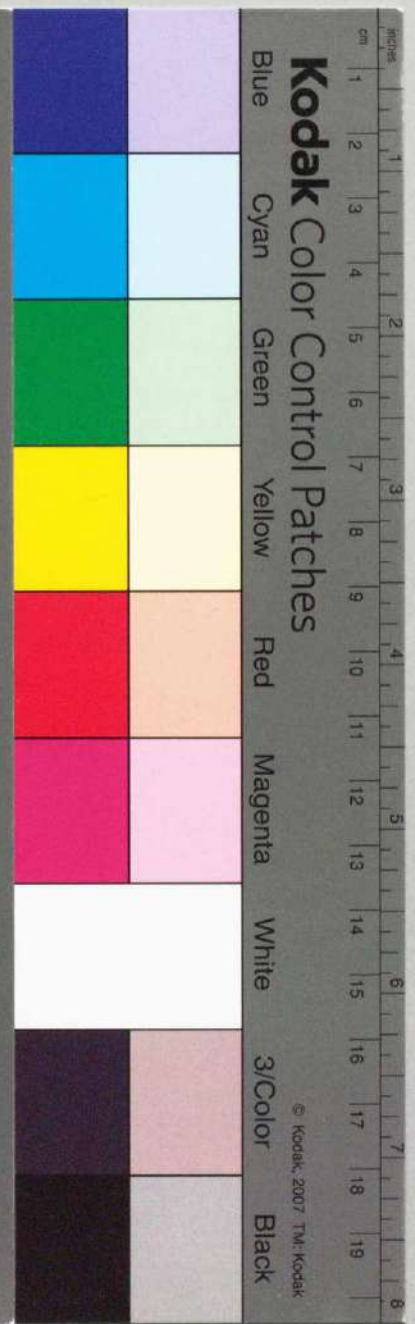
金の星



九月号

国立国会
8. 3. 26
図書館

第九卷 第九号



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



武井雄畫

No.II No.I

あ
る
き
太
郎

物語を主として
行くとはいふ形
かといふ形
い本

三色版一、三色版二、單色版五九
各冊一・三〇—送料各〇・〇八
三色版七枚 白版九〇葉



童話作
家協會

日本童話選集

初山滋 裝幀 四本時一
川上四郎 村山知義 初山滋 挿繪
武井雄 挿繪

菊判五〇四頁 定價 三・七五
着色挿圖三八 送料 〇・二七

第一輯

現代著名の諸先生
三十四名の方々が
各々その作品中の
傑作の選集挿圖も
亦傑作のもの許り
です。

小川未明著

武井雄裝幀
初山滋挿繪

菊判四八〇頁
挿圖四八葉
定價 三・〇〇
送料 〇・二七

未明童話集
第一卷



收載四九篇一篇々々
未明氏特異の光
輝き放つ

バーネット夫人原著、モトセス開色
久保田万太郎譯 布目敏行裝
兒童劇小公女

四六判一七〇頁
色刷 四枚
定價 一・三〇
送料 〇・二二

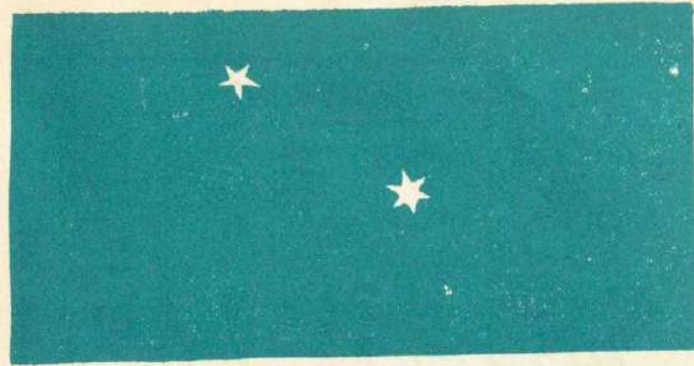
北澤榮一序及序論 保積稻天著
お伽漫 素盞鳴尊

菊判 一五〇
定價 一・五〇
送料 〇・一八

時事紙の漫画でお馴染の稻天氏がスサノヲの尊の一代
を漫画化したもの



東京日本橋通
丸善株式會社
大版 神戶 京都 名古屋 大阪 横濱 福岡 仙台 札幌



目次

とつてちやうだい(表紙・石版)……………岡本歸一
 仲よくおあがり(口繪・三色版)……………寺内萬治郎
 川越(童話)……………野口雨情
 同作(童話)……………本居長世
 取残された親類(童話)……………沖野岩三郎
 水(童話)……………野口雨情選
 一王國を争ふ(長篇)……………小島政二郎
 霧の悲劇(童話)……………北村壽夫
 大石主税(長篇)……………三島霜川
 かあいさうな花(童話)……………岩井允子
 泉のいたづら(童話)……………涌島戯白
 提灯花のちやうちん(大人篇)……………野口雨情選
 仇討夢物語(童話)……………小城庄一
 天狗をだました子供(童話)……………立石美和



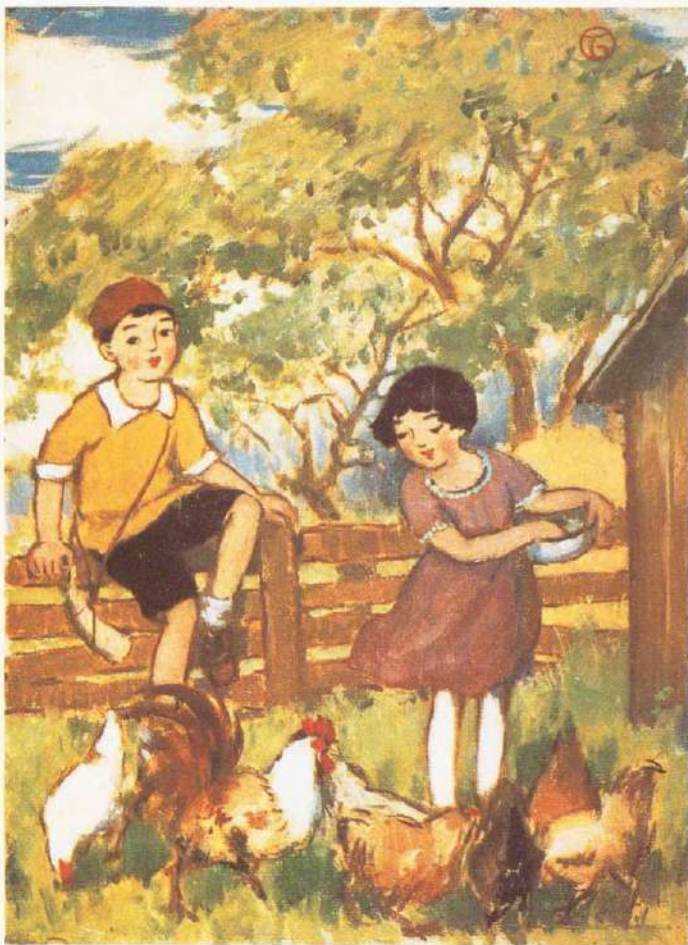
大海戦に勝つまで(童話)……………(夫)原田謙次
 狸が利口か人間が利口か(頁小話)……………(全)………野口雨情選
 ねんね、ねかそこ(推薦童話)……………(全)………野口雨情選
 大發明家エヂソン(童話)……………(さ)………廣瀬龍太郎
 保己一の小さい頃(童話)……………(次)………田中宇一郎
 だまされた鯰(童話)……………(四)………西川喜平
 つりがね(草(子供篇))……………(四)………野口雨情選
 頼光の四天王(長篇)……………(一〇)………川崎春二
 河童の手紙(頁小話)……………(一九)………三木露風
 ぼうやをおんぶ(童話)……………(二〇)………三木露風

世界童話欄

六人の商人と一人の坊さん(日本) 日曜をどり(フランス)
 世界一の力持ち(朝鮮)



りがあおくよ仲



畫郎治萬内寺

少年偉人
英雄叢書

(2)

少年天才物語

立石美和著
川上四郎畫

(近刊)

▽定價壹圓廿錢
▽送料十錢

《書版出社星の金》

(1)書叢雄英人偉年少

少年探險家物語

著一龍米久

銀廿圓壹價定
錢十料送



この本には、世界に名高い探検家の偉業を集めました。猛獣、毒蛇の棲むアフリカの内陸を、三十三年の間探險し、謎の湖地一片の謎と消えたりピンダグストンの一生。——
或ひは夏には赤き南極の氷海を探險して、萬古の秘密を解いたキヤアテンケーク。或ひは始めて世界一周の榮冠を得たマゼランの物語など、色とりどりの美しさ、勇ましさ——若き日の少年の夢に、なくてはならぬ感動の一冊です。

『少年偉人英雄叢書』は、少年諸氏の若い魂に力と熱を與へんがために生れたものです。弱者には力を與へ、強者には愛を與へ、悲みの母です。世界の偉人英雄の言行を學んで、己が一身の上のかゞみとし、他日活社會に雄飛せんとする者は、何ん人も來つて、この盡さざる生命の水を汲まれよ。



少年文學名著選集(5)

アーサー王騎士物語

大木雄三先生譯述

寺内萬治郎先生裝幀
寺田良作先生挿畫

世界少年文學の一大傑作となつてゐるアーサー王と、王に仕へた騎士の物語であります。

此の本を讀まれた方は、こんな立派なそして偉大な物語があつたかと驚かされるに相違ありません。アーサー王自身が實に不思議な運命を持つて生れた王様ですが、王に仕へる騎士達もまた王に劣らぬ變化の多い一生を送る者ばかりでした。勇壯であつて、そして涙に満ちた話でありますから、此の本を讀んだ方は、騎士の尊い精神にふれて、力づけられると同時に、魂の清められるやうな氣持ちを感じられるでせう。

皆さんの是非一讀なさるべき本であります。

少年文學名著選集

各册定價拾錢

1 十五少年漂流記

3 黒馬物語

2 家なき兒

4 父戀し

漫世のタシコブ

(一) ベンスケハ小學校をイウトウダツテアブシマシタガ、イヘノツガアテ中學校へユケナイノラヒクワンシテ、ガヘナガアラルイテキマシタ。



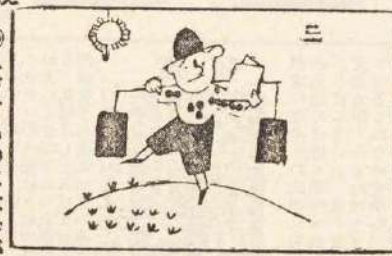
小學校卒業後
イロ／＼ナ事情ア上ノ學校へ行ケナイシヨム、今日ハ大日本國民中學會へ入會シテ日本一ノ中學講義ヲ勉強ナサイ。

(二) ソシテテナンチユーニイヤトイウホドアタマアツクマシタ。ソシテオ、キナコアチコシラヘマシタ。ベンスケ「アツイタイオ、キナコアガテキタゾ」オ、ナニカ、カイテアルゾ「ホンテミヨウ」

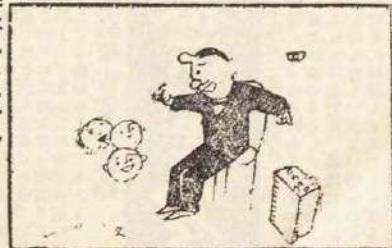


僅か一ケ年半で中學卒業の學力と資格が得られる。

(三) シブアンノカデ、リツパニ中學ガソツケフデキルドクガクシヤノ、ミカタ、大日本國民中學會「トソコニカイテアツタノデス。ベンスケハ、コーキロクテベンキヨウチハシメマシタ。



(四) サワイウラケテ、ラタシハシニツセラシタノデス。アカラマシニハ、コノダンゴアトコノ、コーキロクガ、タカラデス。トアコマセンセイガ、オウシセイマシタ。



◎入會するには今が一番好いときてす
講義録見本の規則書申込ッ無代で送呈

東京 駿河臺

大日本國民中學會

振替東京四二〇〇番 電話神田二二二一

四六判箱入美本

内容二五〇頁

定價金壹圓貳拾錢

送料十錢

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編十第	系大傳人偉 編九第	系大傳人偉 編八第	系大傳人偉 編七第	系大傳人偉 編六第
コロムブス	英雄。ピーター大帝	大楠公	ワシントン	ナイチンゲール
三井信衛先生著。廣い大西洋に小さな船を浮べて、遂にアメリカ大陸を発見したコロムブスの勇壯な物語です。四面海にかこまれた日本國の少年少女に、是非讀んでいただきたいと思ひます。	大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシアを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化極りないピーター大帝の物語です。	三島露川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感ずるでせう。面白くてそして本當の正成のお話が解る本です。	三井信衛先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。	入交福一郎先生著。女神様のやうに氣高い心を持つたナイチンゲール嬢の一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になります。少年少女の爲に書きたはじめての本です。
錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編五第	系大傳人偉 編四第	系大傳人偉 編三第	系大傳人偉 編二第	系大傳人偉 編一第
太閤秀吉	リンコルン	ネルソン	英雄。シーザー	シヤンヌダルク
三島露川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。	久米敏一先生著。最も優れた立志傳として、この「リンコルン傳」をおすすめする。紙一枚、ペン先一ツ買へぬ貴しいリンコルンが、如何にして大統領の地位を勝ち得たか。本書を讀まねば一生の不韋である。	三井信衛先生著。トラファルガアの海戦に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。	露田史光先生著。シーザーは古代の大英雄である。世界歴史を遊じてシーザー程の英雄は幾人と数へる程しかない。そのシーザーの變化極りない運命を書いたのが本書である。	大本庄三先生著。有名なオレアンズの少女シヤンヌ、ダルクが奮ひ立つて祖國を滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたたり、涙ながる、悲劇的物語である。
錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送	錢十九金 錢十金料送

しなのもるゐてれさ唱愛ごほ集譜曲の社本

集譜曲謡童星の金

錢六金料送・錢拾八金下以輯三・錢拾六金各輯二輯一

第一輯	人買船	本居長世作曲 野口雨情作詞	人買船、青目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん
第二輯	一つお星さん	本居長世作曲 野口雨情作詞	一つお星さん、七つの子、馳と雀、鶴さん、象の鼻、四丁目の犬
第三輯	青い空	本居長世作曲 野口雨情作詞	青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼蟲、雀の酒盛り、呼子鳥
第四輯	赤い靴	本居長世作曲 野口雨情作詞	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、結拾山、朝鮮船屋、眠り龜の子
第五輯	夢ごり	小松耕輔作曲 野口雨情作詞	夢ごり、おしやれ橋、つげ子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織
第六輯	子守唄	本居長世作曲 野口雨情作詞	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、意坊主、藪の下道
第七輯	お人形さんの夢	本居長世作曲 野口雨情作詞	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霧柱
第八輯	べんべん鳥	小松耕輔作曲 達崎龍作詞	べん／＼鳥、螢のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蜻蛉、さみだれ
第九輯	あの町この町	中山晋平作曲 野口雨情作詞	あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、證誠寺の狸囃
第十輯	名所めぐり	本居長世作曲 野口雨情作詞	長柄の橋、柱ぐり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳給、石山寺の秋の月
第十一輯	夢のお國	藤井清水作曲 野口雨情作詞	夢のお國、兎が来い、赤い櫻ンぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の敷
第十二輯	俵はころ／＼	本居長世作曲 野口雨情作詞	俵はころ／＼、歌の中、高の衰蔭、狐の提灯、つまらない、小石
第十三輯	しやんこ／＼お馬	藤井清水作曲 野口雨情作詞	しやんこ／＼お馬、おめ／＼とおて、お留守、子供は風の子、因幡の白兎、秋の夜

英國汽船ネーブルス號が伊豆の海で沈没した時、救助した春日艦長太田大佐の勇名は、世界に鳴り響いてゐます。（沖野先生の童話「沈没したネーブルス號」をお讀みになつた方は、皆さん御存知です。）その日本の勇士太田大佐は沖野先生著、童話讀本第四卷「海を越えて」に對して左の言葉を寄せられました。

貴著「海を越えて」唯今紀州沖航行中に拜見致しました。結構な本で、随分世の爲、人の爲になるものと思はれます。吾の微力も御影で何かの御役に立つのを光榮とし、著者に對して特殊の敬意を表します。

昭和二年四月廿八日午前

春日艦長

太田資平

沖野岩三郎先生著・寺内萬治郎畫伯 裝幀・挿畫

童話讀本

四六列箱入美本
内容二〇頁
定價金壹圓
送料十錢

第五編 孝行息子（近刊）

第一編 赤い猫

第二編 金のつるべ

第三編 笛吹川

第四編 海を越えて

刊 書叢大五の社蘭金 編

世界童話叢書第十編
仲木貞一編 池上浩裝幀
アメリカ童話集

世界名篇物語叢書第十五編
加治亮介編 高坂元三裝幀
モン・トクリスト伯爵
(岩窟王)

少年少女文藝講談叢書第十編
加治亮介編 池上浩裝幀
大久保彦左衛門

少年少女科學大系第六編
松平道夫著 池上浩裝幀
兒童動物學(下)
(昆蟲の部)

未完
最新動王志十物語叢書第二編
川名芳朗編 池上浩裝幀
櫻田門の變

四六列箱入美本
本文三〇〇頁
原色版 四〇枚
凸版刷挿畫二十枚
定價金一圓五十錢
送料 十二錢

四六列箱入美本
本文一八九頁
原色版 二枚
凸版挿畫十枚
定價金九十錢
送料 十二錢

四六列總タロース
原色版カダア附
挿畫三色版外十頁
本文一七六頁
定價金一圓
送料 十二錢

四六列總タロース
ドイツ式裝幀
本文一九六頁
定價金一圓
送料 十二錢

四六列箱入美本
本文一六九頁
原色版 二枚
凸版刷挿畫豐富
定價金一圓
送料 十二錢

アメリカには童話がないなどと今までは思はれてゐたのは大きな誤りでありました。總てに於て現代文化の先驅をなすアメリカにはアメリカへでなければ到底、創造する事の出来ない、全く獨特な童話を持つてゐます。
次刊「スペイン童話集」

子供が讀んでも大人が讀んでも、世界中で一番面白い小説は、このモン・トクリスト伯爵です。ニゴオのミゼラブルが傷める魂の淨化劑であるならば、デュマのモン・トクリスト伯爵は、傷める魂のための勇氣と満足と與へる強心劑と云へるでせう。次刊「ナポレオンを捕へる」

徳川幕府三百年を築きあげたのは一つには大久保彦左衛門あつたればこそであります。ともすれば魯莽の入りうとするその土臺を、絶えず固めに固めて來た彦左衛門の努力は全く派が出来る程であります。庄ひたちから大往生まで奇傑彦左衛門の眞生一代記です。次刊「會呂新左衛門」

さながら人間社會のやうに、秩序整然とした蜂の世界や蝶の生活、生れてから死ぬまでに、スツカリ形を變へてしまふ蝶の一生。はては、わづか三日で其の生命を終へると云ふ蝶に至るまで、興味と智育とを兼ねた絶好の昆蟲物語です。(次刊「兒童動物學」)

榮えに榮えた徳川幕府も、時勢の力にはどうする事も出来ず、次第に其の勢ひの、衰えてゆく時、一人必死になつて幕府の爲を計つた井伊掃部頭も遂に水戸浪士の爲に櫻田門の雪の中になふれてしまひました。其前後に續く勤王と佐幕との猛烈な争闘を描いたもの。(次刊「新撰徳川」)



星の金

九月號

(通卷第九拾四號)

東 京 市 外 二 市 駒 上 野 區 東 上 野 三 丁 目 八 番 一 〇 七 一 六 京 東 替 振 電 話 小 石 川 六 五 六 番 五 番

川越し

作曲 本居長世

作詞 野口雨情

Andante M.M. ♩ = 132

Musical notation for the first system on page 1, including vocal line and piano accompaniment. The piano part starts with a *mf* dynamic.

Musical notation for the second system on page 1, including vocal line and piano accompaniment. The piano part starts with a *p* dynamic.

Musical notation for the third system on page 1, including vocal line and piano accompaniment. The piano part starts with a *p* dynamic.

三

Musical notation for the first system on page 2, including vocal line and piano accompaniment. The piano part starts with a *p* dynamic.

Musical notation for the second system on page 2, including vocal line and piano accompaniment. The piano part starts with a *f* dynamic.

Musical notation for the third system on page 2, including vocal line and piano accompaniment. The piano part starts with a *p* dynamic.

二

川越し

野口雨情

川を越すなら
浅瀬を越しな

一つ浅瀬は
小石で越せぬ

小石拾つて



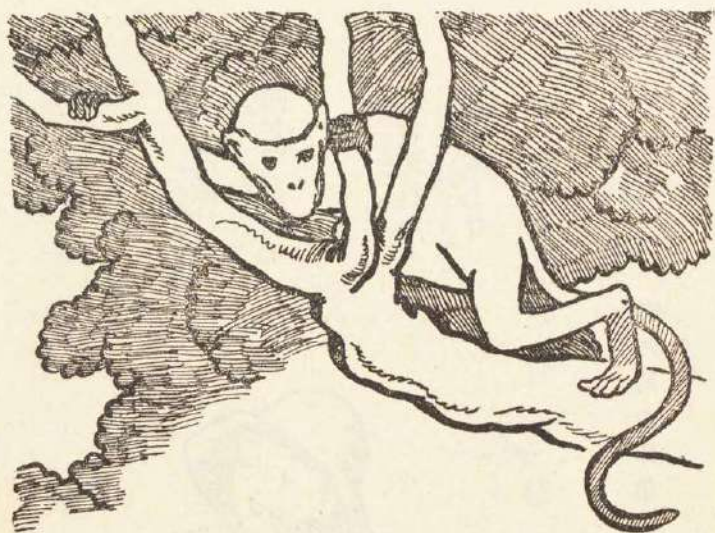
跣足で越しな

二つ浅瀬は
跣足で越せぬ

水の流れを
見て越しな
見て越しな



寺内萬治郎畫



取残された親類

沖野岩三郎

岩岡とも枝畫

六

これは何千萬年前のお話です。
鳥や獸の中で一番賢い猿が、木の上でこくりこくりと坐睡つてのますと、そのすぐ下で、うーつと恐ろしい唸り聲が聞えました。

びっくりして眼を覺した猿は、あわて、次の木にとびうつりますと、唸り聲は又その下から聞えまします。

何だらうと思つて、うつむいてみますと、それは此の山の中で、一番意地の悪い狼でした。

狼は五六尺とび上るだけで、木の幹を這ひ上つて

來ることは出來ません。けれども、どうしたものか、この狼に睨つけられる猿は、全身がちぢみ上つてしまひます。

「氣味の悪いやつが來やがつた！」

猿はそんな事を思ひながら、必死になつて枝から枝へ、幹から幹へと、大きな山を横ぎつて逃げました。ところが、今日に限つて意地悪の狼はどこまでも追つかけて來ます。

「何といふしつこいやつだらう！」

猿は腹が立ちました。けれども降りて行つて喧嘩をしたなら、負けるにきまつてゐますから、木の枝に坐つて、ちつと下を見ますと、狼もよつほど疲れてゐるやうです。

「よし、今一走り走つてやらう。さうすれば狼の野郎もへたばつてしまふにちがひない。」

猿はまた山の方へ木の上を走りましました。ところが狼も相變らず走つて來ます。

山の中程に大きな樫の木がありました。猿がその樫の木の大きな枝へ、ひよいととび移つた時、おりおりといふ音がしたと思ふと、ぼつぱり其の枝が折れて地上に落ちました。あつと思ふまもなく、猿も一緒におつこちました。大きな木の枝が朽ちてゐたのです。しまつたと思つた猿は、大急ぎで樫の幹に這ひ上りましたが、振り返つて見ますと、自分を追つかけて來た意地悪の狼は、四本の足を上にして地面の上に轉がつてゐます。おつこちて來た樫の枝で頭を打つて氣絶したのです。

「しめたぞ、あの狼がくたばつた！」

猿は地面に駆け降りて、手頃の石を拾つて狼に投げつけました。狼は足をひく／＼させるだけです。

「このまゝにして置けば、また生返つて來るかも知れない。どうかして息の根を止めて置かなきゃあけない。」猿はあたりを見廻しますと、そこに一本の手頃な棒ちぎれがあります。

七

「こいつで殴つてやらう！」其の棒ちぎれを握つて振廻してみましたが、どうもうまく振れません。その時、枝の上から、のそ／＼降りて来た一疋の猿がありました。

平生から意地悪ばかりする猿が倒れてゐるので、二疋の猿は、どうかしてこれを完全に殺してしまひたいものだと思つて、棒ちぎれを振廻してゐるうちに、ふと、一疋の猿がうまく其の棒を握ることが出来ました。それは親指にうんと力を入れる握り方でした。それまで猿は五本の指に平等に力を入れることしか知りませんでした。二疋の猿は大発見をしたやうに喜んで、さん／＼猿を打ちのめして置いて、うれしさうに山の上に歸りました。

殺された猿の仲間が復讐にやつて来ました。すると猿は木の上から、大きな枯枝を折つて投げつけます。ほん／＼とうまく猿の頭に当たります。

二疋の猿はだん／＼智慧づいて来て、今度は手頃

を見てびつくりしました。

「まあ、この子たちは、前の二本の手しか間に合はなくなつてしまひましたよ。もう後の手では何も掴めなくなつてしまひました。」と云つて母猿は泣きました。けれども子猿たちの前の手は親猿よりも、よつほど上手に物を掴めます。

孫猿が多勢産れました。洞穴にはかり住んでゐましたので、顔が白くなつて毛がありません。祖父さんや祖母さんのやうに、四ん這ひに這ひませんから、ぐん／＼身體の丈が高くなります。

其の孫猿の産んだ子猿、其の子猿の産んだ孫猿は、もう猿の仲間とは、ちつとも交際しなくなりました。それから何千萬年の後です。意地悪の猿が、猿と一緒に落ちて来た枝で、頭を打たれて死んだ山は、大きな都會になつてゐました。

其の樫の木は枯れてしまつて、其の孫の孫の孫の木が何丈といふ周囲のある大きな木になつてゐま

八
の石を木の枝に運びあげて置いて、猿が来ますと、それを投げつけます。猿はたび／＼ひどい目にははされます。たうとう其の猿は地の上に降りて来て、棒を振りまはして敵を防ぐやうになりました。

これだけでは、まだ不安だから、もつと完全な方法がないかと考へたあげく、一つの岩の穴を見つけてきました。そして其の穴の入口に木の枝で一枚の戸を造つて取付けました。そして、そこに住んでゐるうちに、二疋の猿の間に一疋の赤ちやんが産れました。親猿はこの赤ちやんを大事に大事に育てました。高い木の枝などに登らしては、落ちるかも知れないといふので、成るべく地面で遊ばせました。

三疋、五疋と猿の赤ちやんが産れました。けれどもみんな兄さんの真似をして、地面の上で駆けつこして遊びます。みんな這ふよりも立つて歩くことが好きになりました。

子猿たちが成長した時、親猿は其の後の二本の手

す。

その木の下で二人の人間が話をしてゐます。「君、デアウインといふ學者を知つてゐるかい？」「知つてゐる。あの男は吾々人間を猿の進化したものだと言ふ學説を立てたんだらう。」

「さうだ。僕も最初は、そんな馬鹿なことはないと思つてゐたが、讀んでみると、どうもデアウインの言ふことが本當らしいネ。」

「では吾々の御先祖様は猿かい？」

「まあさういふワケだネ。」

「さうすると、猿は吾々の親類だネ。」

「さうだ、山へ残して置いた親類だ。」

「その親類は、其後よつほど賢くなつてゐるのだからか。」

「ねえ、吾々人間はすん／＼賢くなつて、いろ／＼な発見や發明をするが、猿の智慧はどこまで進んでゐるか、一つ調べてみようぢやないか。」

「それは面白い。では明日から山へ行つてみようぢやないか。」

「よからう！」

そこで二人は更に二人の友だちを誘つて、深い深い山の中へ猿の性質を調べに行きました。

山にはたくさん猿がいました。四人の間は岩の穴に隠れて、猿の様子を見てみますと、一疋の猿が堅い木の實を拾つて来て、それを噛み割らうとしてゐます。ところが、どうしても割れま

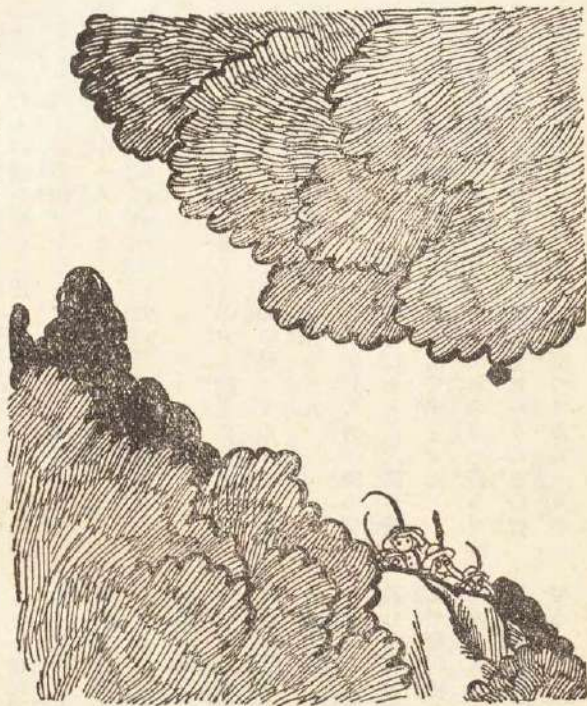


せん。そこで猿は一つの石を拾つて来て、それをこつこつとたたくきました。木の實は二つに割れて、中からおいしい白い實が出て来ました。

一〇

猿は、さもうれしそうに、それを食べましたが、拾つた石をどうするかと見てゐますと、それを木の幹の洞穴へ、そつと隠して置きました。

二三時間たつて、其の猿はまた戻つて来ました。そして前程



隠し置いた石を取出して、それで木の實を割つて食べます。四人は望遠鏡で詳しく見ました。猿の指の使ひ方は人間のやうではありません。五本の指を平均

ありません。の奥へ進みました。猿共を脅やかししました。

一一

にして物を握ります。親指にうんと力を入れることが出来ないらしい。

猿は又た其の石を洞穴に隠して置いて、どこかへ行つてしまひました。そこで四人は手帳へ、「猿ニハ簡易ナル手工ノ能力アリ。而シテ其ノ手工用ニ使フ道具ヲ所有スル觀念アリ。」

と書きました。同じ猿から出世した人間は、もう財産を持つといふ慾が大變に盛んです。物持にならう、金持にならうといふ考へで一杯ですが、人間から取残された猿は、まだ小石一つを木の穴に隠して置くといふ財産慾しかそれから四人は鐵砲をもつて、更に山



童 心 句 (その一) 野口雨情選

○水たまりお空がうつつて深さうだ
新潟 小林 高
評、雲もスイ〜動いてる。

○親牛が小牛の影をながめてる
神奈川 石川 雪花
評、ノツツリ〜ながめてる。

なが雨がやんだよ空は青々だ
長野 市川 美野流

松虫があついでと泣いて居る
新潟 會田 俊雄

○小穴からせみがけろりと顔だした
新潟 會田 俊雄
評、けろりと！なるほど。

殺される牛に仔牛がついて行く
福島 大内 憲二

おはぢきをどこからしませしよ空の星
群馬 青柳 花明

泥あそび喧嘩はしつこなアしだよ
群馬 青柳 花明

人間が妙な物を持って襲つて来たので、猿たちは大騒動です。みんな森の中へ隠れてしまひました。けれどもいつまでも隠れてゐては、お腹が空くので、また木の實を拾ひに出て来ます。

そこで四人は鐵砲をかついで、わざと猿の見える所から洞穴の中へ入りました。

猿は人間が洞穴の中へ入つたので、その洞穴をぞつと見てゐます。

一人の人間は洞穴を出て谷の方へ降りてしまひました。けれどもまだあとに人間の残つてゐることを知つてゐる猿は木の實を拾ひに来ません。

二人目が洞穴を出ました。そして谷の方へ降りてしまひました。けれども猿は、まだあとに人間が残つてゐることを知つてゐますから出て来ません。

三人目が洞穴を出ました。そして谷の方へ降りてしまひますと、猿たちはさも安心したやうに木の實を拾ひに出て来ました。ところが残つてゐた一人が

鐵砲をもつて出て来ましたので、猿たちは大あわてにあわて、森の中へ逃げ込みました。そこで四人は又た洞穴に入つて、前の通りに試してみましたが、何度か試してみても、三人目までは出て来ませんでした。けれども四人目の一人が、あとに残つてゐるといふことは知らないといふことがわかりました。そこで四人はめいめいの手帳へ、

「猿ニハ三個以上ノ數ノ觀念ナシ。」と書きつけました。四人は何千萬年かの前に、同じ仲間に取残された山の猿を尋ねて、それだけのことを知つて町へ歸りました。

(をばり)

自動車は足が痛いか動かない
神奈川 船貫 清子

月見草ひとりお月さん夢の中
東京 小林 一路

捨てられた仔猫チラ〜星が出た
東京 小林 一路

涼臺一家そろつてこしかける
東京 福島 正夫

夕ぐれだどろぼう蜘蛛が巣をかける
東京 宮内 清二

おだんごを十五夜月さん眺めてる
東京 高木 ひかる

澤の家螢があかりをつきました
東京 河合 英太郎

○雨蛙穴い入つて雨じたく
新潟 霜田 和芳
評、雨蛙「もう降りさうなのだが」

露呑んでほたるが光ると云ふ話
京都 島村 保雄



一 王國を争ふ

小島政二郎

岡本歸一畫



四

一四

僕は間もなく、かなり重大な事件にぶつかつた。それは、僕の進んでゐる道が、登り坂になつた荒地の間を通つて、行く手は細く擦の林の中へ消えてゐる——丁度その坂の半分も登つたと思はれる頃、ふと林の中から一人の男が道の上に出て來た。よく見ると、その男は金糸でベタ一面に飾りを附けた服を着て、その金糸が太陽の光線にキラ／＼耀いてゐた。大分に酔拂つてゐると見えて、あちらへひよろり、こちらへよたりと、覺束ない足取で歩いて來るのだった。彼は片手を耳の傍へ舉げて、その首のまはりに巻いてゐる大きな赤いハンケチを握り締めてゐた。

僕は、馬の手綱を引き留めたまま、その男をいやな氣持で見守つてゐた。あゝして金びかの服を着た。すると、いきなり彼は、わつと喜びの聲を擧げたかと思ふと、どうしたのか、その拍子によろ／＼と前へのめつて、パツタリ地面の上へ倒れてしまつた。そのはずみに、今まで抑へてゐた両手を放したので、赤いハンカチだとばかり思つてゐたものが、大きな傷口であることを僕は發見して驚いた。首筋から肩の上へ、まるで肩章のやうに血の塊が垂れ下つてゐるのだった。

「あッ！ どうしたのだ。」

思はず叫ぶや否や、僕は馬から跳び降りた。

「しつかりし給へ」と、後からそつと抱き起しながら、「僕はまた、君が酒にでも酔つてゐるのかと思つてゐたものだから——」

「酔つてゐるどころか、僕は死にかけてゐるのです。」悲しく彼が呟いた。さうして、僕の顔を見つめながら、「しかし、まだ息のあるうちに、佛蘭西の士



男が、しかも白晝酒に酔つて、ひよろ／＼して歩く姿は變なものだつた。彼は時折立ち停つては、僕の方を眺めて、又よろ／＼と近附いて來る。……僕は、かまはず馬を進めて彼の傍を通り抜けようとし

一五

官に出逢つたとは、何と云ふ有り難いことだらう。」
僕は、彼を傍の草の中へ寝さすと、ポケットの中のブランドイを彼の口の中へ、少し流し込んでやつた。幸ひなことに、僕達の周囲は廣々とした青い平野が打ち開けてゐるばかりで、人影一つ見えなかつた。

「一體誰に、そんな目に會はされたのです。貴方はどうした方ですか。貴方は佛蘭西人のやうだが、それにしちや服が妙ですね。」

「これは、新近衛兵の服です。僕は、シャトー・サントルノー侯爵です。僕は、一族の中で、佛蘭西のために死ぬ九人目の男です。僕は、ルッオーの夜警隊のために追ひ駆けられて、負傷したのですが、苦痛を掠へて、あそこの森の茂みに隠れてゐて、佛蘭西人は通らないかと待つてゐたのです。最初の間は實は貴方が、敵か味方か、分りませんでした。しか

し、もう僕の最後も近いと思つたので、大いに冒險的に出て来て見た譯です。」

彼は長い話に疲れたか、黙つて目をつぶつた。僕は慌てて耳に力強く叫びた。

「君、元氣を出し給へ。僕は、今までにこれ位の傷をしても、大丈夫直つて、今だにその傷痕を自慢にしてゐる男を澤山知つてゐますよ。」

「いゝえ」彼は微かに首を動かした。「もう、僕はとても駄目です。」

彼は、かう云ひながら、僕の手の上に、彼の手をしつかり重ねた。見ると、もう、彼の指の爪は青くなつてしまつて、血の温みもなく、氷のやうに冷たく顔へてゐた。

「實は——實は僕はここに、——この上衣の内懐に、手紙を持つてゐるのですが、これをあなたは、すぐホフ城のサクス・フェルスタイン親王の許へ持

参して下さい。親王はまだ我々の味方ですが、妃殿下の方はもう心底からの敵なのです。若し親王までが、敵になつてしまへば、現在どつちつかすにゐる人達までが、みんな敵になつてしまふのは知れ切つてゐます。プロンヤ國王は親王の叔父ですし、ババリア國王は親王の従弟なのですから。……若しこの手紙が、最後の決心をされない前に到着したら、きつとこの儘親王は我々の味方となつてゐてくれるでせう。この手紙を、今夜中に、親王に手渡しして下さい。さうすれば、あなたは必ず全獨逸國を陛下の味方にする事が出来るでせう。——それにしても、僕の馬が射ち殺されてさへゐなかつたら、ナーンノこれしきの傷ぐらゐ……。」

云ひかけて彼は、激しく咳き込むのだつた。冷たい手がぐつと最後の方で僕の手を握り締めた。さうして、一つ呻いたと思ふと、彼の頭はグツと後へ退

け反つてしまつた。それツきり、もう彼は辭れてしまつたのだ。僕は暫くこの新しい健氣な友人の亡骸を抱いてゐたが、やがて靜かに柔い草の上に横たへた。

五

僕はここに、全く新しい使命を負はされたのだ。その使命を遂行しようと思へば、いやでも、我全輕騎兵が、一日も早く欲しがつてゐる新馬を連れて歸る日が幾日か遅れなければならない。と云つて、サントルノー侯爵から委任された使命も、それを振切つて行つてしまへる程どうでもいゝ任務ではなかつた。いや、容易ならん重要な使命である。僕は咄嗟に決心した。

そこで僕は、侯爵の上衣の釦を外した。この美事な制服は皇帝が特にこの青年貴族に、新らしく近衛



聯隊を編成させるために選み與へたものであつた。僕が彼の内懐から引き出したのは、小さな銀糸で縛つた紙包みで、上書はサクス・フェルスタイン親王宛になつてゐた。さうして、隅の方に華かな濃刺とした陛下のお手で、「至急重要」と書かれてゐた。この見覚えのある四字は、僕に取つては直接の命令と同じだつた。

あの灰色の瞳で僕を見詰めながら、端然とした口許から、直接云ひ渡されたかのやうに、僕にははつ

さり響いたやうな氣がした。

「さうだ。」

思ひ切つて立ち上つた僕は、馬の息の續く限り、僕の息の根のある限り、今夜中に必ず、この手紙を親王の手に渡さなければならぬと、決然たる覺悟を以つて馬に飛び乗つた。

しかし、今度は森の中の道などに馬を乗入れることは躊躇しなければならなかつた。僕が西班牙の暴動から受けた經驗から云へば、かうした暴徒の出る國を通るのに一番安全なのは、彼等が虐殺を行つた後である。何も彼もが平和さうに見える時こそ、却つて一番危険の多い時である。そこで、僕は地圖を出して調べて見た。ホフ城は、すつと南方に當つてゐて、野原の中を通つて行つても行けることを確め得た。

僕は馬の頭を立て直した。さうして一息に二百碼



も進んだと思ふ頃、突然後の繁みの中から、二發の銃聲が起つた。と、間髪を入れず、銃丸が蜂のやうな唸りを立て、僕の耳を掠めて飛んだ。この夜警隊の奴等は、あの西班牙の暴徒なんかよりは、確に遣り方が大膽である。

それにしても、若し僕がこの野の道を選ばなかつたなら、森の中へはひるや否や忽ちやられてゐたに違ひない。

僕の進み方、それは全く無茶苦茶の疾驅だつた。手綱を弛めて、顔をピオレットの鬚に附けるやうにして、馬の膝を没する程の、草木の繁みの中を通り、川を飛び越え、小山の腹を駆け上り駆け降りて行つた。

僕の愛するピオレットは、しかし一度だつて、滑りも、躓きもしなかつた。

まるで僕が全佛蘭西の運命を握つてゐるのを知つ

てゐるかのやうに、僕の心にピツタリ叶つて、思ひのままに自由に馳けてくれた。僕は今日まで、輕騎兵六個旅團の中でも、一番しつかりした騎手だと云ふ定評は得てゐたが、この時程亂暴に馬を進めたことは一度だつてなかつた。
 一直線に飛んで行く僕達を見て、空の野鳩も驚いたらう。

六

日が漸く暮れようとする頃、僕はロベンスタインと云ふ小村の中へ駆け込んだ。さうして砂利道へかゝつたと思ふ間もなく、ピオレットの足から蹄鐵が一つ落ちてしまつた。仕方なしに、僕は馬を降りて村の鍛冶屋へ曳いて行かなければならなくなつた。鍛冶屋はもう一日の仕事を終つて爐の火も小さくなつてゐた。

二〇
 これから新らしく鐵を灼いて仕事を終るまでにはどうしても一時間はかゝると云ふ。
 僕はこんなことで、一刻でも時間の遅れるのを呪ひながらも、外に方法がないので、その間に村の宿屋へ行つて、急いで夕食を済まさうと考へた。氣がつくと、僕の腹は急に激しい空腹を訴へ出した。
 一軒の宿屋を見附けて、食事を命じた。待ちながら、ここからホフ城までは、もうあと僅か二三哩しかないことを知つた。どんなことがあつても、今夜中に親王に手紙を渡して、明日は朝早く、陛下への返事を持つて、本國へ歸らなければならぬ。そんな風に、僕は一人で胸の中で豫定を立てゝゐた。ところが、思はぬ災難がこのロベンスタインの宿屋で僕の上に降り掛つて來たのだ……。

(つゞく)



童 心 句 (その二) 野口雨情選

麥刈れて雲雀が引こししていつた 神奈川 原田小太郎
 大川ではやが一匹とび上り 長野 戸部 貞夫
 お月様きげんがよいとまんまるだ 東京 近藤 圓男
 お月様を横目でフクロがながめてる 東京 山田 次郎
 かな〜を聞けば母様戀しくて 神奈川 新倉しげる
 蝶の羽化けて出たよな晝の月 秋田 近藤 恭太郎
 せなの上げしき見ながら行く子猿 宮城 清水 初子
 蝶々が蚊帳釣りに草に寝むつてる 東京 笠原 掃火
 啼く雀舌を切られた夢を見た 東京 上田 弘一

〇アンテナにとんぼとまつた夏の晝 北海道 三浦 一
 晝、聞えるかえ、とんぼ!

提灯を水に濡らすな豆螢 東京 林 智雨
 五月雨や絹のすじ引く野へ山へ 山形 坂部 作平
 暑いので植木にお水をやりました 名古屋 島本ヒデ子
 日が暮れたお寺の門もしめられた 東京 増田 梅吉
 五月雨や佛の花を捨てにぬる 山梨 望月 芳子
 梨の子は袋の中でねゝしてる 茨城 内田みわ路
 此の雨に眠れねん〜ねむの花 秋田 近藤 恭太郎
 風鈴さん風に吹かれてすゞしかり 東京 中村 武男





霧の悲劇

北村壽夫

川上四郎畫

SHIRO

三松先生が山へのぼつたのは、もう二十年ほど昔でありました。長い長い二十年の年月、先生の生活はどれほど寂しい心細いものであつたでせう。そこは臺灣の、とある奥深い山の中でした。山の奥の静かな谷川のそばでした。目に見えるのは森々と生ひしげつた、熱帯の植物の密林、耳にふれるのは人無き里を流れる心悲しい水の歌です。林には名の知れない怪しい鳥が、時をり、びつくりするやうな羽ばたきをして先生の夢を驚かしました。先生は、そこに小さい小家をたてて、山の中の番人の子に學問を教えてゐたのであります。

そこにすんでゐるのは恐ろしい生蕃たちでした。好んで人の首をとつて喜ぶといふ鬼のやうな生蕃！その中へとびこんで、先生は、ひとり恐れる様子もなく、尊い學問や物の教えを與えひろめてゐたので

ありました。

二十年の昔、こゝへ来た時のことを思ふと、先生は夢でもみてゐるやうでした。見も知らぬ内地人がひとりこの山の中へすみ始めて、小家を作つて生活しだしたのです。近い山の蕃社の生蕃たちが、我も我もと先生の首一つをねらつたのは言ふまでもありません。

どうして命を助つてきたか。それは三松先生にも不思議でたまらないくらゐでありました。先生の神のやうに熱い情が、心ない野蕃人たちにも少しづつ解つたお蔭でせう。先生の大きな愛のお心が、彼等にも、日に日に、感じられてきたからに違ひありません。番人の村に病人が出來ると、先生は、夜でも夜中でも、遠い道を出かけていつて、持つてきた薬をのませたり、按摩してやつたり、元氣をつけてやつたりしました。そして先生のところへ來る小さい子供たちを、遅くなると、おんぶして、わざわざ家

まで送つていつてやつたりしました。それら、文字を知らない蕃人でも自分の子の可愛さは知つてゐます。かうして、一年たち二年たち、三年たちするうちに、三松先生は、すっかり蕃人たちに知られて、たいへん尊ばれるやうになつてきました。先生の評判は山の部落中にひろがりました。そして、今日では、もう何の心配もなく、先生は山の住人として、蕃人たちとも、仲のいいお友だちになつてゐました。生蕃の子供たちも、かなり多く先生のところへやつて来ました。子供たちは、先生から日本の本を習ひ、日本の地理をおそはりました。首をとることの悪さや、野暮ないろいろのことの悪さを教へられ、そのかほりに、愛といふことの尊いことや、親切といふことの大切さを教へられました。子供たちは、日に霞の消えていくやうに、心の暗がとれ、明るい希望や、善い心の目ざめを覚えてゆくやうになつてきました。

たしには神に命せられた仕事がある。わたしは、この山で生き、山の中で死んでいかう。死ぬまで仕事につくさなければならぬ……」

雨の日も風の日も、先生の學校は休みませんでした。子供たちも、倦きもしないでやつて来ました。みんな先生の優しいお顔が見たいからでした。先生の善いお話、尊いお教えがうけたいからでした。子供たちはばかりではない、時には蕃社の大人たちへもやつてきました。そして、うれしさうに、ここにしながら、先生のお話をきき、先生といつしよに唱歌をうたひ、また、元氣よく體操をしました。

先生は、たつた一人で暮らしてゐるのです。でも蕃人たちは、毎日かほりあつて、いろいろの野菜や果物を運んできました。それほど先生は懐かしまれ、敬まれてゐたのでした。山の太陽——これが彼等の呼名でした。山の太陽といへば、山の生蕃たちは、子供でも大人でも、みんな知つてゐました。

二四

三松先生——この人は山の新しい太陽になつてゐました。そして、先生のお蔭で、二十年たつた今では、山の部落には首をとる事件などは起らなくなりました。心なしか、部落と部落との争ひも喧嘩もめつきり数がへつてさへ来たやうでした。

先生の喜び、それは、どれほどだつたか知れませんが、けれど、時々、水溜りに映る先生のお顔を見ると、先生は、自分ながら、長い長いその苦勞を思ひました。山へのぼつたとき、まだ、三十才そこそこの若い青年であつた先生の髪は、もう、雪のやうに眞白く、顔にはいくすじかの深い皺が、まごまごとして、先生の白い額にさざまれてゐるのです。

「わたしも年をとつた……」

先生は、さう思つて寂しく笑ひました。

が、自分の尊い大きな仕事を思ふと、先生は、また青年のやうな若々しい心に返つて吐くのでした。「弱つちやいけない。これからだ。これからだ。わ

二

が、あるとき、一つの出来事がありました。それは、悲しい、心から悲しい出来ごとでありました。

この山の中に五つばかりある蕃社の中で、Iといふ蕃人の部落とKといふ部落とがあります。Iといふ蕃社は、昔から大きな部落で、すんでゐる蕃人たちの数も多いし、そのためにいちばん勢力がありました。けれど、K蕃社のほうは、人の数も少ないし、いたつて、力の弱い部落でありました。

けれど、どうしたものか、この二つの蕃社は、遠い昔から、おたがひに、仲がわるいのでした。おなじ兄弟の中でも、仲のいい同志わるい同志があるやうに、この二つの部落もどうも、氣があはないのでありました。

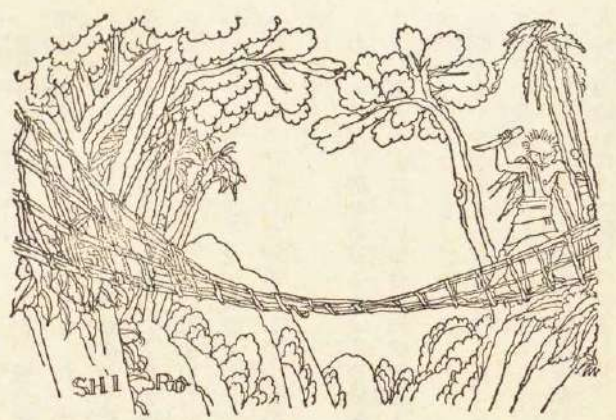
でも、三松先生のお教へのおかげで、このごろで

は、よほど善くなつてゐました。先生のところへ通つて来る子供たちは、Kの村の子供もIの村の子供も、まるで、ほかの子供たちと變りなく仲善く遊んでゐるのでした。

でも、ある日、とうたう、ふとしたことから、二つの番社は、昔のやうに、喧嘩を始めたことになりました。

先生のところへ通つてゐるI番社の子供の中に、林といふ、とてもいたづら坊主がをりました。仕末にをへない悪たれで、友だちを苛めたり、女の子に通せんぼをしたり、毎日毎日、わるいことをしないことはありません。先生は、でも、決してこの子を憎まないで、特にだじにして、善い子供にしてやらうと骨を折つてゐるのでした。

ある雨あがりの夕がたです。学校が終つて、子供たちは、そろつて、自分の部落のはうへ歸つていきました。その途中に、深い一



しまつたのです。そのナイフは、林の父親が、だいに、

だいに、
に家の
寶とし
て、藏
つてを
いたの
です。
林は
そつと
父親の
目をぬ
すんで
持ちだ
して來
ただけ

つ谷があつて、谷の上に細い蔓の釣橋があります。そこへ來ると、林といふいたづら坊主は、とつとつと、まつさきに一人、橋をわたつて、みんなの渡らない前に、いきなり、ナイフを出して、ぼつりと釣橋をきり落してしまひました。

さあ、たいへん、橋がなくなると、K番社の子供達は歸ることができません。Iの番社からは、その日林といふ子ひとりしか學校へはこないのです。残された子供たちは、谷のこちらで聲をあげて泣きだしました。林は、むかうがはで、それを見ると、手をふつて喜んでゐるのです。K番社の子供たちはどうしようかと、暫らく途方にくれましたが、しかたがなく、みんな揃つて、また、三松先生のところへ歸りました。その様子を見ると、林は、また大喜びで、大聲をふりあげて罵つてゐました。

が、林にも、たいへんな事が起りました。ほかでもない。あまり喜んだ拍子に、ナイフを谷に落して

に、びつくりして、青くなりました。が、谷はきりたつたやうで、下へ探して降りるわけにいきません。そのうちに、何を考へたのか、林は、いそいで、自分の村へかへつて、父親に、

「Kの村の奴らが、おいらのナイフを取つてしまつた。三松先生が、とれとれつて、あいつらにすゝめたんだ……。」

さう云つて、泣きだしました。「え、あのナイフか……。」父親はびつくりして顔の色をかへました。が、そこは野蕃人のかなしさには、深く、物を考へる頭がないので、いちづに我が子のいふことを信じてしまひました。

「なせ、ナイフを持つていつた。」と、子供を叱ることも忘れて、父親はまつかになつてどなりました。「さうか、悪い奴らだ、K番社の奴ら、これから行

つて、皆んな首をとつてやる……。」

怒りきつた林の父親は、すぐ、飛びだして自分の部落のすみからすみへ知らせました。すると、何しろ、昔から、仲の善くないI蕃社の子供たちが、自分の蕃社の子供のものを盗つたといふので、I蕃社の人々はたいへんです。蜂の巣をつついたやうに、めいめい、目を血走らせて叫びました。

「やつつける。やつつける。あいつらの首をとつて来よう……。」

わつと、関の聲をあげると、I蕃社の強い、鬼のやうな蕃人たちは、いつせいに、刀をとつて立ちあがりました。

「先生もやつてしまへ。あいつらに、すゝめるなんてひどい先生だ……。」

蕃人たちは、さう、口々にとなりながら、いつさんに、學校のはうへ馳けつけました。

「おいらが案内する。ついて来いよ。」

びつくりして先生はき、返しました。

「首をとりに……なぜ……？」

「なぜつて。林といふ子供の子供のナイフを、こゝにある子供たちがとつたと言ふんです。それを、先生もとれとれつて勧めたつてね……。」

男は、さう言ひました。

先生は、子供たちに聞いてみました。が、子供たちは、恥かしかるかと思ひのほか、口々にかう、叫びました。

「うそです。林の奴。橋をきつて、自分でナイフを谷に落しちやつたんです。あいつ叱られるもんで、父親にうそをついたんです。きつとさうです……。」

そこにゐる六人の子供は、男の子も女の子も、目に涙をためて、口惜しさうに、言ふのでした。

「さうか……。」

三松先生は悲しいお顔をなさいました。そして、深い溜息をつきました。

林は、いばつて、先頭にたちました。

「それ、いけ。急げ……。」

蕃人たちは氣ちがひのやうでした。

三

橋を落された子供たちから、その話をきくと、三松先生は困つやうに腕組をして考へこみました。もちろん、一里ばかりさきに、一つの橋が、あります。しかたがなければ、子供たちをつれて、そこからI蕃社まで送つてやらうと考へたときでした。

恐ろしい噂をきいて、いつさんに知らせに來てくれた、ほかの蕃社の男が、齒の根も合はないで、口早に告げました。

「先生。た、たいへんです。I蕃社の奴らが、この子供たちの首をとるとやつて來ます。先生の首もとると言つてます。」

「えつ……。」

「先生。早く逃げなさい、I蕃社の奴ら、もう谷のところまできて、いつしんに橋をかけたてます。木を横にすりや、すぐ渡つてこられます。」

知らせにきた男は、息をはづませて云ひました。

「そら、お聞きなさい。関の聲がきこえる。」

なるほど、遠く、凄まじい関の聲がきこえてきます。ぐずぐずしてゐると、この子供たちは、みんな殺されてしまふでせう。

先生は、深く、うなづくくと、土間のすみにかけてあつた古い一つの獵銃を手に取りました。そして、それに、弾をこめて、子供たちに言ひました。

「さあ、先生のあとからついておいで。」

先生は、走りだしました。子供たちもあとから續きました。深い深い霧の中です。みんなは、呼びかはずながら、いつさんに谷のところまで走つてきました。いつしようにけんめいに橋をかけてゐたIの蕃人たちは、これを見ると、わあつと関の聲をあげて

迎へました。

「あつ！ 先生が銃をもつてる。おれたちを打ち殺すつもりなんだ。」

と、谷のむかうの一人が叫びました。

すると、騒ぎはさらに大きくなりました。

先生は谷のこちらから、しきりに、ナイフをとつ

たのはこの子供たちでない、と言ひました。けれど、I蕃社の人々は、耳にもかけません。

「首をよこせ。首をとつてやる。」

と、ののしるのです。

「どうしても首をとる氣か。」

と、最後に先生がききました。

「さうだ、許しつこない。」

と、むかうで答へました。

先生は、決心して、銃をとつて覗ひをさだめました。そして、引金をひきました。ズドンと物凄い音がすると、谷の向ふの蕃人たちは、わつと大騒ぎを

して、身をひきました。

が、僅かの霧の晴れ間から、のぞいたとき、そこに、どんな光景が現はれたでせう！

先生が倒れてゐます。先生は、銃を自分ののどに向けて引金をひいたのです。先生は、一發で、全く命を失つてゐました。

「わあつ…」

といふ、叫びが、山を震はして起りました。

「先生。先生。」



ついで來た子供たちは、泣きながら先生にすがりました。と、不思議なことに、谷のむかうの蕃人たちは、とつさに刀を捨てて、地べたに坐つてみんな、氣が違つたやうに泣きだしました。

「かんにしてくれ。先生……」

「おれたちが悪かつた。悪かつた…」

山は、暫らく、泣き聲と叫び聲で風の音も聞えないほどでした。霧がまた降りて、この尊い、神のやうな先生の骸を白い霧でかくすやうに包んでしま

ひきました。

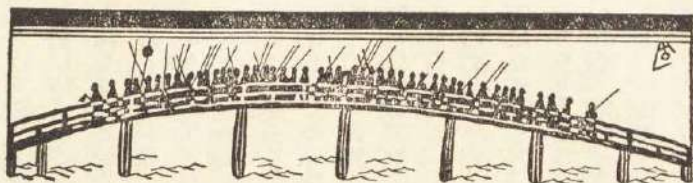
I蕃社の人々は橋をかけて、Kの子供たちを渡して、親切にその村まで送

つてやりました。が、林といふ子供はその晩、先生を學校へかつぎこんでか

らも、一晩中、人一倍大聲で悲しさに泣きつゞけてゐました。(をばり)

泣きつゞけてゐました。(をばり)





大石主税

三島霜川

羽鳥古山畫

十、泉岳寺

(前巻までの概略は
一三二頁にあります)

三二

主税の飛込む穴は、かなり、奥の方まで、つゞいてみました。

瀬左衛門、岡右衛門なども、主税につゞいて、すぐに飛込みましたが、しかし、上野介は、この穴にも、隠れてのませんでした。

「居ない。」

主税は、ほつと、ため息を吐きました。三人ともに、がっかりして、べそを掻きさうになりました。張りきった力も、抜けて了ふやうでした。

「いよく、討洩らして了ったのでしょうか。」

と、主税は、泣出しさうな聲でした。

「たぶん、そんな筈はないと思ひますが。」

と、岡右衛門は、無理にも、さう思ひたくないといふやうに云ひました。

「とにかく、愚圖／＼してゐては、夜が明けて了ひ

ます。」

と、瀬左衛門は、たゞ、いら／＼してゐました。

三人は、直ぐに穴から出ました。そして、また、大勢と一緒に、邸ちふを探し廻りました。けれども、やはり、上野介の姿は見つかりませんでした。

「いよく、駄目だ。」

と、四十七士は、皆な、がっかりして、一同、大廣間に集まりました。そこで、「かんじんの敵を討洩らして了つては、もうこれまで／＼ある。打揃つて、腹を切らうではありませんか」

と、云ふ者さへ出て來ました。

けれども、内藏助はまだ、「さうしましょう」とは云ひませんでした。また、吉田忠左衛門は「まあ、まあ、落ちついて、夜が明けるまで探さうではありませんか。夜が明けても、まだ、敵が討てませんでしたら、明日、一日ちふ、こゝに、ぐわん張らうではありませんか。いづれにしても捨てる命です。」

と、りん／＼たる勇氣で、大勢を勵ました。それで、一同は、ふた／＼び、元氣を出して、上野介を探し出しました。

それから、間もなく、間十次郎と、武林唯七とが、物置小屋で、怪しい人影を見つけました。そして、間十次郎が、まづ、槍をつけました。

そこへ、吉田忠左衛門がやつて來て、手燭(てんく)に照らして見ると、そいつは、絹の白無垢を着た六十ばかりの老人でした。その頃、白無垢をふだん着にしてゐるのは、身分の高い人に限つてゐました。それで、その老人が、上野介だといふことが解りました。

忠左衛門は、すぐに、その事を、内藏助に知らせました。内藏助を始め、一同は、物置小屋のところを集まつて來ました。四十七士は、ズラリと上野介を取巻きました。上野介は、鼠(ねずみ)路(ろ)にかゝつた鼠の

三三

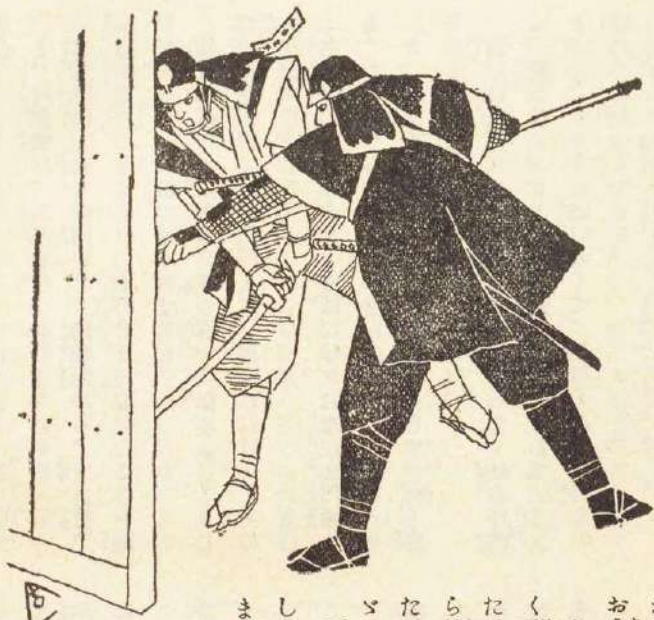
やうになつて了りました。しかし、四十七士は、わ
いよいよ云つて、むやみに、上野介を殺了けて了ふや
うなことはしませんでした。あくまでも「禮儀」を
つくしました。

内藏助は、殊に念を入れて、白無垢の老人を取つ
て押へ、内匠頭が斬りつけた「痕痕」をしらべて見
ました。はたして、老人の前頭と背とに刀の痕があ
りました。で、内藏助は、上野介の前に、ビタリと、
両手を突いて、

「われ〜どもは、舊の淺野内匠頭の家來どもでござ
います。亡君の遺恨を差含みまして、只今殿のお
首を頂戴に参りました。尋常に御生害（切腹）下さ
いますれば、御身分に對して、われ〜、決して、
お手出しは致しません。」

と、云つて、内匠頭が腹を切つた懐剣を取出して
上野介の前に置きました。

上野介は、チラと、懐剣を見たまゝ、うんとも、



すんとも云はないで、ブル〜、慄へておました。
で、内藏助は、いきなり、上野介を取つて押へ、懐
剣を、逆手に持ちなほして、上野介の喉を刺しまし
た。さうして、一番槍をつけた間十次郎を呼んで、
その首を打落させました。

上野介の首は、上野介の白無垢の片袖でつゝまれ
ました。それが、槍の穂先に、括りつけられまし
た。そして、武林唯七が、その槍を押立てました。

内藏助は、裏門のところへ行つて、ボン〜と、
銅羅をたゝいて、「引上げ」の合圖をしました。四
十七士は、残らず、裏門に集まりました。吉田忠左
衛門は、一々名前を、呼上げました。皆な、揃つて
おました。一人として、討死した者がありませんで
した。

原惣右衛門、小野寺十内、片岡源五右衛門、三人
は、隣屋敷に向つて、「只今、上野介殿を討取りま
した。われ〜、四十七人、いづれも無事でござい

ます。追つつけ公儀へ（お役所）へ訴へ出まして、
お上みのお捌を受けます。」

と、それ〜に、挨拶しました。さうして、正し
く列を作つて、一ツたん、回向院まで、引上げまし
た。そして、そこで、一と休みして、「上杉の方か
ら討手が來はしないか」と、それを、待つておまし
た。しかし、回向院では、ビタリと門を閉めて、た
ゞの一人も境内へも入れませんでした。

上杉の方からは、討手が來さうにもありませんで
した。そこで、また、列を作つて、大川端を永代橋
まで下りました。その途中、内藏助はふと、氣がつ
いて、赤垣源藏と、矢田五郎左衛門とに、上
野介の屋敷の火元を見届けに遣りました。

四十七士は、永代橋を渡りました。それか
ら、鐵砲州に出て、内匠頭の舊の屋敷の、前
で、この世の名残を惜みました。そして、築
地から、汐止の方に出ると、「吉田氏、富森

氏。」

と、内蔵助は、二人を呼びかけました。

忠左衛門と助右衛門とは、内蔵助から、大目付、仙石伯耆守のところへ、上野介を討取ったことを届けて出るやうに吩咐られました。

仙石伯耆守の屋敷は、芝の西の久保にありました。忠左衛門と助右衛門とは、列をはなれて、その方へ出かけました。

主税は、「いろ／＼、世話になつた忠左衛門殿にも、もう逢へないかも知れない。」

と、思つて、悲しくなりました。そして、いく度となく、心をこめて、目禮しました。

忠左衛門は、がツしりした大男でした。助右衛門は、瘦ぎすのスラリとした男でした。そして、二人ともに、すてきに頭が好くて、學問もあり、何んの役にでも立つ人でした。

二人は、芝口の通から、櫻田本郷町の方へ外れて

内匠頭の家來だ……。」

と、云つて、かんとんに、敵、上野介の首を取つて來たことを話しました。

門番は、二度びつくりでした。そして、武林唯七が持った無氣味な首包を見ると、青くなつて、本堂の方へ駆込むで行きました。

その頃、泉岳寺は、安藝、淺野一門の菩提所として、今より、もつと／＼、立派なお寺でした。住職は、九代目の翻山長恩といふ和尚でした。

長恩和尚は、門番の知らせを聞くと、「赤穂の浪人衆が……フム。」

と、云つたまゝ、しばらく考へてゐました。

すると、承天則地といふ役僧が、「それは、とにかく、お通し申さなければなりませんまい。もし、後々、面倒なことが起れば、私が、引受けましょう。」と、キビ／＼と云ひました。そして、庫裡へ行つて、格別の客人であるからと、禁じてある酒の用意

やがて、その姿が見えなくなりました。空は晴れて、邸々の屋根の雪は、旭に輝きました。美しい空、静な朝、そこにもこゝにも、雀が、こゝろよげに啼いてゐました。

四十七士は、芝口から源助町の方へ、眞ッ直ぐに高輪の方へ進むで行きました。

四十七士が、泉岳寺についたのは、朝の七時頃のことでした。

門番は、びつくりしました。何しろ、血に染むた槍を引ッ上げてゐる者が廿五六人もゐるのです。それに、いづれも火事場装束で、變つた風體です。それが、ゾロ／＼、やつて來て、門を入らうとしますから、「可けません／＼。一體、あなた方は何んですか。」

と、本ロー／＼しながら、咎めました。

そこで、小野寺十内が、「われ／＼は、舊の淺野



をさせ、大釜に粥を煮させたりしました。

内蔵助等は、泉岳寺の門内へ通されました。いづれも、佛前であるからと云ふので、槍を伏せて入りました。そして、内匠頭の墓所の方に行きました。

その途中に、井戸がありました。内蔵助は、そこで、手を洗ひ、口を漱ぎ、上野介の首を出して、血を洗ひ落しました。そして、寺から、三寶を借り、香爐を借りて、上野介の首を三寶に載せ、それを、内匠頭の墓前に供へました。

内蔵助は、ビタリと両手をついて、うやうやしく、禮拜しました。その眼から、熱い涙が、ハラ／＼と、零れて來ました。主税も、父の後ろに坐つて、禮拜しました。その眼にも、涙が光りました。後の四十四人も、皆な両手を突いて、頭を下げました。さうして、しばらく、すゝり上げる聲のみが聞えてゐました。——それは、いづれも、親を捨て、妻子を捨て、望を遂げ得た「悦」の涙でした。

「ナニ、討手が。」
と、寝てゐる者も飛起きました。氣の早い者は、

「オツ取刀、或は、槍を持つて、表へ飛出しました。片岡源五右衛門のやうに、落ちついた者さへ、手早く身支度をしようと思はれました。しかし、主税だけはのんきと思はれるほど、平氣でした。」

「いえ、それは、何かの間違でしよう。討手を差向ける位なら、今迄、ぐづ／＼してゐるものですか。上杉家だつて、まさか、白晝、討手を差向けはしないでしょう。」

と、云つて、父の傍を動かさませんでした。

内蔵助は、軽く、うなづいて、「まあ、然うだ。しかし、その用心はしてゐる方が可からう。」

「さうですか。しかし、お父上、こんな事をしてゐるより、いッそ、切腹して了つた方が可いではありませんか。もう、何も、かうしてゐる必要はないでしょう。」

やがて、内蔵助は、靜に頭を上げて、懐ろから、上野介の首を斬つた、懐剣を取出しました。そして、ハツシ／＼と、三度、上野介の首を打つて、さて一同に向つて、「今日の焼香は、上野介殿に一番槍をつけた間十次郎を第一番にしたいと思ひますが、如何ですか。」

と、一おう、皆なに相談をかけました。一同も、それに「否」はありませんでした。そして、間十次郎が第一番に、焼香をしました。さうして、それから、内蔵助、主税、十内、惣右衛門、源五右衛門……と、いふやうに、順々に、焼香をしました。

焼香が終ると、一同は泉岳寺の、客殿(大廣間)に引上げました。内蔵助は、上野介の首を、また、白無垢の袖につゝむで、客殿へ持つて行きました。そして、住職に、いろ／＼、世話になるお禮を云つてそれから、「われ／＼、舊の主人に、この首を手向けた上は、もはや、この首に、何んの恨もござ

「ナニ、討手が。」

と、寝てゐる者も飛起きました。氣の早い者は、

「オツ取刀、或は、槍を持つて、表へ飛出しました。片岡源五右衛門のやうに、落ちついた者さへ、手早く身支度をしようと思はれました。しかし、主税だけはのんきと思はれるほど、平氣でした。」

「いえ、それは、何かの間違でしよう。討手を差向ける位なら、今迄、ぐづ／＼してゐるものですか。上杉家だつて、まさか、白晝、討手を差向けはしないでしょう。」

と、云つて、父の傍を動かさませんでした。

内蔵助は、軽く、うなづいて、「まあ、然うだ。しかし、その用心はしてゐる方が可からう。」

「さうですか。しかし、お父上、こんな事をしてゐるより、いッそ、切腹して了つた方が可いではありませんか。もう、何も、かうしてゐる必要はないでしょう。」

「ム。だが、吉田、間の兩人をもつて、一ツたん、公儀へ訴えて出たのだから、そのお指圖を俵たなければならんよ。國法を紊した者は、國法の處分を受ける。今、腹を切つては、勝手自儘になるのだ。」

「ア、さうですか。」
「もう、どうなつたとて、可いのではないか。そちも、さう思へ。ア、歌が一首出来たぞ。紙がないか」

と、内藏助は、くわい活に、紙を求めました。主税は、役僧に、さう云つて、紙を貰つて來ました。

内藏助は、矢立から筆を出して、サラ〜と、一首の歌を書きました。

あら樂し、思は晴る、身は捨つる
浮世の月に、かゝる、雲なし

それを小野寺十内やなぞへ見せてゐるところへ、慌て、飛出した連中が、めい〜、拍子抜のした顔をして歸つて來ました。

子が、わたしに勝たしてくれたのです。」
と、無雜作に云ひました。主税は、數右衛門の、その、けんそんな様子を、大そう、奥ゆかしく思ひました。
そこへ、所化の若い坊主や小坊主が二人三人と集まつて來て主税等の刀研を、珍らしさうに見物してゐました。



上杉家から討手が向つたといふのは、はたして、嘘でした。しかし、その用心はして置いた方が可いといふので、主税が先立になつて、めい〜、井戸端に出て、刀を研ぎ出しました。砥石は、寺から借りました。

そのうちにも、不破數右衛門の刀などは、刃がボロボロに、こぼれて、鋸のやうになつてゐました。

主税は、しゆツ、しゆツと、手ざわよく、自分の刀を研ぎながら、數右衛門の刀の刃の、こぼれを見て、ツタム〜と感心しました。そして「不破様、そのお刀を拜見しますと、あなたの大勝負を拜見しなかつたのが、残念でたまりません。」

「いえ〜」と、數右衛門は、軽く笑つて、「どうして〜。もし、御覽でしたら、わたしの未熟が、スツカリお解りでしたらう。相手は、すばらしい手さゝでしたよ。何しろ、小袖も、袴も、この通り、ボロボロに、やられてゐるのです。つまり、この鎖帷

主税は、その一人を、つかまへて、「どうです、御坊たち、あなた方は、堺町(老居町)の人形芝居で、人形の戦事は見たことはありませんが、まだ、人間の眞との戦は見たことがないでしょう。」

「それは、見たことはありません。」
「それは、一度、見て置くが可いですよ。今に、上杉家から討手が來たら、私たちが、一生懸命に戦つて、お目にかけてみましょう。そりや、人形芝居よりも、グツと面白いですよ。しんけんですか

ら……。」
と、主税は、笑ひ〜、気軽に、じようだんを云ひました。そして念入りに、しゆツ、しゆツと、刀を研いでゐました。

日が暮れました。夜になれば、ひよつとすると、上杉家から、討手が向ふかも知れぬといふ考が、誰の心にもありました。それで、めいめい、充分に用心をしてゐました。(つゞく)



かあい

さうな花

岩井 允子

蝶が、ひらひらと、まつて来ました。
 そこには、ひよろひよると、あはれなすがたの
 すみれの花が、たつた一つ咲いてゐました。
 ちつとも、お陽さんが、あたらないのですから
 花は、大きくならうとは、一生けんめい思つてゐ
 るのですけれど、なかなかです。
 いつも、すみれの花は、かなしい事を思つてゐ
 たかと思ふと、さうではなかつたのです。

すみれの花は、生れたときにも、たつた一人で
 した。それから大きくなつても、たつた一人でし
 た。それですから、いろいろなことを知らないの
 です。

方々からきこえてくる、いろいろな音をきいて
 も、それをみようともし思はなかつたのです。

そこへ或日、蝶が飛んで来ました。

「おや、こんなところにも、花がある。まあ、ま
 あ、かあいさうに、こんなにやせて」

蝶は、ひらひらとそばへよつてゆきました。そ
 して、おもしろくまつてみせました。

けれども、すみれは、なんにもいひません。ふ
 しぎさうに、まんまるい眼をむいて、みつめてゐ
 ます。

『どうでした。面白かつたでせう』

と、まひおはつた蝶が、すみれの、おかほに、
 おかほをひつつけて、いひました。



しかし、すみれさんは、何といつてよいのか、

わかりませ
 ン。ただお
 もしろかつ
 たといふこ
 とが、うれ
 しさうなお
 顔でわかり
 ました。

すみれの
 花は、びつ
 くりしてし
 まつて、だ
 まつて蝶さ
 んをみてゐ
 ました。

蝶は、また、いろいろ、舞つてみせました。

は私と、蝶と二人きりです。

(をばり)

「すみれさん、さようなら。またあした来てあげ
 ませうね、何か、いいおみやを、
 もつて来てあげますからね」と、
 蝶は、たかく、高く、まひながら
 あがつてゆきました。すみれは、
 それから、さびしくなつて来てこ
 まりました。とうとう、その夜か
 ら、病氣になつてしまつてあくる
 日、蝶が、たづねて来てくれる時
 をまたないで、死んでしまひまし
 た。

だあれもそれを知らせにゆく人
 もありません。たつた一人で死ん
 でしまひました。

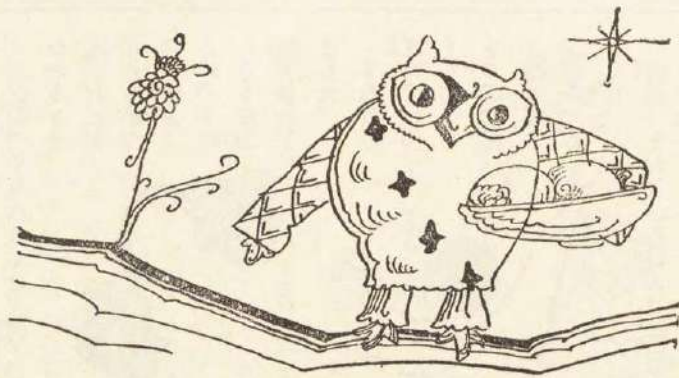
かあいさうな、すみれさん。

このすみれさんを知つてるもの

梟のいたづら

涌島 戯白

初山 滋童



三郎の家のお庭には、一本の大御所柿の木がありました。秋になると、太陽のやうに輝かしい立派な實がなつて、それを近所隣りに贈物にするのが、三郎の喜びでもあり自慢でもありました。

三郎はこれをお祖父さん柿と言つてゐました。去年の暮に亡くなられたお祖父さんが子供の時に植へた柿の木で、それから三郎のお

父さんが小さい時には、いつも秋になるのを楽しみにして、よく食べたといふ因縁のある柿の木だつたからです。そして、三郎にとつては、毎年秋になると、よくお祖父さんが袂竹で柿の實を採つてくれたので、その柿とお祖父さんとを離して考へることが出来なかつたのです。

今年はいつもの年よりも澤山實つて、老人の手足のやうに骨ばつた古い枝が折れるかと思はれるほ

どでした。三郎はまだ實が赤くない時分から、柿を近所へお配りすることを色々夢に描いてゐました。そしてその數をかぞへて置かうと思つて、丁度奥座敷で縫物をしてゐらつしやつたお母さんに相談しました。

「お母さん。」と三郎は椽に近寄つて言ひました。「僕、柿の數をしらべて置かうかしら。」

「お前に數へられたら數へてごらん。」とお母さんは微笑みながら言つて、かう附加へられました。

「お前があの柿の數をみんなかぞへたら、御褒美に好きな本を買つてあげよう。」

三郎は、一寸頭をかしげて考へました。「そんなに難かしいかし

ら？」と思つたのです。けれど、鈴成りになつたその柿の木を見上げると、なるほど、とても數へ切れさうにありませんでした。

「お母さん、あれ千より多いかしら。」と言つたわけは、彼はまだ今年の春學校に上つたばかりで、千までしか數へることが出来なかつたからです。

「さうねえ。」とお母さんも柿の木を見上げて、暫く目の子算をした後、かう答へました。

「千より少し多いかも知れないね。でも、お前に千數へられたら偉いわ。」

「百を十數へたらいゝでせう。」
「えゝ、さうよ。」
「ちやね、お母さん、僕が百つて

言ふたびにお母さんの方に、何かいろしをつけといて頂戴。」
それから早速、三郎は柿の木の下に立つて、端の枝から一つ、二つ、三つ、四つ、と數へはじめました。けれど、二十も數へないまでに、もう眼がくら／＼して、たま赤いものがちらちらするばかりでした。

「三郎、どうしてるの、數へてるの。」とお母さんに訊かれて、三郎は又はじめから、今度は一つ一つの枝について數へはじめましたがやはり駄目でした。

「お母さん。」と彼は泣き聲で訴へました。「柿の實がみんな一緒に固まつて、たつた一つの大きな／＼な實になるんです。」

「それやさうだよ、三郎。」と言つて、お母さんは同じ色合のものが澤山並ぶと、錯覚と言つて、眼の迷ひが起るのだと説明して下さいました。

そこで、三郎は實を数へて置くことは諦めました。これまで學校に上らないまではいつも家にゐたので、柿のことも安心でしたが、今年に學校に行つてゐる間が心配でした。近所の腕白がこつそりやつて来て、まだ熟れぬ實を竹で落しはしないかしらん、などと考へたのです。

けれど、それも夢のやうな心配で、ちつとも柿の木には變りなく、美事に熟れて來ました。三郎はそれを近所に配らうといふ日、

お父さんに挾竹で探つて貰ひながら、雀躍りして喜びました。三郎は先づ近所配りをする前に、お祖父さんの佛前に柿をお供へすることを忘れませんでした。そして後には、三郎が毎日學校から歸つて頂くには餘つて返るほどの柿が残されて、その度に挾竹で二つ宛探るのが何よりの楽しみでした。

二

ある日、三郎が學校から歸つて、お庭へ出て柿の木を見ると、どうも怪しい點がありました。その木は一體お隣の土藏に近く植はつてゐましたが、その屋根に近い方の枝がどうも變でした。

「確か、あの土藏の樋の端に大き

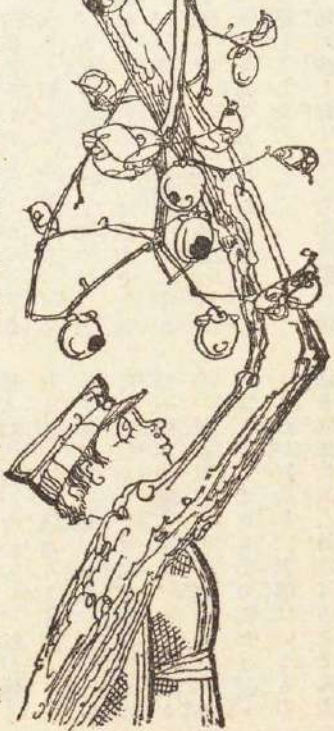
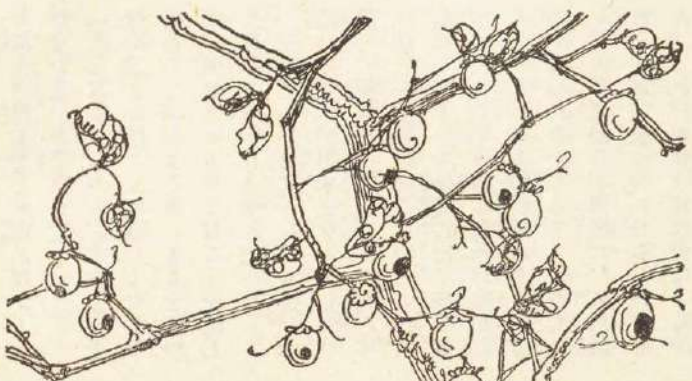
なのが二つ成つてゐたんだがなあ。」と三郎は獨言を云ひました。「さうして、上の方にも五つ六つ成つてゐたんだ。」

それから、彼は直ぐ家へ駆込んで、何事が起つたかと怪しまれるほど大きな慌しい聲で叫びました。

「泥棒だ、泥棒だ。泥棒だよ、お母さん。」

「三郎、どうしたの。そんな大きな聲を出して？」

お母さんは白い炊事用のエプロンで濡手を拭きながら、大きな黒い眼を睨つて飛びこんで來た三郎にさう言ひました。三郎はちよつときままりが悪くなつて、急に返事が出來ませんでした。



「お母さん、僕の大事な柿が盗まれてるよ。泥棒が入つたんだよ、きつと。」

「みつともないぢやないの、そんな大きな聲で泥棒だなんて。」と言つてお母さんは笑ひました。「こんなところにわざ／＼入つて僅かの柿を盗む泥棒はありやしませんよ。風かなんかで落ちちたんでしょ。」

「でも落ちちたんなら、木の下面ある筈なんだけど、一つも見えないよ。きつと盗まれたんだ。誰か盗みに來たんだ。」

「そんな人間きの悪いこと言ふもんぢやありません。」

「だつて不思議だなア！」と三郎は小首を傾げて、ます／＼疑ひをつのらせました。「ことによると、

お隣りの俊ちやんが盗んだかもし
れないよ、お母さん。」
「そんなこと言ふもんぢやありません。
お母さんは殿しくたしな
めました。」かりそめにも人を疑つ
て、罪をさせるやうなことを決し
て言つちやいけません。」

三郎はしかしどうしても疑ひを
離れることが出来ませんでした。
第一、誰も柿を盗まなかつたとす
れば、一體柿が無くなつたのは何
故だらう？ お伽噺に出て来る妖
精が夜こつそり来て食べたのかし
ら？ それとも猫が柿の木にのぼ
つて食つたのかしら？ どつちに
しても不思議は不思議だ。不思議
だとすれば疑はずにはゐられませ
ん。それなのに三郎はお母さんか

ら、人を疑つてはならぬと誠め
られましたので、不満でたまりま
せんでした。
そこで彼は夜の来るのを待つこ
とに心をさだめました。猫でも妖
精でも、兎に角その柿を盗みに來
るものの正體を知りたかつたので
きつと夜の闇にまぎれて来るにち
がひないと思つたからです。

夕御飯をいただきながら、三郎
は大へん鬱いでゐました。する
と、お父さんはそれと知つて、三
郎にどうしたのか、と訊ねました
が、三郎は何故か返事することが
出来ませんでした。尙も黙つてゐ
ると、お母さんがそれと察してか
う話しました。
「柿が少し無くなつたので鬱いで

あるのかも知れませんが。この子
は泥棒のせむだと言ふんです。」
「なんだ。」とお父さんはいかにも
應揚に言つて笑はれました。「駄目
だよ、三郎。柿が少し無くなつた
からつてそんなに情氣ぢや。そん
なケチな考へぢや、とても立派な
大人物にやなれないね。」

「僕柿が惜いのぢやないんです。
誰も取る者が無いのに、柿が無く
なるのが不思議なんです。」
「そんなら三郎。誰もつくる人が
ないのにあつて毎年柿が實るのは
一層不思議ぢやないか。だから、
誰も取るものが無いのに、柿
が無くなることもあるんだよ。」
九時が打つと、三郎はいつもの
通り寢床に入らねばなりません

した。三郎は兩親に内密で、柿泥
棒の正體を見届けてやらうと力ん
でゐたので、寢床に入つても眠ら
うとはしませんでした。お父さん
達がお休みになつてから、こつそ
り床を拔出して、兩戸の隙から見
張つてやる考へてゐました。けれ
ど、兩親はなかく眼が固くて、
三郎の計劃をさうたやすく實行さ
せませんでした。お父さんの讀ん
でゐる新聞紙のかすかな音と、時
計の振子とが、三郎の心をみだし
ました。

三

もう夜も更けて、月の光が海の
底のやうな世界をひろげてゐまし
た。三郎は寢間着をきたまゝ、こ

つそり庭へ抜け出して、葉蘭の蔭
に身をひそめました。
寒氣がして、あたりが森として
ゐるので三郎は一種の恐怖さへ感
じましたが、この謎のやうな不思
議の正體を突止めようといふ熱心
は、三郎に勇氣を興へました。月
の光が納屋の蔭や木の下に、奇妙
な黒い像をつくつて、三郎の眼に
はそれが何か生きた變化のやうに
見えました。かすかな風が、木の
葉や草をそよがせても、三郎はび
くつと身を縮めずにはゐられませ
んでした。

だが、待つても待つても、柿の
實を盗みに来るものがない。月は
次第に光を弱めて、黒い影が動き
出す。さうなると、いかに熱心な

三郎もそろ／＼怖じけがついて逃
げ出したくなりました。
その時、三郎は腰を抜さんばか
りに吃驚しました。かすかな羽音
がして、一羽の鳥が大きな黄色い
眼をくる／＼輝かせてやつて來た
のです。その眼の光が彼の怖じけ
づいた心を、貫いたのです。そし
て、最初は、それが鼻だといふこ
とが分らなかつたのです。
鼻は柿の木に静かにとまつて、
あたりをじろ／＼見廻してから、
その大きな柿の實を嘴に突差し
て逃げました。逃げてからはじめ
て三郎は正氣に返り、勇氣を取戻
して、その鼻を生捕つてやらうと
さへ考へました。すると、又同じ
鼻がやつて来て、素早く又一つの

柿を盗んで行きました。そこで、三郎は鼻の後を跟けてその棲家を知らうと思ひ、鼻が三度目に來たとき、こつそり後を追つて行きました。

鼻は自分の後をつけられてゐることも知らずに、二三町先の酒屋の椋の木に歸りました。そこに鼻の住居があつたのです。三郎が椋の木を見上げると、何か妙な、うめくやうな聲がして、哀れな氣がしました。

その側には、大きな酒倉が五つ六つ並んで、白壁が死人の衣のやうに見えました。三郎は鼻を生捕ることに熱中してゐたので、その四邊の物凄さも一向氣になりませんでした。しかし、木を登つて鼻

を捕へるのはいゝが、柿を嘴で貫くぐらゐだから、或ひは手を咬まれるかも知れぬといふ心配がありました。それに又、鼻は晝間は眼が見えぬといふことを知つてゐたので、いつそ明日の晝お友達と一緒に來ようとも考へました。

ことに英雄らしく思はれ、今勇敢にそれを成遂げることが誇らしく思はれたので、三郎は思ひ切つてその椋の木によぢのぼりました。鼻の巢は中程の枝の股にありまして、三郎が恐るゝ登つて行くとき、さきほどの鼻はちやんと知つて、その入口に待つてゐました。そして、黄色い大きな眼に笑ひを



たたへて、三郎を迎へましたが、却つて三郎には薄氣味悪く感じられました。

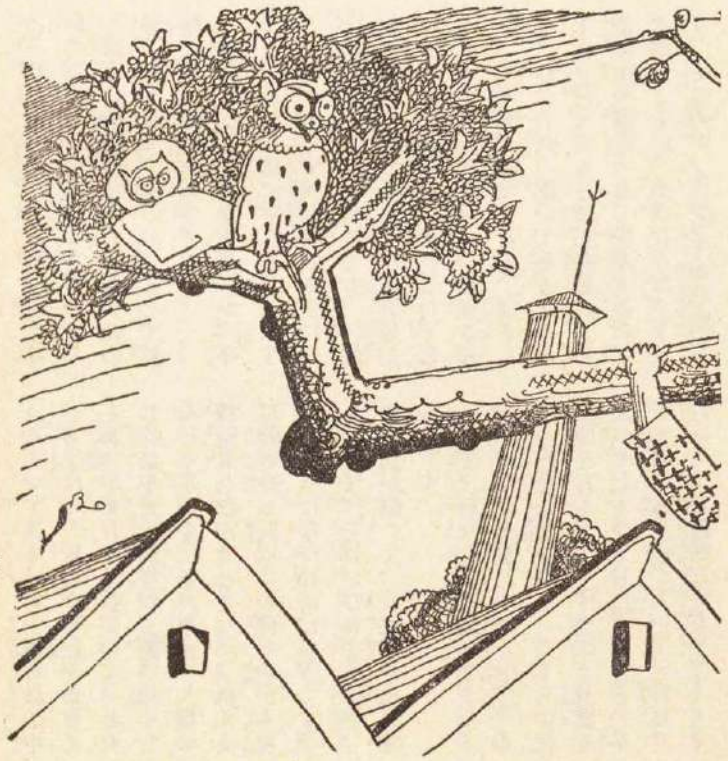
「三郎さん、ようこそお出で下さしました。」

この聲に三郎は驚いて、木から落つこちはしないかと氣遣ひ、一生懸命にしがみつきました。

「さあ、どうぞお上り下さい。あなたのお蔭でわたしの子件も大分癒りました。全快したら、お禮に行かうと思つてゐたところですよ。」

三郎には何が何だかさっぱり要領を得ませんでした。そして木から落ちる心配が強くて、自分の大切な柿を盗んだことを詰むことも出来ませんでした。

「實は一週間前から、わたしの子



が病氣にかかりましてね、一時は死ぬかと思つた位でした。わたし共には譯の分らぬ病氣ですが、人間には有るんださうです。人間はたゞ酔ッ拂ひと云つて、病氣らしい病氣とは考へてゐないやうですが、わたし共にはベストより恐ろしい赤死病なんです。

と申し上げても、わたしの子が何故そんな惨めな病氣にかかつたか御不審でせう。それはかうなんです。この近所に、臍白盛りの子供が四五人あましてね、この酒屋の俵がその中でも一番の餓鬼大将ですが、ある日、わたしが山の方の家へ用事があつて歸つてる間に、竹や棒をもつて、わたしの俵を生捕りに來たのです。御承知のやう

に、わたし共梟は晝間眼が見えないので、またこの世の容子を少しも知らぬ子梟は、何事が起つたのかと仰天して、翼の力に任せて無暗に飛び廻つたのです。

可哀さうぢやありませんか。今でも、わたしは、それを思ひ出すと、ぞつとして涙が雨のやうにこぼれます。それにつけても、何故わたし共は夜でなくては物が見えぬのかと、神様をお怨みしたくなりますよ。わたしの、お祖父さんの、その又お祖父さんの、話として、わたし共の聞いてゐるところでは、何んでもわたし共梟はこの世の中の有りとあらゆるものの謎を解くことが、出來たんださうです。ところが、今から千年程前に、

五二
カツサンドラといふ王様が砂の中から生れて、世の中の謎をあばくと神罰があたると言ふので、わたし共梟を光の世界から追ッ拂つたんださうです。それ以來、人間の智慧もしぼんでしまつて、ほんとに物の分る人はこの世の中から葬られ勝ちになつたんださうです。さうして、それがひねくれると、悪智慧が働いて、夜泥棒が出て來るんです。

さて、わたしの子梟のことですが、ばた／＼飛んでゐる中に、あちらの枝に鼻を打ち、こちらの壁に頭を打ちして、すつかり見當を失つてしまひました。すると、小さな暗い穴があつたので、俵はこれはい、避難所だと思つてそこを

潜つたのです。それはかなり廣い暗がり、あすこに見える酒倉の中だつたのです。

ところが、不幸はそれだけで止どまりませんでした。臍白共はべたとばかり喜んで、酒屋の俵が先に立つて、その酒倉に入つて又もわたしの俵を虐めにかかつたのです。そして、俵はこの追手をのがれるために、大きな酒樽の中に飛びこんだのです。

それから三日たつて、やつとわたしは俵を見付け出すことが出來ました。この巢へつれて歸つたとき、可哀さうに、あの子は蟲の息でしたよ。人間の子供も残酷なものです。然し人間も酒なんて妙なものをおいしいがるもんですね。

わたし共梟にも立派なお医者があります。狂氣水と言はれてゐる酒の毒を治すことは出來ませんでした。わたしは氣が狂はんばかりに心を痛めてゐましたが、とうとうその良薬を見つけたのです。それは、柿の實を食はせることです。幸ひ、三郎さんのお家には立派な御所柿があつたので、大變好都合をいたしましたよ。これがあなたにお禮を申し上げねばならぬわけなんです。

三郎は、梟の子を氣の毒に思つて、もう親梟を生捕りにすることにはあきらめましたが、それにしても黙つて柿を盗みながら、それを悪いことだと思はぬのが腹立たしかつたのです。だが、誰も作る人

がないのに自然に柿の實がなると同じやうに、誰が取るともなくそれが無くなるのも自然だと言つたお父さんの言葉を思ひ出して、三郎は何も言ひませんでした。と、木をしつかり抱へてゐた手が痺れて、彼は思はず地べたへ落ちました。

三郎は眼を開けました。兩側にはお父さんとお母さんが、三郎を護るやうにして、静かに寝込んでゐらつしやいました。月の光が小窓から差込んで、あまり遠くないところから、梟の鳴き聲がしきりに聞えて來ます。三郎はそれをなつかしく聞きながら再びすや／＼と眠りにつきました。(をばり)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

提灯花の提灯

阪野潤 (大阪)

提灯花の 提灯は
いつに なつたら
灯が ともる

草刈りお馬は
かへつたし
てんとう蟲は
ねんねした
提灯花の提灯は
夜更になつたら
灯がともる

お稻荷様の
仔狐が

こつそりく
つけに くる

野ばら

青柳花明 (群馬)

笠捕えて
歸る道
どこかに野ばらが

54

咲いてるよ
そより夜風の
吹くたびに
野ばらの花の
香がするよ
川のほとりか
簾ぎわか
どこかに野ばらが
咲いてるよ

鈴蟲

林 宵雨 (東京)

鈴蟲が
コロリン コロリン
コロリン コロリン
コロリン コロリン
鳴いてゐる。
コロリン コロリン

紫陽花

湊 一訓 (東京)

あぢさいの はな
ひるのつき
あそぶ子も ない
あきやしき
おてまりの はな
まるい はな
にじの いろにも

ゆれるはな
あぢさいの はな
ひるのつき
ゆれて ゆめみる
あきやしき

紫陽花

中村 里郎 (兵庫)

紫陽花の花
咲く頃は
田圃の蛙が
よくななくよ
どんより梅雨の
日が續き
今日もしつぱり
咲いてるよ
紫陽花の花

咲く頃は
ちようちよう蟹も
よく出るよ

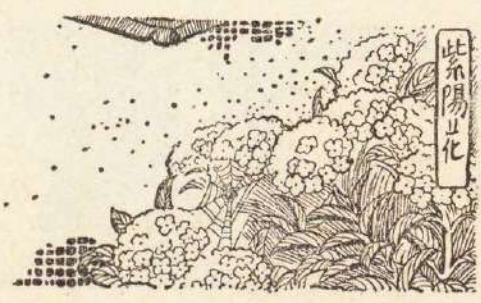
朝の林

岡田 落木 (埼玉)

さらさらなるのは
風の音
ばらばらおちるは
木のしづく
お日さま上つた
ばつかりの
若葉の匂ふ
林です
草には露が
光つてる

夢

松尾 文雄 (京都)



寝た子に

なにあげよ
菜の花畠の
夢あげよ
ねんねん
寝た子が
見た夢は
菜の花畠に
銀の月

雁

西岡 水朝 (長崎)

雁 雁
飛んだ飛んだ
ならんで飛んだ
お月さん
ちよいと見て
啼き啼き飛んだ

雁雁

飛んだ飛んだ

ならんで飛んだ

お月さんが

青いと

啼き啼き飛んだ

なす鳥

武田 幸一 (福岡)

雨こんこ

雨こんこ

なす鳥

なすびは

むらさき

ぶら提灯

さんちやく

なすびの

寒い風

吹きとばされそな

綱ぐも

お巡りさん

石川榮一郎 (神奈川)

白い帽子に

白い服

お馬に乗った

お巡りさん

道は細道

野毛の道

ぞろつぼぞろつぼ

駆けて行く

お馬の蹴爪も

かるがると

ぞろつぼぞろつぼ

ぶら提灯

あかりも

つけづに

ふうらぶら

一本杉

和地きよ詩 (長崎)

お背戸の

杉の木

一人ぼち

三ヶ月

ののさん

出ぬ晩は

ほうほう

鼻の

子守唄

聞き聞き

響きます

三ヶ月と柳

伊藤 益平 (岐阜)

柳のお月さん

すい〜お月さん

葉つばがすい〜

垂れてゐる

すい〜お月さん

柳のお月さん

葉つばにかくれて

出てゐるな

星の家

高岡 千尋 (東京)

お星様出たよ

帰りませう

おねんね
淋しがる

日ぐれ

川島 秀雄 (東京)

若葉の丘の

チロチロ 灯

ヒツツリ くれる

青々、はたけ

はたけの上

チカチカ お星

お里も日ぐれた

かけ〜 かへろ

風鈴

宮本乃里義 (熊本)

チリチリ鳴り〜

風鈴さん

青葉の窓に

たざひとり

お池のすゞしい

風の子と

風鈴さんは

遊んでる

チリチリ鳴り〜

遊んでる

西風

大木 柳影 (東京)

西風から風

寒い風

お寺の茶の木が

ゆれてゐる

西風から風

砂のお家はこのまんま
星のお家と致しませう

一本杓



暗い濱邊の砂の家
あしたの朝まで
さようなら

戻り駕籠

野村まさを

ホーイ ホーイ

ホーイサカホーイ

お山の向ふに日が沈む

ホーイ ホーイ

ホーイサカホーイ

峠の婆さん

おかへりだ

ホーイ ホーイ

ホーイサカホーイ

里でかん酒 一杯だ

ホーイ ホーイ

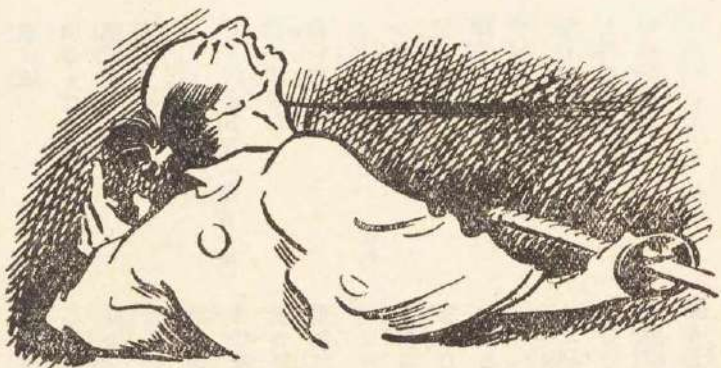
ホーイサカホーイ

仇討夢物語

五八

小城 庄一

寺内萬治郎盡



「姉様、明日はいよいよお父上の三年忌で御座いますね。」
小平太は、睨じてゐた眼を見開いて詫しげにさう言ふと枕許に坐つてゐる姉の顔を仰ぎました。
「え、さうです」政江は軽く頷きました。
「あ、もうお父上があの悲しい御最期をお遂げ遊ばしてから、三

年になるのか。それに……それだのに……私は未だ仇敵を討つことが出来ぬ。そればかりか、自分の命すら覺束なくなつて了つた。眼と鼻の、近い御城下に、ちやんと仇敵の傳之丞は威張つて歩いてゐるのに……何といふ無念さだらう。」
長い患ひに見る影もなく瘦せ細つた小平太は、齒を喰ひ縛つて泣きました。
小平太の父は筑前博多の藩士で

三百石を買つた武藝者でしたが、仲間の秋山傳之丞から嫉みを受けて殿様にさん言され、無實の罪を負ふて切腹を仰せつけられたのでした。後に残された政江と小平太の姉弟は悲嘆にくれましたが、父の遺言通り城下を立退いて宗像村に隠れ、傳之丞を仇敵としてつけ狙ひましたが、不運なことには小平太は風邪がもとでひどい病となり、果ては肺を悪くして、起つことも出来ぬ哀れな大病人となつて了ひました。政江は骨身を惜しまず種々に手を盡して介抱しましたが、一向に利目はなく、も早死ぬるを待つより外になく、小平太は日毎夜毎口惜しさに身もたえするばかりでした。

「なう姉様、私は十五歳だ、十五と云へば人並ならもう元服して大人の仲間に入る歳だ、それに此の私は動きも出来ぬ惨めな身體と、刀の重みにも堪えぬ細い腕しか持ちませぬ。何故此様に小平太は武運に拙いのでせう。私が泣けば姉様も泣かれる、泣くまいと齒を喰ひ縛つて見ますけれど、餘りの情無さに小平太は泣かずに居れませぬ。」
いつもの事ながら、さう言つて泣く小平太を見ると、政江は何と云つていいか判らないので、貫泣きの涙をかくして、
「その様な氣の弱い事ではなりませぬ。武士の子といふ者は、どんな苦しみにも打勝つて、最初の目

的を徹すのです。お前の身體さへよくなれば、きつと目的が果される。力を落すことは要りませぬ。」
「その身體が所詮望みは御座りませぬ。昨日も、今朝もあんなに血を吐いたではありませんか。お醫者様や姉様は隠して居られるが、自分の身體のことは自分には一番よく判ります。もう私は長くは生きられぬのです。」
「馬鹿な事をお云ひでない、お醫者様は、此四五日を過ぎたら、きつと快い方に向はうと仰言つてゐるのです。」
政江は態と言葉荒く叱りましたが、小平太は頭を振つて、
「小平太は死ぬのが怖ろしうは御座りませぬ。悲しうも御座りませ

ぬ。さり乍ら仇敵を討たずにおめ
おめとあの世でお父上に御目に懸
らねばならぬかと思ふと、腸が
千切れる様です。小平太は死に度
う御座りませぬ、死ぬのが嫌で御
座ります。昨夜もお父上の幽霊を
見ました。それその椽側に――
枯枝の様な指で小平太は八ッ手
の葉の繁る椽先を指して、
「蒼白い顔をして真紅な血を浴び
たお父上が、八ッ手の葉の蔭から
音もなく立ち現はれて、小平太お
前は未だ傳之丞が討てぬのか、わ
しの魂が、迷ふて居るの知らぬ
か、わしは口惜しい、何時までも
成佛が出来ぬ。と悲しい聲で呟い
て、尻と私の顔を凝視めて御出で
だつた……あ、お父上、小平太は

父上の御無念も霧らせぬ不甲斐な
い子で御座ります。」
「いけませぬ小平太、そんなに早
奮すると又熱が出るではありませ
んか。」
涙乍らに政江は小平太をなだめ
静め様とします。併し、その時に
は、熱にうかされた小平太はもう
何も判らなくなつて、昏々と眠り
に落ちてゐました。骸骨の様に窶
れ果てたその顔には一條涙の線が
光つてゐます。
ほつと深い溜息をついて、政江
は物思ひに耽りました。

六〇
座のませぬ。」
醫者が政江を襖の蔭に呼んで、
そつと囁いて歸つたのは、その夕
方でした。政江はかねて覺悟して
ゐることは云へ、弟がいたはし
くて、起つても居ても居られませ
ん。
どうかして、せめて弟に何かの
慰めを與へて安らかに死なせる工
夫はないものだらうか――種々に
考へあぐんだ末、ふと思ひついた
のは「夢賣修験者」のことです。
その頃一人の年若い修験者が、
近在の村を廻つて、祈禱などをし
て歩きました。その修験者は普通
の田舎廻りのまやかし者と違つて
不可思議な術を知つてゐる、それ
は相手の望む様な夢を立派に見せ

ることが出来る、
といふ噂でした。
で村の人々は「夢
賣修験者」と呼ん
で、色々な面白い
夢を買ひにゆくの
でした。
さうだ、あの人
に頼まう、と一人
領いて、政江は眠
つてゐる小平太に
知れない様に、こ
つそり家を抜け出
し、修験者の宿に
行つて直ぐ来てく
れる様にと頼みま
した。
間もなく修験者



六二
がやつて来ました。政江は、
「何卒弟に仇敵討ちの夢を見せ
てやつて下さいませ。御禮は如何
程でも、出来るだけ致します」と
頼みました。
「仇敵討ちの夢？」
黒髪を長く肩まで垂れ、粗末な
らさちんとした紋付の着物に、唐
草模様の縫ひのある袴をつけた若
い修験者は、人の心を見透す様な
鋭い眼ざしで、じろりと政江を
見返して、不審げに尋ねました。
「はい。」
「これには何か仔細のありさうな
様子。決して人には語らぬから包
まず話して下さい」
修験者の誠實の溢れた言葉に、
それではと、政江が一伍一什を語

つて、
「そんな譯で此子が可哀想で御座りますから、せめて夢でなりと仇敵を討たせてやれば、きつと幾らか喜んで死にますでせう。」
と結んで、ほろりと涙を落しました。修驗者の眼にも涙が光つてゐました。

「不憫なお話を聞くものです。よろしい、きつと弟さんを安心して逝かせる様に、およばすながら力を盡しませう。」

意味ありげに言つて、修驗者は小平太の枕許に坐りました。小平太は未だ眼を覺まして居ません。「シート、シート」修驗者は暫く、底力のある調子で、靜かに小平太の身體の一尺ばかり上を、珠敷を

持つた手で、撫で廻して居ました
が、やがて、
「小平太殿、仇敵討ちや。某が助太刀するぞ」と、鋭どく囁きました。すると小平太は眼を瞑つた儘で、
「御身様は誰方ちや」と問返し

「御手前の孝心を嘉みして天より下された神の使ぢや」嚴そかに修驗者が答へます。

「何、天の神様からのお使か、有難い〜」

臆の様に蒼ざめた、小平太の顔に、ぼうつと血の氣がさして來ました。政江はまじろきもせず眺めて居ります。

「さあ出立し様、用意はいいか」

と修驗者。
「宜敷う御座のます。なれど此の病體では」

「いや病氣は既に、快くなつて居る。それ歩いて見られよ。何ともないだらう。」

「あ、本當に……何ともない。昔よりも返つて元氣がある位だ。お、全身に力が漲つて來た。これなら大丈夫です、嬉しいなあ。」
小平太の顔はいよ〜輝いて來

ます。

「歩くのは面倒だから、空を飛ばう、拙者の帯に掴るがよい、そら飛ぶぞ〜」

「はい。」
「もう着いた。此處が傳之巫の家の裏口だ。こつそり忍びこんで座

敷を敷はう。」

「はい。」

「向ふに座敷が見えるだらう、あ

の縁側に佇んで居るのは傳之巫ではないか。」
「あッ傳之巫で御座ります、仇敵



で御座ります」小平太の聲は喜びに慄えました。政江も思はず唾を呑みこんで、まじろきもせず二人の言葉に聞き入つて居ます。

「他の奴等が來たら拙者が引受けるによつて、御手前は早く馳せつけ、逃がさぬ様に名乗りをあげて討取りなさい。」

「はッ」威勢よく答へた、小平太は、直ぐに、「やあ秋山傳之巫、三年前に汝の悪企みの爲に殿様の御怒りに觸れ、無實の罪で死んで行つた淺田平右衛門が一子、同苗小平太が、今日こそ汝に怨みの程思知らせに來たぞ。天神も嘉し給ふ我一刀を受けて見よ。」

と涙と叫びました。それは死にかけてゐる病人の聲とは思へない

程、大きく力強い聲でした。そして次には、斬むすんでゐるつもりでせう、「えい、やつ」と盛んに掛聲をかけて居ります。

修験者も眼を閉じ、口を堅く結んで一心に何かを念じて居る様子でしたが、

「それ小平太、右だ、右を突け、ほら左の小手にすぎがあるぞ……今度は胴を拂へ……敵は浮足立つたぞ、突きだ、突きを一本だ、そら倒れた、止めを刺せ。」

と助言をしてゐる様子です。「どうだ、止めは刺したか。」「刺しました。お蔭で父の怨みをはらすことが出来たのです。有難う御座ります。恭じけなう御座ります。」

はづんだ小平太の息の中から、切れ切れに喜びの聲が響くと、止めどなく涙が頬を伝ひました。政江もつひ引き入れられて、涙ぐんだり微笑んだりしてゐます。

修験者は嚴やかに、「さあ疲れたらうから歸つて暫く休まれよ。いいか、も一度空を飛んでゆけど……そら歸つた。座敷に上つて寝るがよい。」

「は……はい。」それから又小平太は、深い深い眠りに落ちてゆきました。ほつと吾に返つた政江は、餘りに不思議な修験者の術に深く心をうたれて、「有難う御座りました。お蔭様で、せめて弟の最期が安らかにな

りませう。」と御禮を云つて、若干の金を紙に包み、「これは些少ばかりで恐入ります

と差出しましたが、修験者は手を振つて、「いやそれには及びませぬ。私にお禮をする金があれば小平太殿を厚く葬つてやられたら宜からう。それよりも私は、孝子の誠心の貴さにほとと感じ入つて、胸が切なくなりました。何卒して一念貫かせてやりたいものです」と言つて、丁寧に一禮して、足早に城下の方に立去つて行きました。

三

其夜の事です。博多城下の秋山の邸で、夕食を済ました傳之丞が、何気なく座敷の椽側に佇んで、漸く闇に包まれた庭を眺めて居ると、椽の下で、

「何者ぢや」と、とがめました。すると、するとと影繪の様に椽から這ひ出た黒い人間が、ものを言はず斬つてかかりました。傳之丞は素早く體を躲して、床の間の刀を取ると、ざらりと抜放ち、曲者目がけてあべこべに斬りつけましたが、黒い人影はびくと

もせず、無言の儘烈しく渡り合ひます。相手が怖ろしい腕前だと知つた傳之丞は、大聲で家に向つて、

「曲者ぢや、出會へ〜」と叫びました。その間一髪、すうつと曲者の腕が延びて、一文字に刀が突き出される。流石の傳之丞も拂ひのける暇がなく、咽喉を突刺されて、「きやつ!」と悲鳴諸共ぶつ倒れました。曲者は風の様な素早さでその上に跨がると、ぶすりと止めを刺して、ひらりと椽を飛び下り庭の植込みの繁みに駆け入つて姿を晦ました。

家の人々が駆けつけた時には、四邊にはもう猫の子一匹影を見せ

す、傳之丞だけが、惨たらしく血潮をふいてぶつ倒れて居りました。

四

深い眠りから眼を覺ました小平太は、きよろ〜と邊りを見廻しましたが、聽て、枕許の藥や、梁から吊り下げられた水袋や、瘦せかけた自分の腕などを見出すと、「あゝ夢だつたか〜」と堪らない様な失望の聲で呟きました。「どうなさつた、夢でも見て?」政江は優しく顔を寄せて尋ねました。「はい姉様、楽しい夢を見て居りました。」

さう云ひ乍ら、淋しく笑つた小平太の眼から、ほろ〜と涙が流



の中での出来事が、そつくり真となつて現はれたのだ、人のまごころは恐ろしいものだ、と人々は取沙汰しました。それは政江もさう思つたのでした。いや、本人の小平太が、臨終の際に傳之丞の死を聞いて微笑んだのを見ると、自分で仇敵討ちをした氣で喜んで死んで行つたに違ありません。
 この噂が殿様の耳に入ると、殿様はいたく小平太の孝心に感じて政江を呼び出し、亡き平右衛門の跡を立てさせて、厚く小平太の靈を慰めてやりました。
 唯併し、あの夕方限り夢賣修驗者が姿を晦まして了つた事には、誰も氣がつかせませんでした。

れ落ちました。

「楽しい夢とは、どんな夢です。姉様にも話して聞かして御覧。」
 「天の神様が私の心を慈しんで、一人の強い使者をお下しなされたのです。」

「ほう、そして……」政江は微笑んで先を促しました。

「その使者は髪を肩まで垂れて、黒い着物を着て、立派な顔立ちでした。私を連れて空を飛んで、城下の町に駆けつけたのです。仇敵の傳之丞の家に。あゝ夢の中の私は達者で元氣が一杯だった……」
 夢の跡を追ふて小平太は憶るる様な眼を凝と天井に投げました。

「それからどうなすつた。」
 「傳之丞に名乗りをかけて渡り合

ひました。そして屢々私が危くなると、使者が後から聲をかけて下さる、そこで敵がしどろもどろになつた所を、美事突きの一手で仕上げました……あゝ嬉しかったなあ、天にも上る心持だった……」

さう言つて、ふいと吾に返り、「あつ駄目だ」と又啜泣きました。と、俄かに胸の苦しみが来たと思つて、

「あゝッ」と呻り乍ら身悶えしましたが、臆て烈しい咳嗽と共に、大きな血の塊りが出て、小平太は段々息が細くなつてゆきます。

「小平太、しつかりしておくれ。」
 弟の體を確と抱きしめ乍ら、政江は悲しげに名を呼びました。

その時、慌しく戸を引開けて

這入つて来た村人がありました。それは昔、仲間として父に仕へて居た文助といふ百姓でした。

「大變だ、あの傳之丞が誰とも判らぬ者から咽喉を一突刺されてたつた今先死んだといふ事ですが。」

その聲が耳に入つたか、小平太はニコリ笑つて、姉の腕の中で何か物云ひたげに口を動かしつつ息絶えてゆきました。

譯の分からぬ傳之丞の變死について、間もなく不思議な噂が立ちました。それは死ぬ少し前に見た小平太の夢物語です。丁度時刻も大して變らないし——傳之丞が殺されたのは小平太が夢を見た、二時間程後のことでした——さては孝子の一念が届いて、小平太の夢

(日本童話選)

天狗をだました子供

立石美和

水島爾保布畫



たいさう悪戯な、わる賢い子供がゐました。
ある時、おつかさんから、こわれて役に立たない、古みそこしを買ひました。
子供は、そのみそこしを持って、山へ行くと、大きな樹の、根元へ腰をかけて、
「あれ〜江戸が見えるぞ！ おや〜、大阪も

見えるぞ！ 面白い！ 面白い！」
と、そのみそこしを顔にあて、さも面白さうに、大きな聲でいつてゐました。
さつきから、樹の上で、子供のやうすをみて居た天狗様は、
「さて〜、世の中には、不思議なめがねを持つた、子供もあるものだわい。」と、つくつくかんしんして、そろ〜と樹から下りて来ました。
「子供！ 子供！ わしにもちよつと、その眼が

ねを、のぞかして呉れ！」

天狗さまが頼むと、子供は、わざと、驚いたふりをして、急いで、みそこしをふところへねぢこんで、どん〜逃げ出しました。

子供に、逃げられると、天狗さまは、いよ〜ほしくなつて、ほんのちよつとでも、みそこし眼がねで、江戸や大阪の町をのぞいて見たくて、たまらなくなりました。

それで、どん〜子供に追ひついて、

「これ〜、そんないちの悪いことをせずに、後生だから、ちよいと借して呉れ！」
と、頼みました。そこで子供がいひました。

「おぢさんは天狗さまだらう？」

「さうだ。わしは天狗だ。」

「そんなら、かくれ糞だの、かくれ笠を持って居るの？」

「うむこれか。これはわしの寶物だ！」

天狗さまは、さう云つて、糞と笠を見せました。

「いゝなあ！ ぢやあたいの寶物を借すかわりに小父さんの寶物も、ちよつと、借して呉れる？」
「あゝいゝとも！」

そこで、子供と、天狗さまは、寶物のとりかへつこをしました。よろこんで、こわれみそこしを顔にあてた天狗さまが、

「これは變だ！ 見えないぞ！ 江戸はどこだ？ 京大阪は何處にある？」と、クル〜みそこしを廻して居る間に、子供は、すつかり、かくれ糞笠を着て、姿を消して終ひました。

「これは敗つた！ おのれ小僧奴！ よくもわしを欺したな！」天狗さまが、やつと氣がついて、

子供をひどい目にあはせようとしたが、何處に居るのか、子供の姿は見えませぬ。

天狗さまは、くやしがつて、腹をたて、三日三晩、山の上で、ちだんだを踏みました。

子供は、家へかへると、天狗の寶物の、かくれ糞笠を大事にして誰にも知れないやうに、そつと、

たんすの引出へ、しまつて置きました。
ある日のこと、子供のお母さんが、たんすをあけると、たいへんきたならしい、糞と笠がある。あるので、子供のいたづらにちがひないと思つて、怒つて、笠の下へくべて、もして終ひました。

後でその事が判ると、子供は残念がつて大急ぎで、井戸端へかけに行く。ざぶん、ざぶんと、何ばいもく頭から水をかぶつて、からだ中、水だらけにぬらしておいて、かくれ糞笠をもした灰を、べたべたとぬりつけました。
すると、あら不思議！灰のくつついたところから、順々に見えなくなつて、しまひには、まるで姿が消えてしまひました。
子供は、ボン／＼と手をたゝいて、



「おつかさん！ おつかさん！ おつかさんてば！」と、云ふと、お母さんは、さよろ／＼そこいらを探し乍ら、

「あれ／＼、おまへ、どこにあるの？」
と云つて、驚きました。
「うまい／＼、これですつかり見えなくなつた。」と、子供はよろこんで、すぐに、そのまゝ町の方へかけて行きました。
子供は、町へ行くと、いゝ氣になつて、お菓子やだの、おすしやだのへ、入りこんで、おいさうなものを、勝手ほうだいに喰べちらかしました。
けれど、なにしろ、姿がすこしも見えないので、すから、誰も、氣のつく人はありませんでした。そのうちに、子供は、大變、のどがかわいて來

たので、なにか、おいしい飲みものはないかと、そこらを探して、おほきな酒やさんへ入りこみました。

そして、みりんは、甘くておいしいといふ事をきいて居たもので、すから、一つ、のんでやれと思つて、そつと、せんを抜いて飲みました。
みりんが、あんまり、おいしくて、甘いので、子供は、思はず、べろん、べろんと、舌なめずりをすると、さあ大變！口のまわりの、灰が落ちて終つて、忽ち、口だけが、見え出しました。
酒やさんの店では、大さわぎ！
「たいへんだ！ 口のお化が居るぞ！」
「口の化物が、酒盗みにやつて來た！」



「たいじろ！ たいじろ！」
みせ中そうがかりで、子供に打つてかゝるので、子供は、

「これはたまらない！」
と、どん／＼逃げ出しました。
走るわ、走るわ、どん／＼、どんどん、走りぬいて、逃げて來ると、向ふから、さむらひが、三人でやつて來ましたが、たちまち氣がついて、
「やあ！ ごらんさい！ 向ふから口が飛んで來ます！」
「なるほど！ これは妙だ！ 人間の口が空を飛ぶといふ事は、きいた事ありません。化物にちがひないでせう！」
「ひとつ、われ／＼で、退治ようではありませんか！」

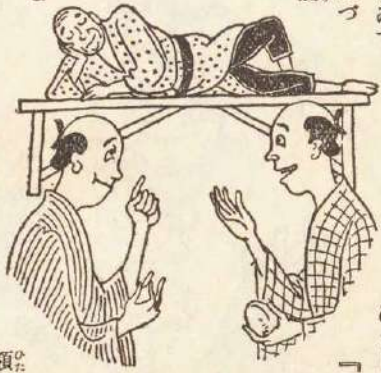
「それがいゝでせう！」
さう云つて、強さうなむらひが、三人で大きい刀をビカ／＼ぬいて、おどりかゝつて来ました。
何うしませう？ 後ろからは、町の人達が黒山のやうになつて、追つかけて来ます。子供は泣たくなりました。つくづく悪い事をしたのを、後かいました。しかし、もう間にあひません。仕方なしに、橋の上から一おもひに、川へ飛び込みました。
「あッ！ 口が川へ飛び込んだ！」
さう云つて、橋の上では、追つかけて来た人々が、押し合ひながら、驚いてゐました。川へ入つた子供は、たちまち、灰が流れ落ちて終つて、裸んぼの、小さな子供の姿を、そのまゝ、現はして、スウイ、スウイと泳ぎ初めました。
橋の上の人達は、
「あッ！」と云つて、あきれました。あまりの、不思議さに、ぼんやりつ立つてゐるばかりで、誰一人、後を追つかけてやうとする人もありませんでした。
その間に、子供は、裏道を通つて、いのちからがら、自分の家へ、逃げて歸りました。
そして、お母さんにも、黙つて、知らん顔をして、ちいさくなつておきました。
町の人や、村の人は、その後、



いつまでも不思議な事もあるものだ、話あひましたが、とうとう、わけがわかりませんでした。
(をばり)

さけのみ爺や

むかし。
たいさう、お酒のすきな爺やがゐて、主人の使ひに行くたんびに、村はづれのお茶屋へよつて、うんとお酒をのんでは、グツグツ夕方まで、ねて終ふくせがありました。
主人も、急ぎの用がたりないし、お茶屋のお婆さんも、起すのが骨がをれてたまらないので、閉口して、いろいろいけんしましたが、ちつとも直りません。
ある日――。けふも、爺やは、お酒をのんで、お茶屋で、大いびきをかいて、前後もしらずに、寝てゐました。
そこへ、近所の息子さん達が、野遊びの歸りに



「お婆さん、また酒のみ爺やがねてゐるね」と云ひました。
「はい／＼、ほんとうに、仕様のない爺やさんですよ。」
「全くだ！ これでは、やとつてゐる主人こそ、いゝめいわくだ。こんな奴には、みせしめの爲にかうしてやる！」
息子の一人は、さう云つて、喰へさしの柿の種を、禿げあがて、ペカ／＼光つてゐる、爺やの額へこすりつけました。
外の息子たちも、
「さうだ、さうだ！」
と、云つて、みんな、柿の種を、爺やの額へこすりつけて、笑ひながら歸つて行きました。

けれど、酒のみ爺やは、そんな事は、少しも知らずにてゐました。そして、夕方になつて、お婆さんに起されると、あわてゝ、家へ歸つて行きました。

暫らくすると、爺やの禿びたいに、柿の木の芽が出て來ました。妙な事もあるものだと思つてゐるうちに、



柿の木は、すん／＼大きくなつて、花がさくやら、實なるやら、秋には、たくさんの柿の實が、眞赤にじゆくしました。よろこんだ爺やは、早速お茶屋へ

それを見た近所の息子さん達は、
「あきれた奴だ！ 今度は、かうしてやるぞ！」
と云つて、のこざりで、ギョリ／＼と引いて、柿の木を、根元から切り取つて終ひました。
それでも、爺やは、何も知らずにてゐましたが、夕方、お婆さんに起されて、あわてゝ家へかへりました。
一つ、きのこが芽をふきました。妙な事もあるものだと思つてゐるうちに、きのこは、どん／＼ふえて、取つても／＼取り切れない程、生えよるよるで、また、お酒をのんで、寢て終ひました。
お婆さんに云ひました。

「お婆さん、お婆さん、額のきのこは、みんなお前につませるから、わしには、酒をのませてお呉れ！」
そして、また、お酒をのんで、寢込んで終ひました。

それを見た、近所の息子さん達は、
「いよ／＼あきれた奴だ！
今度こそは、かうしてやるぞ！」
と云つて、まさ割ぼうちよ



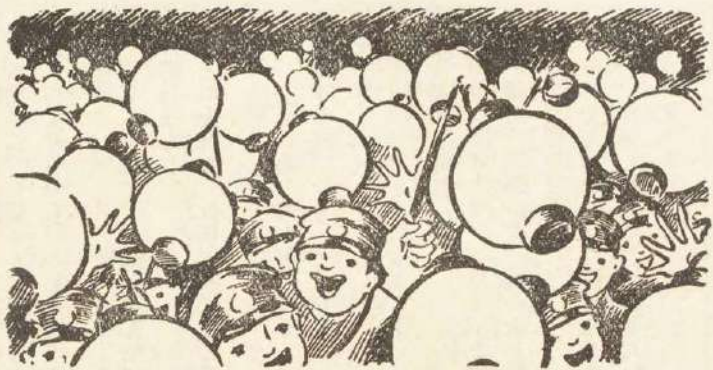
うを持つて來て、
コツンコ！ コツンコ！ と、柿の根をうち割つて、額へ大きな穴をあけて終ひました。
それでも、爺やは、何も知らずに、ねてゐましたが、夕方になつて、お婆さんに起されると、驚いて、家へかへりました。

暫らくして、雨の降る日に、爺やは使ひに出されましたが、すると、雨水が、額の大穴へたまつて、間もなく、そこへ、どじようが、何百匹も何百匹もわき出しました。
よろこんだ爺やは、お茶屋のお婆さんをたづねて行つては、額の池から、どじようをすくひ出して、
「お婆さん、お婆さん、これでお酒をのませてお呉れ！」
と、云つてお酒をのんで寢込んで終ひました。
これを見た、近所の息子さん達は、さすがに、あきれ返つて終ひました。
「とても、酒のみ爺やはかなはない」と云つて、もう、あひてに、ならなかつたと云ふことです。
(をしまひ)

大海戦に勝つまで

原田 謙次

寺内 萬治 郎畫



その當時のことを、思つて見ると、さまざまの光景がはつきりと眼の前に浮びます。まだそんなに遠いことのやうにも思へないので、年月を計へると二十年以上にもなることです。本誌の讀者諸君などの、生れない前のことで、今ではもう歴史上のことになつてしまつてゐます。

その頃、私は十三であつたか

ら、諸君と同じ位の少年でした。日露戦争が、私にとつて特に忘れがたい少年時代の思出であるのは、かう云ふわけです。

その頃私は、對馬に住んでゐました。對馬は、日本で一番戦地に近い所です。もし日本の海軍がバルチック艦隊に破られてもしたら、先づ第一に敵が根據地にするために占領しようとするのは、對馬であります。ですから、對馬は非常に危険な位置にあつたので

す。それで、戦争の成り行きによつては、對馬に住んでゐた私達は生命さへ危険であり、少年ながら私達もそれを覺悟して暮してゐたのですから、その緊張した心もちが深くしみこんでゐるのです。

で、私はその頃のことを思ひ返しながら、當時の私と同じ年頃の諸君に御話したいと思ひます。

私が尋常小學の四年の終りに近づいた頃、日露戦争が始まるといふ噂が喧ましく起つて來ました。學校でも毎日その話で持ちきりです。

先生は、授業を早く片づけて、餘りの時間に、戦争の話をしました。

日本とロシアと、どういふわけで、戦争をしなければならぬか。戦争をするとなれば、相手のロシアはどのやうに強敵であるか、したがつて日本は、如何に力をつけてこれに向はねばならぬか、といふやうなことを、先生は話してきかせるのでした。

世界地圖を掲げて、ロシアと日本との大きさを比較して示された時などは、私達は片唾を飲んで見つめてゐました。

戦争の噂は日ましに激しくなつて、つひに明治三十七年の二月十日に、宣戰の詔勅が發せられました。

實はもう、それよりも二三日前に、我が海軍は、朝鮮の仁川港で

敵艦を二艘撃沈してゐたのです。

つづいて旅順口でも、第一戦で敵に痛手を負はせたのでした。

我軍の勝利——それは日本國民全體に、大きな心強さを與へたに違ひありません。

ことに、殆んど戦地にゐるのも同じやうな對馬の少年達は、もう戦争といふ事で頭が一杯でした。

學校では、講堂に生徒を集めて校長先生のお話がありました。

校長先生は、真面目な顔を一層真面目にして、少年少女達に戦争のことを語るのです。

『ロシアの皇帝がまだ皇太子であつた頃、日本に來られた事がありました。その時、皇太子に斬りかかつた日本人があつて、そのため

に皇太子は負傷されました。そして本國へ歸つてから、その負傷した寫眞を全國に配つて、日本で受けた創だといふことを示したのです。ロシアからいへば、日本に對してそのやうな恨がありませぬ。また日本からいふと、あの日清戦争の時に、我が軍が血を流して取つた遼東半島を、三國干渉で支那に返さしたあのことは、到底、日本の忘れる事の出来ぬ恨でした。さういふわけですから、ロシアと日本との戦争は、避けることの出来ないものです。日本はこの際、どうしても戦はなければならぬのです。」

がたから聞いて、知つてゐるでせう。しかし、(校長先生は特に力を入れて言ふのでした。)しかし皆さん。日本には大和魂といふものがあります。あの日清戦争を、御覽なさい。支那はあのやうに大きな國ではありません。人口といひ、面積といひ、日本の幾倍あると思ひますか。支那と戦争をはじめた時にも、世界各國では、とても日本が勝つとは思ひませんでした。けれども、日本は勝ちました。(生徒は喝采した)それは何故でせう? 大和魂があるからです。今度ロシアと戦争しても、日本はきつと勝ちます。(生徒は喝采する)きつと、きつと勝ちます。(生徒は次第に熱狂して喝采をつづき、間には口笛を吹くものもあつた。そ

ました。

二

校長先生は、更に、言葉を續けて、
「皆さんはまだ年が若いから、兵士となつて戦争に出ることは出来ませぬ。併し、日本のためには大切な第二の國民であります。一生懸命に勉強して知識を養ひ、また身體を丈夫にして、いざと云ふ場合に備へることを忘れてはなりません。昔、西洋では、三十年戦争とか、百年戦争とかいふ長い戦争のあつた例もあります。今度の日露戦争にしましても、いつまでつづくかわかりませぬ。そればかりでなく、皆さんは、特に、この對

こで校長は、皆を鎮まらして、やや聲を低くした。)しかしながら、支那には勝つたけれども、ロシアは支那などと違ふ。軍隊も強いし、武器も進歩したものをもつてゐるといふ人もありません。それは、たしかで戦争の時のままではありません。この十年間にどれだけの進歩をしたと思ひます。軍艦にしても、日清戦争の時には松島艦などが一ぱん大きかつたのでありますが、今は、皆さんも御存知の通り、もつと大きなよい軍艦があります。三笠、朝日、敷島、富士、八島、初瀬などの戦艦があります。陸軍にしても、六箇師團であつたのが倍の十二師團になりました。

馬の「位置」といふものを頭に入れなければなりません。我が海軍は強いから、安心してゐてよいにはちがひありませんが、勝つことばかり知つて、運の悪い時のことを考へないのは愚かであります。萬萬が一にも、敵がこの對馬に上陸して來るやうなことが起つたら、その時は、軍人ばかりでなく、われわれも、皆さんも戦ふ覺悟をしなければなりません。これは空想ではありません。戦つてこそではありません。ほんたうの生命がけです。日本の少年として、はづかしくないだけの覺悟をして置かなければなりません。ロシアは、その面積や人口が、日本の幾倍あるかといふことは、皆さんはもう先生

決して恐れるには及びませぬ。ただ困ることは、日本は金持でないことです。貧乏な國であることです。それで、皆さんも小遣を節約し貯金をなされるやうにおすすしめします。皆さん。愈々戦争は、はじまりました。昔の戦争でいふなれば、鎗矢はすでに、放たれたのです。これから戦ふばかりです。繰返して申しますが、日本の少年としてはづかしくないだけの覺悟をして置かなければなりません。」
校長先生は、自ら非常の覺悟をしてゐることを、その力強い言葉の内に現はされました。
少年たちは、戦争の恐怖を感ずるといふよりも、むしろ沸き立つて來る勇氣をどうすることも出来

ない程の感激に燃えて、校長先生の話の間にも、喝采をしたり口笛を吹いたりするのです。

私は生れてはじめて、「いのちがけ」といふ覺悟をしたのでした。さうしてゐる内にも、戦争は次第に進んで行きましたが、海軍も陸軍も、次ぎから次ぎと我が軍の勝利が報せられました。

私達の先生は、「旅順口夜襲の歌」を作りました。生徒たちはその勇しい軍歌を歌ひながら、隊伍を整へて歩き廻つたりしました。

三

これを全滅してしまへば、日本の勝利といふことに響きまゐるのですが、萬一にも、日本海軍の敗けにでもならうものなら大變です。敵はすぐに對馬を占領して根據地とし、滿州へ出征してゐる我が陸軍と日本内地との連絡を断つてしまひます。さうすると、陸軍は糧食などにも困ることになり、大敗北を來たすことは、わかりきつたことでした。

この一つの戦こそ、正に日露戦争の運命の決する戦であつて、バルチック艦隊の廻航は、一日一日とその運命の日の到着を縮めて來るのでした。

しかし、その艦隊が何時頃着くかと云ふ事は、まだはつきり分り

ませんでした。さうした間に、對馬には、熊本の師團から後備兵が二聯隊、島の守備に渡つて來ました。

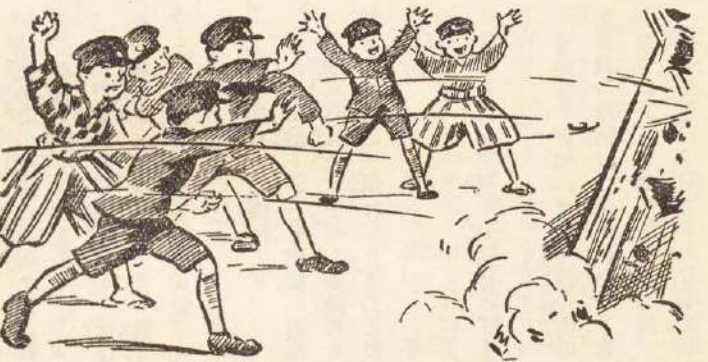
その前、對馬には、砲兵が一大隊と歩兵が一大隊とゐるだけでした。それで、熊本から後備聯隊が渡つて來た時、對馬の少年達は、はじめて聯隊旗と云ふものを見たのでした。それは、かつての戦の激しかつたことを物語る如く、彈丸のために破れて、殆んど房を残してゐるばかりでした。

戦争がはじまつてから、對馬にはかに活氣づいて來ました。九州内地からは、澤山、商人達が入り込んできました。

しかしその頃、露偵(ロシア方の探偵)といふことがやかましく言はれて他所から入りこんで來る者には、特に注意の眼が注がれ、憲兵隊につれて行かれて調べられる者が澤山ありました。併し、ほんもの露偵はゐませんでした。

滿州の方の陸戦の都合から、對馬の守備に來た熊本の方の軍隊も滿州へ行くことになりました。軍隊は、竹敷といふ海軍の要港から御用船に乗りこみ、軍艦に護られて行くのでした。

私達は竹敷までの、四里の路を歩いて其の船出を見送りに行きました。



ら、軍歌を歌ひ、旗を振り、萬歳を唱へるのでした。

天に代りて不義を討つ
忠勇義烈の我軍が
歡呼の聲に送られて
今そ出で立つ父母の國

私は、軍歌や萬歳に聲をふりしぼつて、しまひにはもう聲が出ないやうになつてしまひました。

兵士達は甲板の上に出てゐて、見送る私達に向つて「萬歳」を唱へました。

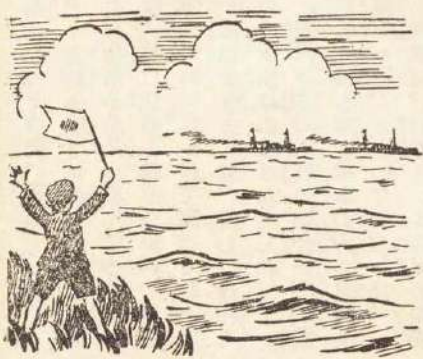
私達は學校でも、戦争についての演習などで、夢中になつてゐました。

バルチック艦隊が來て、萬一にも我軍が負けた場合には、敵が對

馬に上陸するのを迎へ撃たなければならぬ。その時は、私達は海岸に出て、敵のボートに石を投げつけることにしようといふ相談をまとめました。

『石だ、石だ。』

さう言ひながら或る一人の少年



が、運動場の片隅の便所を目がけて、小石を投げつけました。それが見事に命中すると、皆はその痛快さに誘はれて、我も我もとその便所を目がけて石を投げました。

災難なのはその便所です。

少年達の激しい一斉射撃にあつて、忽ちに傾き、やがて轟然たる響きとともに、倒れてしまつたのです。

『萬歳。』

皆はそれを、見て凱歌をあげました。

そのことが知れて、校長先生の前立つた時は、皆は悪いことをしたといふ氣に返つてゐました。校長先生は、なせこんな事をして

八二
たかと云ふ事を聞き終つて、一通り皆を戒めただけで、別に罰はしませんでした。

四

敵艦隊の来る日が、次第に近づくて來ました。

勝つか負けるか。さあ來い。さういふ氣が私達の全身に、一杯になつてゐました。

對馬の危険なことは、對馬にゐて考へるよりも、ほかからの方が一層危く見えました。

私は對馬の土地の者ではありません。父が官吏で對馬に渡つたので、それと一緒に居つてゐたのです。ですから、親戚などは皆、九州内地の方にありました。



私は『どんな事があつても、對馬にゐます。』と答へました。

對馬が危険だといふけれど、對馬が占領されて、私達が生命を捨てなければならぬやうな場合には、どうせ日本は大負けなのだから、何處にゐたとしてやはり危険です。ただいくらかその危い目に早くあふかどうかといふだけです。

それを恐れて、内地へ逃げ歸るなどといふことは、男のなすべきことではありません。

對馬の少年達は、皆、死を覺悟して、運命を待つてゐるではありませんか。

私も尋常二年から對馬に來て、今はもう親しい友達も澤山出來ました。ことに美しい、對馬の自然

は、私を慈愛に満ちて抱いてくれます。

運命次第で、父や母は死ぬかも知れません。その時には、子も一緒に死なうではありませんか。

學校の先生や友達も、死ぬでせう。その時には私達も一緒に死なうではありませんか。

私ももう十三です。年の割に身體も大きい。戦ふべき時が來たら大いに戦はう。内地へなんか逃げるものか――。

さういふ私の覺悟を見てとつて父は微笑みました。

バルチック艦隊の來る日を、今日か明日かと、待つ様になりました。私達はまだ眼の前に敵を眺めてゐる位に緊張して、殆んど寢食

さういふ親戚などから、對馬は危険だから、一家の後繼である私を、内地の方へ返して置かないかと、屢々手紙を寄越しました。父はさうした手紙を見せて、私にどうするかと聞きました。

をさへ忘れる程でありました。

しかし、あの歴史上未曾有の大
海戦は、私達の知らない間に片づ
けられてしまひました。

「日本大勝利、敵艦隊全滅」とい
ふことを報せられた前の日に、そ
の大戦は見事に、實に見事に、
實演を終つたのであります。

それを聞いた時、私はむしろ、
あつけにとられたやうに、がつか
りしました。狐にでもつままれた
やうな気がしました。

對馬でも、所によつては、海戦
の砲聲が聞えたといふことでした
が、私達には聞えないですみまし
た。

海戦のことを聞いて、すぐに山

にかけ登つた私達は、沖を通る日
本の軍艦の二三艘を見出して、は
るかに「萬歳」を叫びつゞけて歸
つた位でした。

しかし、戦勝の歡喜は、しばらく
くしてから痛切に感ぜられて來ま
した。

「皇國ノ興廢此一戦ニアリ。」
旗艦三笠のマストに高く掲げら
れたこの信號のこゝろを聞くに

ついても、まことに此一戦にかか
つた大きな運命といふものが、深
く考へられるのであります。
戦勝 祝賀の旗行列、提灯行列
が行はれました。

日本勝つた、日本勝つた
ロシア負けた

八四
ロシアが風邪ひいて
はなれた

かうした單純な俗な歌を、剽輕
な調子で繰り返し繰り返し歌つて
廻つたものです。

「日本海大戦之歌」といふ、莊
重な立派な軍歌の出來たのはそれ
からしばらく後のことであつたの
で、私達は「この日本勝つた」を
歌つて廻るよりほかはなかつたの
です。

勝つたといふ歡びを率直に表す
には、素朴なかうした歌が適して
ゐたのである様に思はれます。
まことに「此一戦」にかかつた
運命を思ふ時、私は今でも胸の高
鳴りを覚えるのです。(をばり)

狸が利口か

人間が利口か

村はづれの野の中に、杉の樹が
一本立つてゐました。いつ、何處
から來たものか、一疋の狸がそ
の杉の傍に鼻をくつて、村の人が
通ると、いろんなものに化けてお
どかしました。

ですから、日が暮れると、みん
なこわがつて、そこを通らなくな
つてしまひました。

村の若衆の中には、「狸征伐を
しようぢやないか」と、よりよく
相談はしてゐましたが、皆な口先
きだけで、さて實際に自分から進
んで出かけて行かうとする者もな
くありません。

いので、老人達からは、
「村の若い者は、皆ないくぢなし
ばかりだ」と、輕蔑されました。

そこで、村の中でも一番賢い
といはれてゐる男が、何か自分
に巧い考へが出来たと見えて、
日が暮れてから一人で出かけて行
つて杉の樹の傍を通りました。

月夜の暗でしたが、樹の枝が
一本一本、はつきり見えてゐまし
た。狸は樹の根本で居眠りをし
てゐましたが、人の足音がしたの
で急いで樹の上に駈上りました。

狸は大喜びでした。何かこわ
うと考へながら枝の中で、がさ
がさやつてゐました。
男の方でも、狸のゐる事に
気づいたので、わざと、
「はてな、この杉の樹には、右の
方に一本枝があつた筈だな」と



いひました。
狸は何かに化けやうと思つて
ゐるところへ、ふいにいはれたの
であつて、右の手をにゅつと出

ぞ。しかし、左の方にも枝があ
つた筈だなア」といふと、狸
はまた大急ぎで、左の手をにゅ
つと出しました。

「成る程、あつた〜。しかし、
下の方にも、もう一本枝があつた
筈だなア。」
狸は前後の考へもなく、あ
はてて右足を出しました。

狸は、大急ぎで、狸なつか
まへて、村へ持つて歸りました。
それから、悪い狸があなく
なつたので、村の人達は安心して
野原を通ることが出来るやうにな
りました。(をばり)

ねんね、ねかそこ (推薦)

山梨 吉川 行雄

チツチと啼いて

いしたゝき いしたゝき

お山ちや



小石はたゝけまい

八六

いしたゝき いしたゝき

お山にあるこきや

なにしたゝく

よい子のねんねの

せなたゝく

チツチと 啼いて

いしたゝき いしたゝき

ねんねねかそこ

子をたゝく



どこ 帰る (推薦)

愛知 森 ほたる

お空は

お星で

一ばいだ

野原は

夜つゆで

一ばいだ

帰る

仔馬は

どこ 帰る

お空は

お星で

一ばいだ

野原は

夜つゆで

一ばいだ

八七

鳩の巢

(推薦)

無名

軒の鳩の巢
暗くてさ
鳩の子ホロく



ないてゐた
軒の鳩の巢
温くてさ
鳩の子トロく
夢見てた
軒の鳩の巢
せまくてさ
鳩の子コロく
だかつてた

赤さんぼ (推薦)

秋田府 金勇三

赤い赤い 赤さんぼ

ふる雨は

こんくうこんの

ひよこいろ

ひよこは

おせごの

ごりごやで

はこべのはつばを

のぞいてる

はこべのはつばに

雨がふる

こんくうこんの

雨がふる



夕焼背負つて
つういつい

はこべ (推薦)

大阪宏

文

はこべのはつばに

大發明家エヂソン

廣瀬龍太郎
平澤文吉 畫



（前編までの梗概）エヂソンは、小さい時から、化学や物理などの實驗をするのが好きでした。自分一人の手で、電信機などを作つて遊んでました。併し、お家が貧乏だったので、自分で働いて、自分で生活しなければなりません。

エヂソンが十五才になつた時、マッケンジと云ふ人の世話で、鐵道會社の電信技手になる事が出来ました。これは、十五の少年としては、大した出世です。エヂソンは、生れて始めて、月給二十五弗を貰ふ事になりました。

八、はてな、へんだぞ！

エヂソンが十五才になつた時、マッケンジと云ふ人の世話で、鐵道會社の電信技手になる事が出来ました。これは、十五の少年としては、大した出世です。エヂソンは、生れて始めて、月給二十五弗を貰ふ事になりました。

仕事と云ふのは、毎晩 停車場へ行つて、列車の通過を書き留め、それを次の駅へ電信で知らせればよいのでした。ですから、晝間はまるきり暇なので、エヂソンはその間にいくらでも勉強する事が出来ました。ところが、晝間あんまり一生懸命にやるので、夜になると寝れなくなって、眠くてたまりません。エヂソンは、よく電信機の後で居睡りをしました。汽車が通つて行つたのも知らずに、グーグー高聲で寝てゐる事もありました。

した。

エヂソンの居る隣の次郎には、電信部の主任がゐて、エヂソンから電信のかつてくるのを待つてゐました。ところが、汽車はもう直ぐ傍まで来て、切りに汽笛を鳴らしてゐるのに、エヂソンからは少しも報告が参りません。主任は「變だな」と思つて、直ぐに電走車を任立て、次の駅へ来て見ますと、これはいかなこと！ エヂソン先生は肝をかい

て睡つてゐます。この主任は、ふだんからエヂソンを可愛がつてゐたので、別段腹も立てませんでした。

「君、よく氣をつけて呉れなくちや困るぢやないか。列車が衝突でもしたらどうするんだ。」とある事しか云ひませんでした。

エヂソンもその時は、「ほんとにさうだ。私は責任の重い仕事をしてゐるのだ。もうこれからは決して寢まい」と強く決心するのですが、夜になると、やはり、ウツラ〜と睡氣が差して來ます。エヂソンは、又しても

居睡りをして、電信をかけるのを忘れてしまいました。

主任は、これには困つて、なんとかして工夫は無いものかと、色々考へた妙句、一つのい、事を思ひつきました。

「エヂソン君、睡氣がまししい、工夫が出來たよ。それは、三十分毎に、君の所から、僕の所へ、電信でモートルス信號の内のAの記號を送つてもらふんだ。い、い、い、三十分おきだよ。さうすれば、君だつて睡くらずに済むに違ひない。」

エヂソンはそれかう毎晩、夜つびで起きてゐて、主任の許へ、Aの記號を送らねばなりません。もう居睡りどころではありませ

せん。『こいつは困つたな。なんとか、俺の代りにAの記號を送つてくれる者はないかな？』

エヂソンは、寝たい事を考へだしました。そしてたうとう素直な事を思ひつきました。

エヂソンは、時計と、電信機との間に、自分の發明した機械を置きました。まづ、時

計が「チーン」と三十分を報すると同時に、新發明の機械に附いてゐる棒がバタリと倒れて電信機のAの記號のボタンを押すやうな仕掛けになつてゐるのです。

「これでい、これで安心して睡られる。」エヂソンは満足さうにほ、みながら、又居睡りを始めるのでした。エヂソンが眠つてゐる間、電信機は忠實に、Aの記號を電送してゐました。

初めの二三日、この計は、至誠、旨く行きました。主任は、三十分毎に、チャンとエヂソンの所から電信がかつてくるので、

「エヂソンも、こんどは、改心したと見えるな。」と思つて、喜こんでゐました。

ある晩の事、主任は、退席のきにエヂソンと電信で話をしようと思つて、エヂソンの扉を呼びだしました。所が、どうした事が、いくら呼び出した信號をしても、エヂソンからは何んの返事もありません。

「はてな、おかしいぞ。」

と、主任は思ひました。なほも、根氣よく

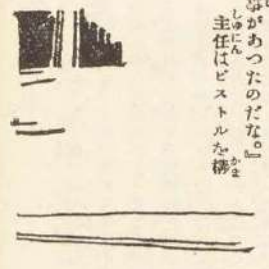
呼び出しの信號をかけたが、全く返事がありません。

「これは不可ない！ ことによると、強盗が停車場を襲つて、エチソン連を襲殺したのかも知れない。」

主任は、かう思ひました。アメリカの鐵道では、よくそんな事があるのです。主任は、直ぐに短銃を腰に差し、仲間の二三人の者と共に、輕走車に乗つて、次の驛へ駆けつけました。

深夜中の驛にはランプが明々と灯つてゐるばかりで、ひっそりと静まり返つてゐます。電信室にも、人の居る氣配もしません。

「さては、いよいよ變事があつたのだな。」主任はビストルを構



へながら、そろり／＼と、近寄つて行きました。仲間の者達も、皆んな短銃や短刀を持つてゐました。

電信室へ進入つて見ると、中はガラんとして、人影も見えません。耳を澄すと、何處かで鉄蹄が鳴いてゐます。窓からは、明るい月光が差し込んで、床の上に、外の立木の

影が映つてゐます。

「エチソン！ エチソン！」主任は、扉の所に立つて呼びました。

併し、何んの答へもありません。主任は、暫く何が考へてゐましたが、やがて足音を忍ばせて、部屋の中へ進入つて行きました。

突然、主任は、ぎょ／＼としたやうに立ち止まりました。主任の眼は、釘付けにされたやうに、長椅子の上に注がれてゐます。その長椅子の上には、エチソンの死體が、長々と横たはつてゐるのでした。

主任の後ろに居た人達も、皆んな驚きに打たれて、暫くは音を云ふ事も出来ませんでした。

やがて主任は、決心したやうに長椅子へ近寄つて行きました。そして、エチソンの死體の上に身を屈めた途端、再び驚いたやうに聲を擧げて、まじ／＼と死體の姿に見入りました。

エチソンは、死んでゐるのではなくて、眠つてゐたのです。幽かな聲が聞えて、その

のボタンを、自動的に動かしたではありませぬか。電信機は、エチソンに代つて、忠實に技手の役目を果してゐるのでした。

主任は、總ての事を覺りました。暫くの間、黙つて突つたつたま、この巧妙極まる機械と、エチソンのだらしない姿とを見較べてゐました。

やがて、主任は、ツカ／＼とエチソンの傍に歩みよつて、その肩を掴んで、強く揺ぶりました。

「エチソン君、起きたまへ！」エチソンは、ぼつち／＼と眼を開きました。そして、赤くなつた眼で、ぼんやりと主任の顔を眺めてゐましたが、やがて、ハツとしたやうに、憶へ、立上りました。頭の水はモチャ／＼となり、ネクタイは横ツちよの方に曲がつて、二目と見られた姿ではありませぬ。

「エチソン君、今日限り、君を解雇する。直ぐ出て行つてくれたまへ。」

眼から涙のたばかりの、エチソンには、



金で繋がれてゐます。

「ひよつとすると……」主任の頭にはある一つの疑ひが存びましたので、時計の針を、一時半の所へ廻して見ました。

「チーン」と音がした途端、これはまア何んと云ふ事ぞう。妙な機械の真中に立つてゐる金屬製の棒が、バマリと倒れて、電信機

を照して見ましたが、なんに使ふものか、一向に分りませんでした。電信機とその妙な機械、妙な機械と時計との間は互ひに刺し

度毎に、胸のあたりが高くなつたり、低くなつたりしてゐます。

「畜生！ れてるんだ！」主任は、仲間の方を振りかへつて、苦笑ひしながら云ひました。皆んなも「なアーんだ」と云ふやうな顔をして、室の中へ進入つて来ました。

その内の一人が、電信機の傍に、なんだか妙な機械の置いてあるのを見出しました。

「部長、なんでせう、これは？ 妙な物がありませんぞ。」

九、あやふく大衝突

一寸何んの事が分りかれた様子でしたが、主任の後にズラリと並んだ仲間顔を見、卓の上の新發明品を見た時、すべての事が明らかになりました。流石にエチソンは、赤い顔をして俯向いてしまひました。

「エチソン君、僕は、君のふしだらに就いては、随分我慢して来たつもりだ。だが、君はとうとう、ものにならなかつた。君の勤め最中、幸ひに何んの過失も起らなかつた事を、神に感謝したまへ。」

主任はかう云つて、俯向いてゐるエチソンの額の前あたりを、ちいツと見詰めてゐました。その額は、少年には珍らしいほど廣く理智と聡明で輝やいてゐるやうに見えました。主任の頭には、先刻の巧妙な機械の事が浮びました。

「此奴は、ひよつとすると先々偉い者になるかも知れぬ。」

主任は、ふツとそんな事を思ひました。併し、口では何んとも云ひませんでした。

エチソンは、たうとう、免職になつてしまひました。併し、格別がツかりもしませんでした。「なアに、その内に又い、口があるだらう」ぐらゐに思つてゐました。

のんきな者には、わりあひに早く、運が開けます。あくせくして、運を掴まうとするのは考へものです。併し、なにも、「果報は終て待て。」と云ふ意味ではありません。終てある所へ落ちてくる果報は、鼠の糞ぐらゐなものですよ。「御からばた餅」と云ふ言葉もありです。併し、細からばた餅が落ちてくる時には、塵も一緒に落ちてくることを忘れてなりません。

エチソンには、何時運が落ちて来てもいいだけの準備がしてありました。ですから、運が落ちて来た時に、取り違さずに、しツかりと捕へることが出来ました。つまり、「果報は終て待て。」ではなく、「果報は起き待て。」と云ふべきでせう。

エチソンは、それから間もなく、別な鐵道會社の電信技手に雇はれました。ところが、此處でもやはりエチソンは、晝間一生懸命に勉強するので、夜になると眠くて堪らず、つひ居睡りをして、電信を打つのを忘れてしまひました。

一度などは、その睡で留めて置かねばならぬ列車を、知らずに通過させてしまつて、危く大衝突を起しかけた事がありました。たうとう、エチソンは、此處でも眼を出されてしまひました。

そこで、エチソンは考へました。「私には、どうも、かう云ふ責任の重い仕事は考へものだ。今まで、幸ひ非道い過失も起らなかつたからいいやうなもの、若しもことがあつたら取り返しがつかない。それに、電気や化学の實驗なども思ふやうに出來ないから、いッそ、こんな勤めは止めてしまはう。」

エチソンは、かう思ひました。

エチソンはその頃、熱心に、化学や電氣に關する書物を読みました。それはなにも、將來大發明をする爲めに、その下準備に讀むと云ふのではなく、たゞ本を讀むその事が、エチソンにとつては非常な楽しみであつたのです。

エチソンが、どんなに熱心に本を讀んだかと云ふ事に就いて、一つの面白いお話があります。

十、いきなり駆け出した……

その頃、エチソンは、アダムスと云ふお友達と仲よくなつて、二人で一軒の家を借りて住んでゐました。アダムも、たいさう本を讀むのが好きでした。二人は、暇さへあれば古本屋へ行つて、なにか掘り出し物はないかと漁つてゐました。

或る日の事、エチソンは、古本屋の棚を覗いてゐる内に、フアラアの書いた、電氣學の本を見つけ出しました。それは、五六冊組になつたもので、エチソンが豫てから、欲

しいと思つてゐたものでありました。エチソンは早速、財布の底をばたいて、その書を買ひ求めました。

どツしりと重みのある、六冊の本を手にした時、エチソンの心は喜びに躍りました。

「アダムス君、さア家へ歸らう！」

と、エチソンは勢ひよく云ひました。

「まア、待つてくれたまへ、僕は未だ自分の本を探さないんだから……。」

「君の本？ 君の本なんか、どうだつてい、ぢやないか。」

「い、事はないよ。君は彼いや。自分の本が見つかると、さツさと歸らうなんて云ふんだもの。」

「だつて僕は早く讀みたくてたまらないんだもの。……。れ、アダムス君、歸つてくれ給へな。その代り、明日僕も一緒になつて、君の本を探してあげるから。れ、れ、れ。」

「いやだなア……。」

「ぢや、僕だけ先に歸るよ。」

「そ、そんな事は止したまへ。……。仕方が

ない、ぢや僕も一緒に歸るよ。」

アダムスはたうとう負けて、エチソンと一緒に、下宿へ歸つて來ました。

家へ着いたのは、晩の九時頃でありました。そこで二人は、パンとバターだけの冷たい食事をして、アダムスは直ぐに寢室に潜りこむし、エチソンはその傍で、燭燭の光りな頼りに、今買つて來た「電氣學」を讀げました。

靜かな晩でした。何處かで蟲が鳴いてゐました。燭燭は時々、ジイジジ……と妙な音をたて、壁にはエチソンの大きな影法師がゆらゆらしてゐました。

エチソンは熱心に讀みました。右手を額にあて、壁を突いて、夜の更けるのも忘れて讀みました。十二時、一時を過ぎても、エチソンは止める様子もありません。

その内に蠟が鳴いて、暖の光りが、翌びやかに窓のあたりへ寄つて來ました。二本目の蠟燭も、もう殆んど燃え盡さうとして、溶けて洗れた蠟が、机の上にバターのやうに

固つておりました。
室の中が明るくなつて来た頃、エチソンは始めて本を置き、立上つて窓を開けました。四方の冷々とした風が、水のやうに室の中へ流れ込んで来ました。エチソンは、胸をあけて、力いっぱいこの新しい空気を吸ひ込みました。

不思議とエチソンはこの時、少しも疲れを感じませんでした。心の中は云ひやうのない爽々しい気分で満たされておりました。

エチソンは、外へ出て顔を洗ひ、歸つて来て見ますと、友のアダムスは、未だぐつすりとお眠つておられます。その顔がなんだか、何時もより黄色いやうに見えました。

エチソンは、手に持った濡れ手拭をブランと下げて、その先で、アダムスの鼻の下の額だのを強で廻しました。アダムスは、首を振つて、何かムニャ／＼云つておりましたが、やがて眼をあいて、エチソンの其處へゐるのを見ました。アダムスは、濡れ手拭を胸ざとつて、

『よせやい、朝ッばらから……』

と云ひました。

『さア、起きたまへ。飯を食ひに行かうぢやないか……』

やがて二人は打ち連れあつて、家を出ました。二人の家から町までは、かなり離れてゐて、その間は、向になつておりました。

二人は道を歩るきながら、いろ／＼と話しあひました。

『ゆうべは、何時までやつてみたんだ。』

と、アダムスは、まだ眼氣の覚めないやうな聲で云ひました。

『うん、今朝までやつてゐたが、ほんの二三十枚しか讀めなかつた。思つたより六ヶしい本だ。』

さう云つたエチソンの顔は、何處となく沈んでおりました。エチソンの頭は、その時、アララーの電氣學の事で一杯だつたのです。自分の身体には限りがあります。それなのに、學問には限りがない。學べば學ぶほど廣くなつてくる——さう思つた時、エチソン

の頭はイラー／＼して来ました。

『さうか、たつた二十枚しか讀めなかつたか。ぢやア、あの六冊を全部讀み終るには、まだ／＼大變だね。』

『さうだ、まつたくさうだ。あの本だけでも、こんなに時間をとると思ふと、僕は、僕は……』

エチソンは、話してゐる内にだん／＼興奮して来て、

『アダムス君、僕はまだやらねばならぬ事が澤山ある。僕は急がなくてはならぬ！』

かう云つたかと思ふと、エチソンは、いきなり駆け出しました。人間の一生の短い事を思つた時、エチソンは、居ても立つてもゐられなかつたのでせう。

『おうい、エチソン君！ 待つてくれたまへ待つてくれたまへ！』

アダムスは驚いて呼びました。併し、エチソンの姿は、瞬たく間に並木道を曲がつて、見えなくなつてしまひました。



エチソンの學問に對する熱心さは、萬事がこの通りでありました。エチソンはその頃、本を讀むかたは、化學や電氣に關する實

験に熱中しておりました。併し、多くの著へがある譯でもありませんから、エチソンは間もなく、毎日の生活にも困るやうになりました。それで、何處かい勤め口は無いかと思つて、方々の町を移り歩きしました。

或る日の事、エチソンは、ニューヨークのウオール街へやつて来ました。此處は名高い商業街で、多くの人々が集まつて、鐘の聲を突ついたやうな騒ぎでありました。エチソンは、その中を、田舎者らしいボカンとした顔つきで歩いておりました。エチソンが、『金價通信所』の前までやつてくると、此處は今までよりも尚一層ひどい騒ぎ方です。皆んな眼の色を變えて、口々に何か喋つてゐる有様が、只事ではありません。『なんですか？ なにが起きたのですか？』エチソンは、傍にあつたお爺いさんに聞いて見ました。『なアに、通信所の電氣機が壊れたんですよ。それで通信がバツタリ途切れたもんだから、皆んな固つてゐるんでさ。ごらんない。あの電氣機の傍で、青くなつてゐるのがゐませう。あれが所長のローさんです。可哀さうに、あと二三時間経つても癒らなかつたら、奴さん、みんなから袋叩きにされるかも知れませんぜ。』



保己一の

小さい頃

田中宇一郎

寺内萬治郎畫



武藏國保木野村と云ふさびしい片田舎の百姓、萩野宇兵衛に寅之助と云ふ子供がありました。この子供が、あの有名な塙保己一にならうとは、誰も夢にも思つてゐなかつたでせう。

寅之助は三才の時に病氣にかかつたのがもとで、五才の春には、とうとう、盲人となつてしまひまし

た。子供ながらも、どんなに、泣き悲しんだかしれません。しかし、いくら、泣いても泣いても目は開かないのです。お父さんもお母さんも、途方にくれるほど、悲し

み、醫者よ薬よと云つて、手をつくせるだけつくしましたけれど、そのかひもありません。名をかへたら、なほるかもしれないといふ話を聞いたので、寅之助を辰之助とあらため、また、その次ぎには多門坊とかへて見ましたが、これも、いつかう、ききめがなかつたのです。

小さい時から草花のすきな寅之助は、盲人になるまでに、廣い廣い野原を歩きまはつては、いろいろの美しい花をとつて来て、庭にうへて、楽しみました。「ほう、今日はきれいな花をとつて来たな」とお父さんにほめられると、また、それが、うれしくてたまりません。

「おお、もう、あの、きれいな花の色も見られない。あの青い青い空も。」と、盲人になつた寅之助は目あきの時を思ひだして、たいさう、かなしみました。でも、物の色をおしへるのに、「これは、タンポポの色だ」と云ふふうに、花の色を聞かせると、う

れしがつてゐるのでした。

不幸は、盲人になつたばかりではありません。また、やがて、第二の、不幸がやつて来ました。それは、お母さんが急に病氣になつて、手あつてい看病のかひもなく、死んでしまつたことです。寅之助は泣いても泣いても泣きたらないほどでした。しかし、また、氣を持ちなほして、都に出て、すぐれた人にならうと決心しました。「目が見えないだけだ。ほかに、かはりは無い。盲人だつて、えらい人になれる」かうした氣持が、この決心をかたくしたのです。

その頃、また、ある人が太平記と云ふ本をそら讀みすることが出来たばかりに、都の大名の先生となつて名をあらはしてゐるのを聞いて、「四十巻しかない太平記を知つてただけで、えらい先生になれるなら、それ位のことには自分で出て来る。よし、これから都へ出て、きつと、えらい人

になつて見せよう」と思ふと、一日も早く都へ出たかつたのです。

「お父さん、私は都へ出て修業したいと思ひますから、どうぞ、許して下さい。」とある日、思ひきつて云ひ出すと、

「目の見えないお前が都へ出たつて、むだだ」と、お父さんは、とりあひません。

「どうぞ、御願ひです。きつと、えらい人になりま

すから。」

寅之助も、かう云つてきませんでした。お父さん

も、とうとう、許すことになりました。

武蔵野には桃やタンボポの花が咲き亂れる春に、その時、十三才の寅之助は、いよいよ、杖をたよりに、遠い江戸をさして、吾が家を出發したのです。

さて、目ざして行つた處は、江戸四谷の雨宮檢校須賀一といふ盲人です。さつそく、許されて門人となつた寅之助は、名を千彌とあらためました。

もともと、須賀一の門人達は琴、三味線、琵琶などの音楽と、針治をならふのでしたが、寅之助の志は、學問をして學者にならうとするのだから、本業の方には、さつぱり、身がはいらず、ひまさへあれば、ただ、一生懸命に勉強ばかりしてゐました。

やがて、萩原宗固といふ人の門人となつて、物語りや和歌の道を學び、また、川島貴林といふ人について支那の本や神道のことをならひました。そればかりではありません。ちやうど、須賀一の近所に松平乘尹といふ學者がすんでゐたのを、幸に、その門人となつて、一心に學問もしました。

乘尹は寅之助が、ただの子供でない。すぐれてえらい子供だと思つて、いそがしいのにも、毎朝一時間位、ていねいに教へてやりました。

ある日のこと、乘尹は、一人の友人に向つて、
「千彌といふ盲人の子供は、ただの人物ではないぞ。なにしろ、きおくのいいことは、まつたく、び



つくりするほどだ。それで、學問には、一心不亂と來てゐるからな。もし、あの子供が目があいてゐたら、あまり、りこうすぎて、大きなあやまちをやり出すかもしれない。盲人で、かへつて、よかつたのかも知れない。でも、あの子は、きつとえらい人物になるよ」と、云つたことがあります。

寅之助は、まだまだ、自分の學問のたりないことをさとつて、山岡妙阿といふ學者について學び、また、品川の東禪寺の坊さんから、醫術を學びました。十八才の時、そのかひがあつて、とうとう、盲人の頭となつたのであります。こんな早い出世は、あまり澤山ないので、人々も舌をまいて驚きました。名も、また、保木野一とあらためられました。

話のもとに戻りますが、寅之助が始めて須賀一の弟子になると、教へられたのは、三味線でしたが、今日、ならつたものは、翌日になると、けろりと忘

れてしまふやうなぐあひで、三年も、けいこはしたが、ただの一曲でもおぼへられなかつたのです。

どうも、これには、先生の須賀一も、弱つたが、針治の術ときては、これはまた、ふしぎ、二度、その本を讀んで、きかせれば、あとは、そらで讀めるほど、よく、おぼへてゐたからひでした。でも、本は讀むが、わざの方はまるつきりだめでした。

これを見た須賀一は、つくづく、寅之助のゆくすへを思つて、ある日のこと、寅之助を呼びだして、『生れた國から江戸へ出て來る者は、みんな、えらい人にならうと思つて出て來るのだ。そなたも、やはり、さうだが、そのお前が親の膝をはなれて、わしの家に來はしたけれど、ゆくすへの仕事としなければならぬ音曲や針治のことは、まるで、上達する見こみがない。わしも、師匠となつたからには、お前を、りつばな者にしたてあげたいのが山々だけれど、このやうすでは、あきらめるより、しかたがあ

るまい。きらひなことを、むりに、おぼへさすのはわしも、面白くないから、これから、三年間といふもの、わしは、そなたを養つてやるから、その間に、そなたは、自分のすきなことを、學んで、りつばな、えらい人物になつてほしいのだ。』

思ひやりのある須賀一の言葉を、寅之助はどんなにうれしく思つたことせう。
『先生、まことに、ありがたいお言葉、身にしみて感じました。きつと、おなさけにそむかないやう、りつばな人間になつてお目にかけます』と云つて、それから、三年間、夜もろくろく、眠らずに、一心ふらんに勉強をつづけました。そのかひあつて、名も、だんだん、人々に知られるやうにはなりました。が、もともと、病身の人だつたから、須賀一はその身體を氣づかつて、
『學問に熱心だからと云つて、身體をそこねては、何にもならない。そなたは病身だから、二三年も旅

して來るがいい。さうすれば、きつと、なをる。わしに代つて、伊勢參宮をして來たらどうだ、五兩の金をやるから、もし、又、それが、あまつたら、どこへでも行つて見るがいいぞ』と、すすめました。

寅之助は度々の師匠のなさけに有りがた涙を流して、二十一才の春に、御父さんの宇兵衛といつしよに、遠い旅へと江戸を出發しました。

二人は、やがて、首尾よく、伊勢參宮をすましてから、京都へ出て、多くのお宮やお寺を、參詣して歩きましたが、北野の天滿宮にまゐつた時、寅之助は、しみじみ、その神々しい御威徳がははれて、『日本の神様のうちで、伊勢大神宮は云ふまでもないことであるが、神にまつられた人のうち、道實と豊太閤が、一番、尊い神である。さて、どちらを、じぶんの守り神にしたものか』と、思ひまどつたが、『わしは、學問でえらくならうとするのだ。やはり道實をえらぶがいい』と、とうとう、天滿宮を守り

神としました。

それから、二人は大阪へ出て住吉天王寺にまゐり須磨明石をまはつて、紀州の高野山、粉河寺、三井寺へとたどり、また、奈良の都を、じゆんれいして、おしまひには、あの有名な、櫻をしたつた西行法師が、吉野山中にたてたと云ふ西行庵を訪ねて、六十日目で、やつと、江戸へ歸りついたが、はたして病は、すつかり、なをつてしまひました。

須賀一も喜んだことは云ふまでもありません。寅之助は、それから、賀茂真淵といふ學者についても學び、大人になつてから、死ぬまで、群書類従といふ本を六百六十五卷に、そのほか、いろいろの本をあはせて二千六七百卷の書物を書きのこしました。塙保己一の名は、國のすみすみまで、ひびきわたりました。これほどのえらい仕事をした盲人は、世界に一人もないと云ふことです。

(を は り)



だまされた鯉魚

西川 喜平

山の上の沼に、何千年も前から住んであると云ひ傳へられて、この沼のめしと呼ばれてゐる、大きな鯉がゐりました。

この沼の水が流れ出して、谷川から、淵となり、淵となり、末は大河となつて海へ入ります。その大河に、大きな鯉がゐて、これ大河のめしと云はれてゐました。

「沼のめしとはドンナ奴だか、一度會つて見たいものだ。」と思つてゐました。

「君の住居は中々いいが、僕の家の見せて上げたいな、沼と違つて、廣大としたい、見聞らしですぜ、それで時々海の魚たちが、

のこを聞いて、
「沼のめしとはドンナ奴だか、一度會つて見たいものだ。」と思つてゐました。

ある日大雨が降つて、山の上の方から、ドン／＼水が落ちてくるのを見たら、鯉は、鯉にあふのはこの時だと喜んで、大勢の小魚どもの流されて下つてくる中を、威勢よく、尾、ヒレを振つて、河上へくと、登つて行きました。

「今までこんな、所があるとは思はなかつた、泳ぎくたびれた時、やわらかな藻にぐるまつてゐると向ふに見える赤い屋根の家から、ピアノの音が聞えてくるなんて、汽船や、モーターで、ガチャガチャ水の中をかきまはされる、大河の住居とは大違ひだ、鯉をだまして、こゝへ永く住みたいものだ」と心の中で思ひました。

遊びに来て、海の面白い話を聞かれますよ。それにいる／＼の船が通ります。オ、君は車のついて走つて行く舟を、知つてゐますか。」

「車のついてゐる舟は知らないが、ヤツバ三の帆をはつてゐるのですか。」

「アレはヨットと云ふので、あんなチツボケな物じやない、ナニンロ人間が何百人も乗れる船です。さういふ船が澤山に来て、その船から、毎日旨い食べ物や物を河へ流してくるので、ごちさうの食べ過ぎです。」と、鯉は、面白さうに話しました。鯉は鯉の話を聞いて、サア大河へ行つて見たくなつてたまりません。

「鯉さん、一度でいいから、お前さんの家を見せてくれませんか。」と頼みました。

「ナニ見せてくれなんて遠慮はいりませんよ。大河の住居が氣にいらぬ。」と云はれて、平氣でゐました。舟の方では、だんだん網をなぐり寄せて、



つたら、何年でも、何十年でも、おいでなさい、僕がお留守居をしますから、安心しておいでなさい。」と云はれ、鯉は喜んで、

びろとして、い、心持です。海の方から上つてくる船を見ると、大きいのも、小さいのも、はやいのも、おそいのも、ついでに来

あました。

「サアこの大鯉は、キユウ／＼鳴いてゐるぞ、面白い／＼見せ物にしてやれ。」と大沼のめしで威張つてゐた大鯉は、とう／＼生捕りにされて了ひました。(をばり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

つりがね草(賞)

群馬 關澤源之丞

草の中のつりがね草
つりがね草が
かねをつく
草にも木にも
かねをつく

雲つた朝(賞)

千葉 大川政雄

どんより雲つた朝
うらに出て見たら

かきの木から
青いしづくが
ぼたりぼたりと
おちてゐた

かげ(賞)

千葉 山内はな

よその母さん
学校の運動場
二人で通る
足なみそろへて
からこんく

かげく長い。

芋虫

東京 萩原正男

コロコロ芋虫
山道
ゴロリンコ
コロコロ芋虫
田の中

ゴロリンコ

いぢ悪る芋虫

ゴロリンコ

夕焼

岐阜 伊藤君江

夕やけだ

なつばの畑が

夕やけだ

小牛をもうく

ひいてつた

馬子のほほかむり

夕やけだ

あつちもこつちも

夕やけだ

地藏さん

石川 刀福元成

そなえただんごに
日が暮れて
河原の地藏さん
淋しかる
スイスイトンボも
川下の

アシの葉つばで

宿かりた

後は静かな

夕まぐれ

河原の地藏さん

日が暮れる

まさ場の果て

同人

トンボ見ときな

飛んでつて

まさ場の果を見ておいで

青い廣野のつづくまで

くづれた柵がつづくまで

とんとん蜻蛉の雨の目に

青い廣野の消えるまで

くづれた柵が消えるまで

トンボ見ときな

飛んでつて

まさ場の果を見ておいで

春の日

豊橋 小林直次

爺が歸へるよ

鍛かたにして

えさほいく

うらう

春日を背にうけて

ばあが歸へるよ

びくかたにして

えさほいく

うらう

春日に
かげながく
地藏さん



朝のお山は

もやきてねてる

お日さま出るまで

もやきてねてる

朝のお山は

ねぼうなお山

かえる

埼玉 磯田文江

赤がえる

あまがえる

小石の上を

びよんく

小石を

つたつて

お池に

びよん

一本道

埼玉 關口さくゑ (尋三)

さびしいナ
人も通らず
さびしいナ
青い草には
風ばかり

一つ星

埼玉 大橋喜代子 (尋三)

土手の上の
一本やなぎに
風が吹く
一つ星さん
一本やなぎの

土手の上

よしきり
東京 大木 正美

よしきり
早くなきやみな
葉を探して
子がいるよ
よしきり
早くなきやみな

朝

千葉 大川 光春 (尋五)

朝おきて
田んぼの方へ
行つて見たら
もやでもやで

さきの方は
見えなかつた

ガリガリ草

東京 有吉 徳子

ガリガリ草
かたたる秋の
荒野原
一人さみしく
たつてゐた
かりのこされた
ガリガリ草

あんぶくがみ

群馬 飯塚 とし (尋五)

ちやわんの中の
あんぶくがみ
私のおかほが
たくさんうつる
あら〜かどみが
ばち〜きえる
私のおかほごと
ばち〜はちける

一年生

千葉 中村 とし (尋五)

一年生のおかつばさん
並んだ 並んだ
どての上

一生けんめい
圖書書きた

ひぐらし

福岡 京山 文子

日暮れだ
日暮れだ
ひぐらし蟬が
鳴くから
日暮れだ
その日
その日の
親なし日ぐらし
鳴くから
日暮れだ

小すずめ

埼玉 草島小夜子 (十四才)

おせんたくの
手をやめて
上の柿の木
みあげたら
青葉の上に
子すずめが
首ふり〜
ちゆんちゆんちゆん
三羽で仲よく
ちゆん〜

とんぼ

千葉 中村 たけ (尋五)

とんぼが逃げた

原つば逃げた
おかつばが追つた
とんぼ



はだしで追つた
とんぼ〜負けんな

たはらくみ

茨城 伊藤 篤夫 (尋六)

おかつばも負けんな
たはらくみ
ぼつてり あかい
たはらくみ
母さんの耳に
さげようか
姉さんの指環に
つけようか
こねこの くびに
さげようか

かまさり

福岡 宮本 範正

ひるねが さめた
かまさりが
塚の上を歩いる



頼光の四天王

——峠の荒太郎、碓井貞光——

川崎 春二
羽鳥 古山 畫

一 前説までの梗概は、
一三二頁にあります。

伊豆の國府三島の宿の壯士達は皆、卜部六郎季武が放浪時代の知りあひでありました。しかも六郎は、俠勇の人として壯士達から重んぜられ、深く敬愛されてゐました。

三年前、はからずも東國に下る主君にめぐり逢ふことが出来て、放浪生活をおしまひにし、頼光に仕へることになつた時、壯士達は、

「お目出度いことだ……羨ましいことだ……どうか吾々のことを、何時までも忘れないでをって下され……何か、吾々の力が入用の場合があつたら、何時でも飛

んで行くからさう言つて貰ひたい

……折があつたら、吾々のことも頼光公に申上げて置いて下され……」と言つて、六郎の出世の門出を吾がことのやうに喜び、またしみじみと別れを惜しんで呉れたのでした。

今度の事件に六郎等が、頼光の乗物を箱根の險阻で奪ひ取らうとはせず、わざと三島の宿で待ちかまへることにしたのはかうした譯からでした。

六郎は片瀬小次郎友信と三島宿に入ると、まづ舊友の壯士達の中、主立つた者を十人ばかりそつと集めて事情を明し、どうか力をかして貰ひたいと頼みました。壯士達は躍り上がつて喜びまし

た。

「吾々がかういふ時節が来るのを待つてゐたのだ！ 相模の平家の奴原が、たとへば五百騎が千騎でも蹶破つて、頼光公を取り戻して見せる！」

血氣にはやる壯士達は、胸をたたく、腕をさすつて持前の俠勇をあらはしました。

六郎や小次郎は彼等がきつと承知して呉れるとは思つてゐたけれど、このやうにも頼母しく、喜んで引受けて呉れた事を、どんなに嬉しく思つたか知れませんでした。

しかし、正氣を失くしてゐるほど重い病人の頼光を、すこしの怪我もないやうに、嚴重な敵の手か

ら奪ひかへすには、どうしたらよいか——六郎等も土地の壯士達も、これには一方ならす頭をいためました。

でも、やがて一つの手段が考へ出されました。

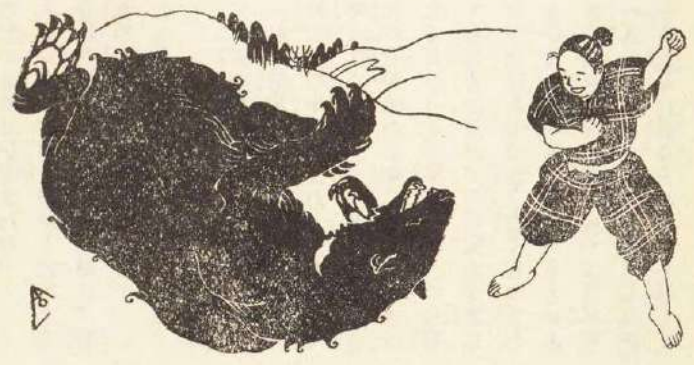
それは、六郎がひそかに呼び集めた壯士達の中に、今は國府の役所に武士として仕へてゐる者が二人あつたので、その者等を利用して、この大事を無事に仕遂げようといふ計略なのでした。

かうと計略が定ると、彼等はすぐに町中の壯士たちを五人三人と呼び集めては、そつと自分たちが今度の大事に加はることを、それからそれへと語り傳へ、申し合せたのであります。

「俠勇にはやる壯士達が、そんなにもすばらしい腕貨を喜ばない筈はありませぬ。彼等は固く、源氏の若い大将のために生命を捨てることを誓つたのでした。」

二

「いよ／＼明日は頼光の乗物が、箱根山を越えて三島の宿に着くといふ知らせが、出して置いた見張りの者からあつた夜の事でした。六郎等は壯士達と張りつめた氣持で、ひそかに最後の相談をしてゐました。ところへ、一人の若者が息せき切つて飛んで來ました。『た、大變です！ 暮れ方から不思議な風體の男が町をうろつくといふので、四五人でとつ捕へて調



べようとすると、をやつがひどく力のある奴で、捕へるところか、仲間の者が一人残らず放りなげられてしまひました！ 力自慢の大仁喜三郎さへ、大根でもぶん投げのやうに、二三間も先へ放り出されてしまひました！ その上、そやつ、の圖々しきといつたらありません！ 今は、四つ辻の酒店で悠悠と酒をあふつてゐるのです！ その人もなげな憎らしげといつたらありやしません！』

集つてゐた壯士達は、顔色をかへて立ちあがりました。――が、卜部六郎は落ちて首をひねりました。

『待つて貰ひたい！ それは敵のまはし者ではあるまい。そんな類

の者なら、腕立てをするよりも通げてしまふ筈である。――一體年は幾つぐらゐるだ？ 風體はどんなだ？』

『さあ、年は二十才ぐらゐでせうか。なかなか立派な顔容はしてゐますが、着物の着やうなどはからなつてゐません。そのくせ、侍らしく長い刀を二本もぶつさしてゐるのです。どう見ても曲者です！』

『どうもわからない！ よし、俺が行つて見よう――』

六郎は、三人ばかりの壯士を従へて、その酒店に馳せつけました。

と、店の外には壯士達が六七人、口惜しさうに見張つてをり、中では不思議な若者が油断なく時

時外をいらいみつけながら、でも甘さうに飯を食べてゐました。

六郎は、一人の壯士に言ひつけて店に這入らせました。

『何だ！ また無禮なことをするつもりか！』

その若者は嗚鳴りつけました。

『いや、さうではありません！ あなたにそつと逢つて見たいといふ方があるのです！』

『誰だ！ そんなことを言つて騙して捕へる氣か！』

『いゝえ、決してそんなことはありません！』

『誰だ！ 名前を言へ！』

若者は少しも氣を許しません。

『――それは、卜部六郎季武といふ頼光公の身内です。』 壯士は聲

を低くしてかう言ひました。

すると、彼の若者は驚いた様子をして起ちあがり、

『それはまことのことか』と、急にやさしげな若者になりました。

『すぐそこに來てゐられます。』

若者はおとなしく、壯士に追いて外に出て來ました。

『拙者が卜部季武でござる。貴殿の名は何と申される？』

すると、若者は大地に兩手をついて、

『峠の荒太郎と申します。この道筋でどなたか源氏の方にお逢ひすることが希望で參つた者でござります。今、あなた様にお目にかかれて、こんな嬉しいことはござりません。』 若者の聲には、まごこ

ろがこもつてをりました。
『まづ、拙者のかくれ家まで
お越し下され。』六郎は、若
者の手をとつて起しました。

三

若者の身の上はなし——。
『私は信濃と上野との國境、碓井
峠の山の中で生まれ、十八才の今
年までそこで育つて参りました。
母は私が生れた年に死んでしまつ
たのださうで、父親の手一つに育
てられました。その父も十才にな
つたばかりの春、亡くなつてし
まひましたから、それからといふ
ものは身よりの者といつては只の
一人もなく、山に棲むすこしばか
りの人々に慰められながら暮して

参りました。でも、父の祖父にあ
たる人といふのは、元は都で相當
の身分の者であつたとかで、山の
人々からはこの私まで色々な意味
で大事にされて來ました。私は生
れづき大力なので、父が生きてゐ
る時分には何時も、「吾等が祖先
は都の武家であつた。俺の父もこ
の俺も、遂々このやうな山の中で
樵夫や獵師と一緒に朽木のやうに
暮してしまつた。けれども、お前
だけはどうか都にのぼつて武家の
列にも加はり、立身出世をして貰
ひたい。幸ひ、お前は子供に似合
はぬ大力を供へてをり、面魂も
なみ／＼ではない。お前なら必と
家を興し、武勇の名をあらはすこ
とも出来るであらう。俺は峠の作

平とは呼ばれてゐるけれど、父か
ら貰つた名は橋直乘といふの
だ。成人したなら、必ず立派な大
將に仕へて忠勇を上げめ——」と
語つて聞かされました。十二三才
の頃からは、木を伐ることにつ
ても、鳥や獸を捕ることにかけて
も、山の人々に劣つたことはありません。
山で、私の使つてゐた丸
木の弓は五人張りの強弓、矢は羽
なしの長矢で五丁六丁先の獸を射
止めました。猪の脊に乗つて走る
ことも出来れば、大熊の鼻柱を
げんこつで叩いて、かすり傷一つ負
はない程の早業も平氣でいたしま
す。山の人々は、何時か私のこと
を峠の荒太郎と呼ぶやうになりま
した。この二三年は、木太刀を作

つて鳥や獸を相手に太刀打のけい
こもいたしました。そろ／＼立派
な主人をさがしに、都に上らうと
してゐた折から、里に行つて來た
山人たちの話によると、「このこ
ろ鎌倉に源氏の大将で、頼光公と
いふえらい大将が下つてゐられる
——」といふこと、それに彼等は
『峠の荒太郎はその頼光公にお仕
へ申したらどんなものだらう——』
とも言つてすゝめて呉れました。
そこで私は恩愛の深い山の人々に
別れを告げて、はる／＼鎌倉に頼
光公を尋ねて参りました。ところが、
頼光公は何處かへかくれてし
まはれたといふことなので、しば
らくは取りつく島もなく途方に暮
れてゐました。而し何時までもま

ご／＼してはゐられないので、こ
の上はともかく都に上つて見よう
と海道を参りますと、海道筋は大
騒ぎです。聞けば、頼光公は重病
の身で平吉秀等のために囚人とな
つて京都へ差し送られるとのこ
と、まだ主従の誓ひはいたさずと
も、遙に心の中で主君と頼んだ身
には残念でたまらず、口惜し涙を
流して吉秀等のかためた行列の後
になり先になりして、この三島の
宿まで参りました。これといふの
も、源氏の大将ともあらう方の乗
物、途中で必とお身内の方々が取
り戻さうとなさるに違ひない。そ
の折この峠の荒太郎がお味方申上
げて、必ず一方の敵は防いでご覧
に入れる考からでござりました。

今夜、頼光公のお身内にて一二の
お方と承る卜部殿にお目にかゝる
ことが出來たのも、私のそのみが
叶へられる時節が参つたものと存
じます。何卒、この私をお味方
の内に加へていたゞきたう存じま
す——』
六郎等は、かざり氣のない此若
者の志を涙を流して喜びました。
『これは必と、頼光公を無事にお
救ひ申すことの出來る前兆だ——』
と、壯士達の意氣は天をつくばか
り盛んでありました。

四

平吉秀は、行列の前後に時々
源氏の家人らしい者共が三人五人
と現はれるといふので、その子吉

國吉時等をはじめ家來達に命令して、道中を嚴重にいましめさせました。殊に箱根の山道では一方ならぬ心配をしました。

然し、その難所も無事に越えることが出来たので、三島の宿に着た時にはほつと気が緩んで軍兵達は一度に疲れが出て来ました。

吉秀等親子は、三十騎ばかり信用の出来る精兵を選びぬいて、頼光や自分等の宿所を守らせ、あとは町の家々に分宿させて、ゆつくり疲勞を休めさせることにしました。もう、そこには國府の役所もあることです。萬一のことがあるれば國府の武士達が加勢して呉れるとも思つてゐたのでした。

殊に吉秀等が心強く思つたのは、暮方、宿に着くと間もなく、國府の役所に勤めてゐるといふ武士達や、町の壯士たちが、酒や肴をどん／＼運んで来て色々ともてなして呉れ、「自分達も及ばずながら、この大事な四人の宿所を守つてあげよう」と申出たことでした。吉秀等はすつかり安心して、壯士達や國府の武士達が、自分等の宿所に自由に出入することを許しました。

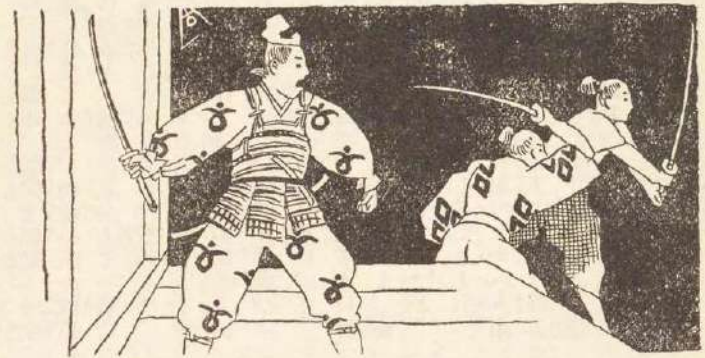
言ふまでもなく、それは卜部等の巧い計略なのでした。夜がだん／＼更けて行くにしたがつて、壯士達の数は益々殖えて参りました。また吉秀等の軍兵は頼み切つたその三十騎ではありましたが、だん／＼酔ひがまはつて

來たり、お腹が一杯になつて眠氣がさして來たりしました。けれど、壯士達が、大勢頼母しげに立働いて呉れるので、すこしも心配することはありませんでした。

けれども、それは大間違ひでした。夜半を告げる鐘の音が響いて來ると同時に、壯士達は急に怖ろしい仇敵と變つてしまひました。

國府の役所に仕へてゐるといつた武士達さへ、今は鬼神のやうな振舞をはじめたのでした。

彼等は不意に半酔半眠りの堅固の武士達に斬りかかりました。相模平家の選り抜きの武士共ではありましたが、さうした油断につけ入られてはたまりません。平生は腕自慢の若武者らでさへ、一



向に働けず、一太刀二太刀、劔を合せたかと思ふ間にバタ／＼打倒されてしまふ有様でした。

吉秀はさうした中でも流石にまゐるつさり惶て、はをりません。「頼光の室に、狼藉者を近づけるな！もし、奴原が近づいたら刺し殺してしまへ！」と、齒を喰ひしばつて喚き立てました。

しかし、その時には何時の間にか卜部六郎季武が大太刀をふりかぶつて、頼光の部屋に突立つてあたりを睨みつけてゐました。

「卜部六郎を見忘れたか！一歩でも御部屋に踏み込んで見るがよい！」

相模の武士達は、その威勢に恐れ一人として近寄る者はありません。

せんでした。劔戟の響、雄叫びの聲——戦は真最中でした。見る／＼、相模の軍兵は討たれて行きました。壯士達は、勝戦と見て一層はげしく暴れまはりました。中にも、一際目立つて嵐のやうに暴れ狂ふ若者、それは時の荒太郎が初陣の働さぶりでした。

荒太郎は天性の大力と覚え慣れた早業とで、長刀を振つて當るを幸ひ薙ぎ倒し、忽ち五六騎を斬り伏せてしまつたのでした。

この時、宿所の門を固めてゐた片瀬小次郎が、七八人の壯士を従へて躍り込んで來ました。そして大音聲を張りあげて、

「門の守りは鎌倉から加勢に參つ

た、縣爲平、秩父十郎殿ら十余騎に任せてある。相模平家の奴原は固より、國府の軍兵とて一騎でも門内には入れない。安心して、一人も餘さず討ち取てしまへ！」

壯士達は、鎌倉からの加勢さへあると聞いて、いよ／＼勇氣づきました。片瀬小次郎は更に、「峠の荒太郎よ！ 雜兵どもに目を呉れるな！ 吉秀を討て！ 吉國を斬れ！ 吉時を倒せ！」と、敵の大將親子を指し示しました。荒太郎は、敵を斬つたかへり血をあびて、阿修羅王のやうな怖ろしい形相となつて、遮二無二、憎むべき裏切者の吉秀親子に突つかつて行きました。小次郎が吉國を斬つてゐる間に、峠の荒太郎は

忽ちに大將吉秀と吉時の二人を斬り伏せてしまひました。折から、町の方からは、わあうわあうといふ鬨の聲が起りました。それは、辻々を固めてゐる壯士達が、平家の軍勢たちを追ひ散らしてゐるのでした。

はじめ、方々の家に宿つてゐた相模平家の軍兵は、大將の宿所の方で、たゞ事ならぬ騒動の物音を聞いたので、驚いて起き出して見ると、寝る時置いた筈の弓矢、太刀、槍等の大事な武器が何時の間にか何處へ行つたか一つとして見當りませんでした。軍兵達はたゞ、そちらこちらに寄集つてうろ／＼するばかりでした。そして、辻々から現はれる壯

士達に追ひ散らされて、はう／＼の體で逃げまはるだけでした。彼等の武器は、壯士達がめい／＼自分の家に宿つた軍兵のものを、そつと取りあげて自分達の用にしましたのでした。

國府の役人ども、騒ぎを聞きつけて駆けつけて來ましたが、縣爲平や秩父十郎等ががんばつてゐて、門内には一歩も入れませんでした。役人どもは、ほんの申譯ばかりに劔や槍を合せたゞけで、さつさと引き退いてしまつたのでした。——鎌倉勢は、峠の荒太郎と同様に機會をうかゞひながら、頼光の一行に見えがくれに追いて來たものでした。

(つづく)



河童の手紙

夏の夕方でした。一人の馬方が馬を川の浅瀬に曳き入れて、せつせと洗つてやつてゐました。すると、ふいに馬が、妙な聲で嘶きはじめたので、不思議に思つて見ると、水の中から毛だらけの手が出て、馬の尻尾を引つづつてゐます。馬方がびつくりして、その手をつかまうとした拍子に、馬が急に飛びはれて、川岸に上つてしまひました。

見ると、馬と一しよに、河童が馬の尻尾に、つかまつたまゝ、上つて來ました。馬方は、すぐと河童に飛びかゝ

りました。そこで、馬方と河童は上になり下になりして取組み合つてゐましたが、その内に、河童の頭のお皿から水がこぼれて、しまつたので、河童は急に力が抜けて、馬方の爲めに組み伏せられてしまひました。



河童は、悲しうな、聲を出して、「どうぞご勘辨下さいまし、お禮はたんといたしますから。」と拜むやうな、恰好をしていひました。

「お禮をするなら、後といはずにすぐしろ。」と、馬方が怒つた聲でいふと、河童は頭をかきながら「すぐと、おつしやられても、あいにく、こゝには何も持合せてありません。寶物はみんな向ふの峠にしまつてございますので。」

(をり)

ほうやとおんぶ

三木露風

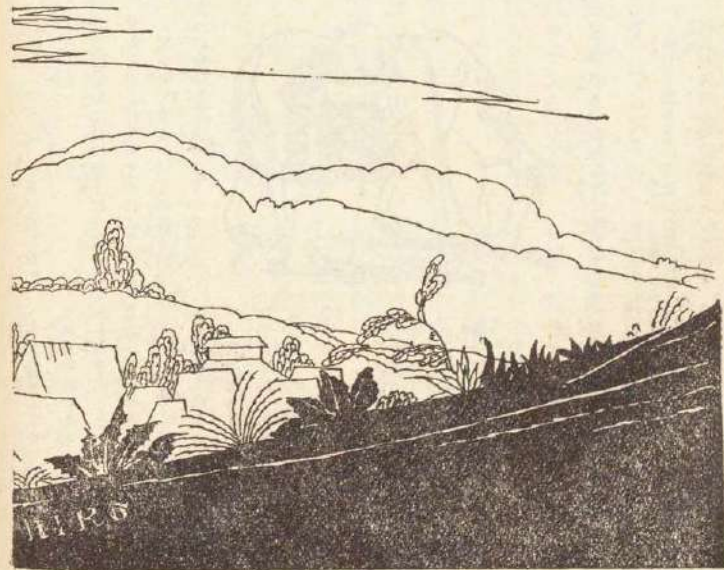
かあいい子供をおんぶして
山の峠をこえました

雲もさびしく山こえて

風に吹かれて ざこへゆく

ほうやよ 今は稲田道

村のおうちへ行きませう



もう 日が暮れて あかりつく

からすが かあかあ こんでゆく

ほうやのうまれたこの村は

水車が ぎいぎい まはつてる

荷車がらがら引いてゆき

草のほひや 牛の聲

ちいさん ばあさん 只今よ

ほうやをおんぶで着きました



川上四郎畫



世界童話欄



六人の商人と一人の坊さん (本日)

六人の坊さんが、丹波の國の山路を旅してゐましたが、歩いてゐる内に廣い野原へ出ました。「不思議だ。こんな野原はなかつた筈だ。」お坊さんは度々このあたりを旅したことがあるので、道をよく知つてゐたのですが、その日に限つ

て妙なところへ出たので、不思議に思つて、あたりを見廻したのでした。すると、丁度そこへ、これも道に迷つたらしい六人の商人がやつて来ました。商人はお坊さんを見つけたので、「もし、この道を参りましたら、どこへ、出るのをごいませう。」と尋ねました。「さア、何處へ行かれるか、實は私もわからなくて困つてゐるとこ

ろです。一體、このあたりに、こんな野原はなかつた筈ですがな。」と、お坊さんが答へると、商人達も不思議さうな顔をして、「全く、變だ。たしかに道に迷つたらしい。」と、口々にいつてゐました。そこで坊さんも、「兎に角氣をつけて、お互ひに用心しながら一緒に参りませう。」といつて、六人の商人とお坊さんとは、連れ立つて、進みました。その内に日が暮れて来ました。

野道で日に暮れられては大變だと思つて、皆なは「層急ぎました。」やがて、谷間の後へ出ました。そこで来た時には、あたりは薄暗になつてゐましたが、幸ひ向うに灯が見えました。一同は大喜びで、その灯をめぐりて行くと、一軒の、大きな家の前へ出ました。そこで、商人とお坊さんは、その家の門口に立つて「道に迷つた者が、どうぞ泊めてもらひたい」と頼むと、こゝろよく承知してくれたので



その晩は泊めてもらふことになりました。その家には、衆だらけの親爺と、若い男が四五人ゐました。親爺は、みんなの前へ出て来て、「さぞお疲れでせう。さア、お休むつくりお休みなさい。夕きに御飯を上げますから。」といつて、飯を七つ出してくまました。六人の商人は疲れてゐたので、すぐに就をして漢になりなりました。そして、夕きにすやすやと眠つてしまひました。しかし、お坊さんだけは、家の様子が氣になつて、どうしても眠ること

が出来ませんでした。でも、自分だけ起きてゐれば、變に思はれて却つていけないと思つて、横になつて眠つたふりをしてゐながら、時々目を開けて、そつと家の様子などかかつてゐました。臺所で、爐の上にお釜と鍋をかけてゐるのが先づお坊さんの目につきました。それから、大きな釜があつて、臺の上に、おのやうなものが載せてあつて、その中に土が一ぱい入つてゐました。お坊さんは、心の中で、「妙だぞ。お釜は御飯で、お鍋は汁だらうが、あの土は何にするのだらう。」と、思ひながら見てゐました。その内に親爺が出て来て、袋の中から何か種子のやうなものをつかみ出して、土の上に振りまきました。すると、若い男がすぐにこゝろを揺つて来て、土をかき寄せました。それから、皆なして何や

らおまぢないのやうなことを唱えてゐましたが、やがてこゝろを取りのけると、土の上一面に青い草が生えてゐました。若い男の一人がその草を摘んで、小さく刻んで、お鍋の中に入れてしまひました。お坊さんは、びつくりしてしまひました。商人達は疲れてゐて起き上らなかつた爲めに、とうとうそのまゝ翌朝になりました。商人とお坊さんが起きると、親爺が出て来て、「御飯が出来てゐます。さアおあがりなさい。」といつて、お釜から御飯をつきお鍋から汁をついで、皆々の前に並べました。商人たちはおしいいゝといつて食べました。しかし、お坊さんだけは、食べるふりをして、青い草だけを取り出してそれを懐の中に入れてしまひました。御飯がすすむと、また親爺が出て

「さアお風呂にお入りなさい。皆なさんしよに入つて下さい。」といひました。商人達は喜んで、どやどやと湯殿に入つて行きました。しかし、お坊さんだけは一旦湯殿に入つてから、そつと抜け出して、便所の中にかくれてゐました。皆がお風呂に入つたのを見ますと、親爺が出て来て、いきなり湯殿の戸を閉めて、鍵をかけてしまひました。お坊さんはいよいよ驚いて、ぐづぐづしてゐると命があぶな



「うまく行つたぞ。早く持つて来い」と大聲で怒鳴りました。



「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」

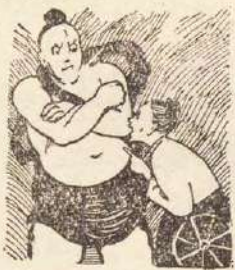
「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」

「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」

「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」

世界一の力持ち (朝鮮)

「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」



「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」

「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」

「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」

「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」



「お婆アさん、あんな大きな馬が、どうしてこんなところに居るのよ。早く帰らなさい。」

を指して返ってくるではありませんか。
仁王さまは、いよいよ體をつぶ



「これはたまらない。あんな男
につかまつたら、一と掴みにされ
てしまふ。」と思つて、生きた心地
もなく、夢中で逃げました。
そのうちに、漸く濱邊まで來
たので、船に飛び乗つて、急いで
沖へ向つて漕ぎ出しました。
追ひかけて來た「がま」は濱邊に立っ
て、

「おーい、その船を返せー」と
怒鳴りました。
しかし、仁王さまの方では、夢
中でせつせと船を漕いで逃げて行
くもので、
「がま」は眞赤になつて怒つて、
波から長い長い鐵の鎖を取り出して、それを仁
王さまの船に向つてさつと投げま
した。
鎖は映らす仁王さまの船に飛
込んで、鎖の先に着いてゐた鉤
が、ぐざりと船板に喰ひ込みまし
た。
「しめたぞ。かうなれば生け捕り
だ。」
と、「がま」は大喜びで、鎖を
たぐりました。仁王さまの方では
生きた心地もありません。あはて
て鉤を引抜かうとあせりましたが
深くさつてゐて抜けさうにもあ
りません。
仁王さまは、力があつて、船
の上にとどまりと坐つて、大きな聲

を出して一心に祈りました。
「兩無八幡大菩薩、鐵を切る劍を
下し給はれ。」
さういつて、所つてゐると、
忽ち空中から一振りの劍が船の
中に落ちて來ました。仁王さまは
大喜びで、劍の鞘を拂ふや否や
力をこめて、鎖を切りました。
と、雄作もなく鎖はぶつ切り切
れました。
力一ばい鎖を引張つてゐた
「がま」は、すつてんころりと仰
向けに砂の上に轉りました。仁
王さまは大喜びでせつせと船を
漕いで、無事に日本へ歸つて來る
ことが出來ました。
仁王さまは歸つて來て、恐ろし
い「がま」の話を皆なにして聞か
せたので、それ以來日本では「が
ま」が世界一の力持ちだと考へ
るやうになりました。また、朝
鮮では、仁王さまが劍を抜かつて
鎖を切つたことを知らないもの

日曜をざり

(フランス)

ですから、「がま」の話から仁王
さまが手で鐵の鎖を切つたもの
と思込んで、世界一の力持ちだ
と思ふやうになりました。
昔さんは「こぶりと爺さん」の
話を知つていらつしやいませ
う。い、お爺さんと、悪いお爺さ
んとあつて、い、お爺さんは、こ
ぶりが無くなつて喜び、悪いおぢ
いさんは、あべこべに、こぶを附
けられてしまつたと云ふお話で
すれ。
ところが、フランスにも、あれ
と同じやうなお話があります。
まつたく、おかしいくらゐ、よく
似てゐます。これはキツト、ど
ちらかで眞似をしたものに違ひあ
りません。眞似をしたと云つてい
ければ、このお話はキツト

お船に乗つて、お引越しをしたも
のに違ひありません。
これから一つ、フランスの「こ
ぶりと爺さん」のお話をいたし
ませう。そして、一讀、どちらか
先に出來たものが皆さんに考へ
てみていただきます。

「わかし、ある所に、大さう正
直なお爺さんがありました。南
實は靴屋さんで、朝から晩まで、



トツテツトン、トツテツトン、
と、靴の底を叩いてゐました。
が、どうも一向にお金が溜りませ
ん。お家は何時も貧乏で、御飯さ

へ破々食べられなくくらゐでし
た。と云ふのも、お爺さんは、ひ
どいせむしで、春中が弓のやうに
曲つてゐるのです。その爲に、
普通の人の半分も仕事が出来ない
のでした。
「あーあ、俺もこの春中のこぶさ
へ無ければなあ……」
お爺さんは、よくかう云つて、
溜息をつきました。が、溜息を吐
いて見たつて、春中の痛が無く
なる譯もありませんから、後には、
あんまり氣にかけない事にしまし
た。
「まあ、いゝや、その内なんとか
なるだらう……」
お爺さんはかう思つて、毎日せ
つせと働きました。
春中が、まがつて
かりますと
靴を叩くに、そりや便利

トツテツカン トツテツカン
お爺さんは、こんなでたらめな



歌を作つて、大きな聲で唄ひまし
た。でもこのお爺さんは、生れつ
き大さういゝ聲だつたので、近所
の者達も、みんな聴きとれるくら
ゐでした。
ある朝の事お爺さんは、皮を仕
入れに、町へ出かけて行きました。
その途中、大きな森の中を通り
かへりますと、何處からともなく
美しい聲で、
「月曜、日曜」
と、歌ふ聲が聞えてきました。
「ハテナ。どこで歌つてゐるんだ
らう？」

「俺も入れてくれよ。な、いゝだ
らう？」と、割りこみました。
小人達は、一寸、眉をひそめま
したが、でも親切に、
「あんた腫れるなら入れてあげる
わ。でも、私達の足を踏んぢや
いやよ。」
「なんの、足なんか踏むものか。
さア、始めよう。いゝか、そら。」
「月曜、日曜」
月曜、日曜。」

と、自分が眞先になつて歌ひながら、小人達の手をとつて、踊りだしました。

なるほど、自覚だけあつて、お爺さんの踊りの上手なこと！またその聲のいい事！小人達でも思はずウツトリとなつて、聴きとれるほどでした。

四人は一かたまりになつて、森から野原へ、野原から森へと、蝶のやうに踊り狂ひました。そして、たうとうしまひに、疲れて動けなくなるまで、踊つてく踊りぬきました。

「あ、草疲れた〜。でも今日はお爺さんのお蔭で、ほんとに面白かつた。」

と、三人の小人が云ひました。「ほんとにね。何かお爺さんにお話しませうか」と、一人の小人が云ひました。



と、もう一人の小人が云ひました。

それを聞いたお爺さんは、心の中で「ア」と思ひましたが、わざと困つたやうな顔をして、「え、なんだつて？この痛を取つてしまふつて？」と、戯談ぢやない！この痛を取られたら、冬、寒くつて仕様が有りやしない。どうかこれだけは勘辨してくれ。どな、お願ひだから……」と、泣くやうに頼みました。

て、きやツツ〜と笑ひながら、「そーれ、取るぞ！そーれ、取るぞ！」と、云ひながら、追かけて来ました。

お爺さんが、自分の村へ歸つて行きますと、向ふからお隣りの肉屋のお爺さんがやつて来ました。この肉屋のお爺さんは、評判の急げり者で、おまけに意地が悪かつたもので、皆んなから、「意地悪いさん」と呼ばれておりました。このお爺さんも、やはりせむいで、春中に大きな痛がついてゐたのです。

と、云ひました。

「さうだよ、おれは正直爺さんだよ。」

「これは、不思議だ！顔をみれば、なるほど、正直爺さんだが、姿はまるで兵隊さんのやうに立派ぢやないか。お前、あの春中の痛を何處へやつたのだい？」

「あ、あの痛がい。ありや邪魔だからすてちやつたよ。」

お爺さんは、ニコ／＼しながら云つて、森の中の不思議な小人の話を聞かせました。

「ヤア、綺麗なお嬢さんたち！休んでました。さア一ツ踊らうぢやありませんか？」

せんか。

「意地悪いさんは、いきなり腹をかけた。すると小人達は、疲れてゐるからイヤだ」と答へました。

「そんな事云はないで、踊らうぢやないか。俺はとて踊りが旨いんだぜ、村でも評判なんだからな、さア、踊らう！踊らう！」

と云つて、グイ／＼小人達の手を引張つて踊りだしました。

ところが、その踊りの下手な事！まるで家鴨が歩くやうです。おまけに、小人達の胸を押し、足を踏んだり、さん／＼な目に遭はしました。そればかりか、

「月曜、日曜」
「月曜、日曜」
とさへ歌へばいゝのを、
「月曜、火曜」
「水曜、木曜」
「金曜、土曜」
その次や日曜で、

うれしいな。

なんて、でたらめな歌つたもので、すから、小人達は昔んなヒドク怒つて、

「お前、そんなでたらめな歌つちやないわ。」
と云つて、踊りを止めてしまひました。そして、



「いま／＼しいから、仕返しをしてやりませう。あの痛の上へ、もう一つ痛を付けてやりませう！」と云つて、正直爺さんの痛を持つて来ました。いちわる爺さんは、驚いて、

舞免だ。

と、慌て、逃げだしました。小人達は、いよ／＼面白かつて、きやツツ〜と笑ひながら、よつて集つて、痛をくつつけました。

「いちわる爺さんの背中は、駝の背中のやうに、高く盛り上つてしまひました。」

お爺さんは、おい／＼泣きながら、家へ歸つて行きました。

これは、巴里の北にあたる、ピカルデイと云ふ地方に傳はるお話です。ヨーロッパの傳説には、至る所に「小人」が現はれてきますが、その小人の性質を比較してみても、面白い事だと思ひます。地方によつて、小人の性質に相違があるのです。「ニベルンゲン・リイド」と呼ばれる獨逸の傳説に出てくる小人は、此處に描けた小人と違つて、強盛な、懐疑的な性質を持つてゐます。



通信

童話の選後に

齋藤佐次郎

○今月の優れた作を挙げますと、大人篇では「蛇と卵」(大島知恵子)「幸福」(逸見子鳩)「夕立」(寺門安雄)「暗嘩」(門田洋一)「時計なほし」(中村武男)「馬鹿」(大島秀夫)の諸作です。子供篇では「夕焼雲」及「無題」(阿部和子)「り鳥とミイラントミス」(佐藤カツ子)の三篇でした。○讀後の感想を述べますと、大島知恵子さんは相變らず上手です。今度の「蛇と卵」を讀んでも、よく書いてみました。話がきび

の悪い蛇の話が中心になつてゐるのが幼い讀者には嫌はれると思ひますが、蛇にも親子の情があり、案外智慧があつて呑んだ卵を吐き出させることなど讀者は新しい知識を得る事と思ひます。つまり科學的の意味からいつても面白味があると思ひます。それから終りの、鶴を盗られても平氣な爺やさんの面影に、作者は意識してか、しないでもか、何れにせよ、何ものか感ぜずにはゐられませんでした。○逸見子鳩さんの「幸福」は作者がしつかりした筆を持つてゐる事に先づ氣づきます。貧しい家の娘と金持ちの家の娘との二人の運命を桑畑の一場面によく現してゐます。しかし、この作は童話といふよりは、小説といつた方が適當と思ひます。作者がこの二人の少女を扱ふ態度は、童話として、なく、むしろ小説であるといつた方が當つてゐると思ひます。○寺門安雄さんの「夕立」は、幼い頃の少年少女の生活を主題にしたもので、學校歸りの少年と少女が夕立にあつた爲めに、一つ傘に入つて歸つたのが、翌日問題になつた友達からひやかされたので、少年が自分の立場を守るためと辯解の爲めに、自分を傘に入れてくれた少女をつき倒すといふ筋なのです。○少年少女の心理をよく描いてゐる作ですが終りの少年が、少女をつき倒すところに

編輯室より

○九月號といつても、八月の暑中休暇に發行されるので、そのついでに面白いお話を集めました。上品に笑ふことが出来るやうなお話を集めたかつたのです。○神野先生の「取残された親類」をはじめ立石先生の「天狗をだました子供」「さけのみ爺」など夏向きのお話です。

▽原田謙次先生の「大海戦に勝つまで」は作者が、その當時對馬に一少年として暮してをられた時の實話ですから、特に興味の深い讀物であります。▽偉人の傳記をあつかつた面白い話を集めたい希望を持つてゐます。一大發明家エヂソンを先きに掲げましたが、今度は居保己一の少年時代をあつかつた田中宇一郎先生の作を掲載しました。近く乃木大将のやうな苦しい境過から生ひ立つた偉人の少年時代の話を掲げる筈です。▽童心句欄はますます盛んです。童謡欄の盛んなことは勿論ですが、選者は、餘りに數の多いために選に非常な苦心をしてをられます。▽長篇はいよいよ面白くなつて來ました。小島先生の「一王國を争ふ」川崎先生の「頼光の四天王」は一回毎に興味を増してゐます。大群判だつた三島新川先生の「大石主税」は近く完結します。▽野口雨情先生は、夏期中日本全國から講演やら講習やらに招かれ、目下御旅行中です。(齋藤生)○三十二ページの大石主税の所に、四十七士が永代橋を渡つてゐる處がありませう。これについて、面白い話があります。○私が印刷所で校正をしてなりましたと、隣りの室で何んだか暗嘩をしてゐるやうな聲がきこえます。耳をすますと、云ひ争つて

「金の星社月報」を差上げます。

ゐるのは二人の小僧さんらしい。これは面白いと思つて行つて見ると、二人は、例の「四十七士稱上の雲」を真ん中にして、口を泡を飛ばして云ひ争つてゐます。「君、この人数を勘定してみたまへ。四十七人ゐるだらう。これは間違ひだよ。この時は、四十五人しかゐないわけだ。だつて赤壇源藏と、矢田五郎左衛門だ、火の用心を見るために、吉良の邸へ引つかへして行つたのだから、これは誰かきさんが間違へたんだよ」と、一人が云ひます。すると一人が、「いや、そんな事はないよ。だから君は駄目だつて云ふんだ。二人が火の用心を見に行つたつて、あとの者は、二人が歸つてくるのを橋の袂で待つてゐて、さう一緒に橋つて、橋を渡つたかも知れないぢやないか。又、もし、さうで無いとして

も、君がたいにコソ〜と物事を考へるものぢやないよ。これは君、四十七士を圖案化して、こゝに表裏したものだ。人数なんかには關係ないんだよ。」と、云ひかへします。「二人は、眞赤になつて、「さうぢやない」「いやさうだ!」と云ひ争ひましたが、何時まで経つても勝負がつかせません。たうとう監督から大目玉を頂戴して、龜の子のやうに首を縮めましたが、それでも未だ低い聲でさんく争つた末、遂にこの次の日曜に、作者三島新川先生の所へお伺ひに行くと云ふ事になりました。その筋には三島先生、どうかよろしく。私よりもお願ひ申上げて置きます。○私は、この暗嘩そのものよりも、寧ろ、小僧さんが、誰の人数をかぞへて見ようとしたり、その心が面白いと思ひます。古い川柳に、泉岳寺に参詣に行つた人々が、きまりきつた事ながら、一つ二つとお慕の數を敷へてみると、云ふ事があります。敷へてみると、四十八箇ある。その餘分の一つは烈士喜銀の墓だとの事ですが、私はよく存じません。○とにかく、きまりきつた事でも、一度試みてみたいものです。相違を發見すれば、エラツなつたやうな氣がするに、ピツツリ合つてゐれば、算術の答が合つたやうな歡びを感ずる事が出來ます。(久米生)

長前號までのあらすじ

大石主税

元禄十四年三月十四日、淺野内匠頭は、吉良上野介を傷つけた爲め、江戸の愛宕下、田村石京大夫の邸で切腹をさせられました。そして、お家はなやされて了ひました。内藏助は、浪人になつて、京洛山科へ移つて放蕩を始めました。そして、妻を離別して、但馬、豊岡の貴家へ歸しました。主税だけは父の許に残つてゐました。間もなく、父は、主税に、その本心を打ち明けました。主税は始めて「復讐」の「連判」に加へられました。

十二月十四日、討入の日がやつて來ました。主税は、四組の大將として、吉良の邸の裏門に向ひました。そして内藏助の東組と力を合はせて、及向ふ敵を殺らす、やつつけて了ひました。しかし、かんじんの上野介の姿が見つかりませんでした。主税は、眞ッ時な抜穴に飛込むで、上野介を探しました。

頼光の四天王

源氏の若い大將頼光が鎌倉に下つてゐる時、父の遺仰が惡者のざん言によつて罪を待つ身となつた。頼光も亦父と一緒に罪されようとしたが、渡邊綱等からの知らせによつて、家來の平三郎、元國といふ者の父、平吉秀の館にかくれることにした。やがて頼光が病にかかると、吉秀はもし頼光が死んでしまへば自分の家にあることがわかつて罪になる。今の中に捕へて京都へ送り、養老を買つた方が、得だと考へた。併し、息子の平三郎、元國は、承知せず、頼光に付添つてゐた平三郎と片瀬小次郎とを逃がして、自分は忠義の道で自害してしまつた。吉秀は、それでも後悔はしない。頼光を救ふに守つて京都へ送ることにした。頼光の乗物をれらふ、平三郎、平三郎は、若年の頃父から習當され、三島の宿で候者のやうな生活をしてゐた時、頼光の東國に下るのに出會ひ、綱の骨折で頼光に仕へることにした。勇士であつた。

新らしく出た本

少年少女科學大系 兒童動物學(中)

兒童動物學の中巻は「魚類、鳥類のお話」です。天使魚と云はれる美しい外國のお魚だの、高山に棲むライオウのお話だの、みんな少年少女の好奇心を満足させ、科學知識を養ふ上に於いて、絶好の讀物であります。丁度今、暑中休暇が始まつてゐる時です。海へ行かれる方も、山へ行かれる方も、トランクの底にこの本を入れる事を忘れてはなりません。(四六判二〇〇頁、挿畫原列多數入り、定價壹圓 東京市外巢鴨上駒込二八、金剛社發行)

輕飛輕助

身體は小さいが強い「カトルピ」カトルスケ、或は巨人國を驚かし、小人島に雄大將として武動藝々、さうかと思へば妖怪退治や文化地獄の大探險、天に昇つて雷神を驚かし、北極の熊やオットセイと大格闘、遂に蓬萊國に行き大手扇を立てて歸つて來るまで、息もつかせぬ面白。挿畫六百數十、美しい色刷繪本。少年少女讀物として之れ程面白い本はない。(四六判四入美本、定價壹圓參拾錢 送料八錢 東京本郷

童心句掲載外佳作

- 池田 又雄(神奈川) 梅田雄太郎(秋田)
高野 正一(埼玉) 小島壽満子(長野)
醍醐 房明(東京) 磯貞金之助(東京)
武田 幸一(福岡) 田中 喜一(東京)
澤渡 恒(山形) 齋藤謙之進(東京)
木村 慶子(東京) 小川健次郎(徳島)
小村 義雄(茨城) 中川 徳男(山口)
中山喜代司(京都) 山口 敏男(福島)
寺島 武雄(長野) 水川 雪花(神奈川)
伊藤 正之(三重) 永瀬 孝子(岡山)
伊藤 正之(三重) 茶木 七郎(神奈川)

童話掲載外佳作

- 野村小鳥亭(愛知) 荒木 清(千葉)
陸奥多味男(静岡) 柴野 民三(東京)
山形新次郎(東京) 富川いさ穂(京都)
鈴木敏夫(愛知) 牧 百子(栃木)
五味くに三(山梨) 原まさる(東京)
石倉 眞造(山梨) 酒井 朗(神戸)
内田少路(茨城) 秋山 紅村(千葉)
竹里 土雄(埼玉) 伊藤 秀鳳(東京)
西野 光兒(岩手) 上浦あいじ(北海道)
高橋 武夫(東京) 石峰 茂夫(大阪)
山本 時風(徳島) 畔上 忠司(長野)
曲 三郎(京都) 安藤 光房(福島)
今井 勇吉(石川) 津田 恒(東京)

童話掲載外佳作

- 伊藤 正之(三重) 館石 唯雄(長野)
森次 俊雄(山口) 原 千代子(東京)
堀口チ子(埼玉) 大内 憲二(福島)
永井 重雄(東京) 大島 健吉(愛知)
中澤 久雄(新潟) 渡邊 愛吉(山形)
小澤喜代明(愛知) 一瀬 兼吉(山形)
北野 朝子(京都) 武田 マサ(秋田)
安西 きぬ(群馬) 中島 仲江(千葉)
池田 義子(山形) 許 水萬朝(鮮)
平尾 亮志(兵庫) 山村カエ子(熊本)
安田 俊夫(東京) 稲木 實郎(茨城)

童話掲載外佳作

- 三添 勝三(群馬) 山本 静子(香川)
志村治之助(東京) 大島 秀夫(愛知)
川地 榮一(愛知) 佐藤源五郎(宮城)
白玖 剛正(岐阜) しみづたけ(静岡)
磯野 暉一(香川) 小倉 旭(宮城)
中川 秀雄(不明) 幹 葉津子(神奈川)
山田三津夫(東京) 古川 安忠(岩手)
大木 柳影(東京) 大内 憲二(福島)
安田 道子(東京) 長瀨 秋孝(東京)

新誌友名簿

- 中澤 一郎(新潟) 藍井 康次(千葉)
石川 雪花(神奈川) 永室 鈴子(北海道)
清水 嗣郎(東京) 松川 雪江(東京)
伊藤 松夫(大阪) 伊那美智子(長野)
松本 青嵐(岡山) (以下次號)

大日本雄辯會發行 櫻登東京三九三〇

少年少女文學叢書 由比正雪

慶安の偉傑として、由比正雪の名を知らぬ者はありません。また、正雪ほど一般の人々から、誤解されてゐる者はありません。正雪は、後の世の高山彦九郎などと同じやうに、熱烈な勤王家だったので、それが、たゞ事を舉げる時機が来たためと、功を急ぐの餘り手段を選ばなかつたために、業なかばにして挫折し、身には悪名を背せられました。本書は、正雪の幼年時代から筆を起して、正雪のほんとうの氣持に成り、主義をなして描いて、この英傑のために萬丈の氣概を吐きました。(四六判、英國式カバー附、内容一九〇頁、定價壹圓) (東京市外巢鴨上駒込二八、金剛社發行)

金の星誌友募集

金の星の誌友を募集いたします。誌友には色々の特典や便宜がありますからどうか振つて仰加入下さい。ヘガキで本社へお申込み次第、誌友規則書をお送り致します。

研究欄雑筆

湊 一 訓

◇一體に雨情派と云はれてゐる人々(私はこんな黨派をつくることは、何によらず嫌ひ)は議論をしない。無口なのか、知らないのか。

◇議論も研究發表の一つの機關ではある。研究が發表することは、嬉しい事だらうと思ふ。

最初の氣持が發表する爲に研究するんで、そのすると云ふ心持、してゆくと言ふ心持は、事だと思ふ。然し傍道へそれた自分を顧ることなく、やたらに光明の彼岸に到達した氣持で、ほんとにいゝ氣になつて思にもつかぬことを並べて、他を排斥する口ふんを執らすのは一寸やりきれないと思ふ。

例は雨情派だ、やれ僕は白秋だ、八十だと云ふのも變だ。好き嫌はその人の好みだが、その先生方に對しても、おこがましく先禮ではあるまいか。

詩歌の道から見ても童謡詩人だの民謡、

小曲詩人や何々と云ふのもおかしい。詩人だからつて散文を書いてはいけないと云ふこともない、童謡詩人だからそれ以外のものにわたつてはいけない、自分は新道の大家だと、藝術の分野を狭くする必要もない。

◇香附を作つたからと言つて、全集ものの豫告でもあるまいし、横綱にならうと詩集を出さうと急に偉らくなつたつもりにならないうで欲しい。

自己陶醉の小域にたてこもつて廣い藝術の世界を殊更に狭まかせず、のんびりと、安氣な氣持で、藝術は自由にしてほしい。

◇童謡を作るのにも正面から細々と描叙する人がある。殊更に奇異な言語や措辭を並べて、眼から耳から、感情を強いる人があつて、名優には腹藝と言ふのがあつて、眼や聲で泣かすに腹で泣く、役者が舞臺で本當に泣きだして、観客が笑つた事がある。勿論悲劇の場面で。

多くの事を言ひたがつて、おしやべりとより以外何の感動もあたへない事がある。沈黙は黄金。

◇一見平明に書かれて味讀してその強く深い

てゐる。こんなところから自然にこの童謡の價値が出てくるのである。新しい香りあり匂あつて、如何にも賑かさに思はれるではないか。うたはすしてこの作者は、これ引付ける力をもつて居る事だらうか。この作者の感情は自由である。

自由、調子、これは童謡につきものである。亦それかと云つて、自由にばかり語つて居るのでは駄目である。自由にばかり語つて居ると自由詩になつてしまふからである。それ故、童謡は總て自由であつて調子よく語ふ事が一番必要であらう。

小さい意見

千葉 仔 朗

理屈ゆきに童謡に親しみ初め最後までその考へのまゝ、その主張通り讀めようと思つてゐます。彼等子供の純真な胸裡から感覺から美しい音律をみだしたいと思つて居るのです。

其處には生半端の理屈などの必要はかへつて無敵なのであります。

美しい物を美しく眺め、それを唄ふので、うまいものをおいしくと云ひながら心から喜ぶ彼等の態度、時として端始と友達となり誰のなき聲に足音をぬすんで耳を欲てる、春は雲雀を追ひかけ、夏は谷川の冷

さに身を投げだし、秋は草を摘みあつめ、枯草にころがりながら青い空を走る雲に不思議を感じる、冬は冬で雪に喜ぶ彼等であつて、

彼等には神が興へられた心があるばかりであり、それは谷川のさらさらと流れる小川の水よりも通る可き順路なのです。誰でも思ひ出として残る、そして美しい物語りなのであります。

◇然し自然は知らず／＼の内にその心さへ忘れさせようとしてゐるのであります。社會と云ふ魔物が隨一の思ひ出さへ奪つてしまふのであります。

私は時々忘れようとする幼年時代をペンによつて書き返して居ります。即ち童謡を作つてゐるのであります。それを唄つてゐるのであります。

唯私には深い思ふもなくこうした單純なる事から作らうと思ふ氣になつたのであります。ですから私は童謡を作る時は効ない眼を持つてみます。正直な純真な心に寫つたものを其のまゝ、筆にしてゐるの居ります。そしてそれを持つて私の主張の一ツとしてゐるのであります。私の意見としてはこれ位なものです。願はくは以後皆様のお指導とお鞭撻をお願ひ申します。

話しが別になりませんが私は童謡界のお友達冬木一さんの亡なられた事をお知らせし

感情を受けて感動する詩がある。なまじな技巧は無用で有害さへ伴ふ。ものを言ふより言はれぬ辛さ大きい。鋭舌は敬々しく深い感情を感ることが出来ない。間接な詠ひぶりが意外に大きな効果をもたらす。複雑さの混迷を抜ける純真不機嫌の洗練された單純化と云ふものは、斯様にむづかしいものであつて、又、微妙な作用をなす。

自由な童謡

石川 雪花

童謡は自由であり度い。調子にばかり氣をとられて、内容に於て無意味なのは、何の價値もない。私はさう思ふ。然し、調子よくうたはれてゐると、誰しも面白く思はれるのは當然であらう。

お晝の雨が降つてます
赤い雨天の實
白い雨天の實
お祭の提灯のやうだ
お晝の雨が降つてます

この童謡は兒童のうたつたものである。どつちかと云へば童謡の傾向をおびて居るが、調子から云へば、あまりよいとは思はれない。

然るに、この兒童は如何にも自由に語つ

うと思ひます。童謡を作つておられる方は誰でも御存じの事と思ひます。詩境仙臺に生れて私とは仲まじの友達でありました。冬木さんの見さんから聴いとお知せを頂いた時、またひとりと去つた(それも手を振りあつて)未來を話した人、友達のためにどんなに泣かされたであらう。心から泣かすには居られませんでした。

今までの童謡界も鳥木赤彦、山村春鳥兩先生が逝き、先賢渡邊増三氏も故人になられ今度冬木さんも、その後を追はれたので

何だか自分の親身の人達がひとり／＼減つて行く様な淋しさを感じました。冬木さんは二十歳の若い詩人です。常に病弱の爲か筆を持つ事を随一の樂しみとして居りました。面白く語つた事も遠い過去となり返らぬ思ひ出となりうとはどうしても考へられませんでした。先達お親切にも冬木さんの見さん(鈴木碧、西街四さん)からお送り下さつた遺作集を抱いて遠い追憶の世界に運ばれました。

皆様も時折り童謡のお友達冬木一さんに付いて思ひ出してくださる様私からお願ひ申します。

研究欄へ投稿を乞ふ

(取捨は、野口雨情先生に一任)



金の星社 九月號 出版だより

出版部より

▽毎年八月は、書籍に關係ある仕事は、だいたいお休みになる月であります。九月から十月にかけては又大いに活動する月になつてゐるのですが、七、八月の二ヶ月は昔からの習慣で遊び月になつてをります。

▽それで、本社でも、この月は、『少年探險家物語』と『アーサー王騎士物語』が従つて、八月に入つて出版になりましたので、それだけの發行にとり、九月に發行すべき『少年天才物語』『白虎隊』『金の星家庭文庫』『世界童話集』などの仕事の支度をやつてをります。

▽今や出版界は一團全集物發行のために、何が何やらわからないやうな妙な有様となつてをります。▽しかし、その中であつて金の星社の出版者は、以前にも増して讀者の方々から愛讀されてゐるのはお禮の申しやうでありませぬ。今後はますますいい本を出して、皆さんの御後援にむくひるつもりです。深田の本を出すよりは、最もいい本を少数出す方針で進むつもりでありますから、どうぞそのお

つもりで、金の星社の今後を見てゐていただきたい存じます。▽暑中のごときから、皆さんどうぞお身體を大切にすつて下さい。

【近日發行】

三島霜川先生著
○維新 白虎隊
哀史

(羽鳥古山先生畫)

久米絃一先生著

○少年發明家物語

(平澤文吉先生畫)

金の星社編

○金の星家庭文庫(3)

『孝行息子』(讀後感)

淀橋町角管八七六式井方 稻垣 秀邦
路すがらの書店の片隅に、『孝行息子』を見つけた。ちよこまつてゐた此の本を、僕は可哀相に思つて家へつれて歸りました。

神野先生の著書は、いつ讀んでもあきない面白く爲になる話ばかりです。童話讀本四『海を越えて』は僕は友達から拜借して讀みましたが、讀後感を書かうと思つてゐる内病氣で書けなかつた。今『孝行息子』を讀み終つたので、少し讀後感を書かしていただきます。先生の十三の短い童話です。一つ一つ讀む度に笑を禁じられません。『猫のぬい村』風の爲に生命を助つた爲、村では猫を飼はなくなつたと云ふ面白い話です。『愚助大和尚』一日遅れの頭をもつた愚助君が名畫を書き出す所などお腹をかへて笑ひました。僕は新しい童話が好きて、筋の古くさいのは嫌ひです。神野先生の著書はなんでも好きて、『ルオンと涼也』や『眠めつらの鬼』、『油鬘と弓術の先生』、『孝行息子』等二度も三度も、讀み返してました。僕は先生の序文の言葉が氣にいつた。僕等が下手ながら童話を作つて見たいと思ふ時、『孝行息子』の序文だけでも讀んでおくことがなると思ひます。序文の言葉と對照して内容を讀むと、作り方がはつきりわかります。金の星の

少年誌友諸君、童話を下手ながら作らんとした時、一度目を通しておき給へ、必ず爲になる事があると思ふ。又今は夏です。頭をひねつて讀む本よりも、軽い面白い『孝行息子』をつれて、綠濃き林にハンモックを釣つて讀んだ方が頭が晴々しますよ。實際です。

よむ様に廣告したいものである。『ジャンバルジャン』(讀後感)

岩手縣一關町八幡街 西野 光兒

『奴隸トム物語』(讀後感) 神奈川縣の星誌友 池田 又雄
淋しい様なうれしい様ななきけない様な、それは、何ともいへない感じが心の奥からわきおこつて來ました。奴隸トム物語の本には、トムの正直な心が隨者我々にもしみじみとしました。彼の正直はどんな親しくも何も突破してしまふおそろしい感じが、しきりと眼の前にありありと姿までがうかんで參ります。私は本をよめ前は、どんな事が、書いてあるのか、どんなものかとうたぐる様だつた。しかし、どん／＼よんで行くうちに、何ともいへない感に打たれた。一度はよんでよい本だと思ひます。此の本を大勢の人が

皆さん、私は『ジャンバルジャン』を讀みました。『ジャンバルジャン』は涙の物語です。私は泣かされました。なんて不幸なジャンバルジャンでせう。パン一片を盗んだ爲に十九年間の永い間牢獄へ入らなければならなかつたのでした。牢獄を出てからマリエルと云ふ僧正に助けられて、眞人間となつて哀れな人々を救ひました。けれども哀れジャンバルジャンは、警察の目を避けなければならぬ日蔭者同様でした。何と云ふ涙の物語でせう。泣かすには居られませんでした。私は此のジャンバルジャンが好きで色々本を讀みましたが、金の星社の『ジャンバルジャン』ほど面白く、分りよく又涙的に書いた本はありませんでした。まだお讀みにならない方に、此の涙の物語をおすゝめ致します。

『ナポレオン』(讀後感)

山本 力

朝野大郎三笠町二〇番地
僕は中學へはいれた御褒美の一つとして『ナポレオン』を買つていた。いざいざにしました。本屋がさがしてもありません。僕はががかりしました。とう／＼三月の末頃大橋書店にたのんで、御社の方からとりよせてもらふようにしました。それから手にいつたのは、間もない事でした。僕はうれしくてたまりませぬ。その感じたことは、一、裝飾が品のよいこと、二、本につりあはぬほど安価なこと、三、頁数が多い、四、教育的の本である、内容のよい事は勿論です。赤い色の表紙、價はたつた九十錢、僕はすつかり氣にいつてしまひました。

しかし、これまでこんな良い本が何故、紹介されてゐないのか不思議に思ひました。讀後感にまでしてゐないのがおかしく思はれました。少年時代のところのナポレオン

『利口な驢馬』(讀後感)

篠崎 保正

東京市牛込區築地町六
僕は弟に、つめて活動へ行かないで、金の星社の利口な驢馬を買ひました。たつた六十錢でほんとうに面白い本でありました。兄さんはこの話はこつけない面白いうちに、この世の中の教訓が織りまぜてある。これは面白くためになる本だと云ひました。

讀後感を募集します。

金の星社發行の書籍に就て、皆さんがお感じになつたことを、そのまゝ、濃縮なく記してお送り下さい。掲載の分には感謝を呈します。



讀者だより

▼金の星のみなさん、お變りありませんか。森にせみの聲がやかましくなつて、信州も暑さが激しくなりました。東京はどんなに着い事せう。御身體を御大切に遊ばせ。美しい繪はがきを澤山ありがたうございまして。先づは御禮まで。さよなら。

(信州小諸町小口藤橋子)

▼社先生の御病氣は、榮て淡見がら一度開いた事が御座居ました。今又御病氣御保養の事を本誌で受け給はつて驚いておられます。一日も早く御回復の上、以前の様に美しい作品を見せて下さらん事を御祈り申し上げます。私の作、推薦な

たから近日又誌代御前納申上げます。誌代切の御通知を受け不本意をせればならぬゆづうのない私に君が悲しい一つで御座います。給仕君、居睡をし給へ！ 殿る者は健康である。失禮。(大阪市天王寺區東平野町榮松竹夫)

▼暑い夏が咲いてゐる夏、その夏の曇りの中に、野口先生他編輯部の先生方には益々御壯健！金の星は毎號ごとに美しさを増してきて、どんなにうれしきことですか。およろこびを申し上げます。又誌友、青柳君も、渡村も、名方君も毎號誌上で御名をみるだけでうれ探載下さい。八月號に拙劣なる歌を御禮を申し上げます。次に先月號の推薦の『家鴨』實にうれしき御歌だと幼なじ妹たちが心から氣に入りました。失禮ながら本當の氣持そのまゝを又本月も書いてみました。

た。味と共に御願ひ申上げます。何しろお暑い中に御體を御大切に遊ばせ、童話道のため幸多きを(童話編輯部協会で田中弘一)

んかと一つも獲期しておられたのでした。それだけ未だ創作に自信が有りました。益々御導きました。(神奈川 雪花生)

▼社君の病氣については、尙このほかにも澤山の御見舞狀をいただきます。とりあえず誌上で御禮を申し上げます。手紙は、岐阜市香原町三丁目 北村方 杜仙之介でまゐります。(記者)

要讀者の童話童話は月毎に良い力が生れて行く様です。僕も大いに力をつけて投書しますから、其時は投書箱になげ入れないようには注意しますよ。先日、友達が給仕君になにか送つたら番地がちがつて戻つてきたと云つてましたよ。今度僕が、秋に咲く草花の種を送りませう、着いたらすぐさま給へ。きつと大きな花が咲きますよ。それから金の星少年組の方々にお願ひがあります。今度僕が「すみれ」と云ふ擬作文を主に研究する小さな冊子を作りたいと思つて、今いそいであります。みなさんがつつと讀方なり童話を、僕の所へ送つて下さい。出来ましたら一冊送りしますから。原稿用紙

か半紙一枚位に書いてください。何枚でもかまひません故お送り下さい。月二回位出して行く豫定です。當分無料でさし上げますから送料二銭切手だけ原稿と一緒に送ります。宛名は東京市神田區南神保町十六土戸方稲垣秀坊宛にお願ひいたします。では先生、給仕君よろしく。(東京稲垣秀坊)

▼記者諸先生、僕は今回文藝の會を創りましたが、第一回に幾多の作品の内二點を御送します。どうか宜しく。なほ本會で同課本として毎月金の星を買ふ事にしました。一同文藝誌を出すつもりです。僕等も文藝誌を出すつもりです。愛讀者諸君、僕等の會は文藝研究を目的としてゐます。どうか御入會下さい。返信料封入申込下さい。會則を御送りします。終りに、かゝる良い本をつくり我等につくして下さる編輯諸君先生に、會員一同に代り深く御禮申上します。これから時々投書さして、いたゞきます。ではさよなら、御氣遣よく。(京都市上京區上下立賣通 御前通西入大宮町 山田蕪藏内金鈴會)

▼私は大正十一年新年號からすつと此方一月も金の星を離した。ことはありませぬ。其頃島崎藤村有島馬氏が監禁をされてゐたこともおぼへてゐます。大正十一年六月から金の星が『金の星』と改題分内容が改まったことも精細にかんじます。岡本先生の繪が明るくなったことも精細に感じること

▼野口雨情先生、私の拙い童話を推薦して下さいまして、何と御禮申してよいかわかりませぬ。私の童話が、はじめて金の星に發表されたのが大正十四年の八月號でした。それから丁度二年たつた今日意外にも推薦とは何と面白い因縁でせう。厚く御禮申し上げます。では皆さんお體を大切に。さよなら。(牧草)

星の金社編 世界少年少女著名大系
 錢十金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一第	編二第	編三第	編四第	編五第	編六第	編七第	編八第
ロビンソン漂流記	ナポレオン物語	ドン・キホーテ	イリアツド物語	ガリバー旅行記	ロビン・フッド物語	アラビヤン・ナイト	オデッセー物語
少年少女に於て、この物語は一生の幸福を成す。...	少年ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一...	イスパニヤのある村にクイザノといふ男が少しありましたが、毎...	これは「オデッセー」物語の別篇とも云ふべきもので、有名な...	ガリバーが、難船して小人島に漂流し、それより大人國を巡...	「ロビンフッド」は、英國に昔から傳へられてある面白い物語...	アラビヤに昔から傳へられてある面白く、毎日一人づつお...	ギリシヤ詩人ホメーロスの作であつて、世界中で一番古い、そ...

懸賞創作募集

【注意】 童童童 童童童 童童童
 野口雨情先生選 齋藤佐次郎先生選 野口雨情先生選
 野口雨情先生選 齋藤佐次郎先生選 野口雨情先生選
 (一) 一般讀者の創作)
 賞金は十五行以内、童話は二十行以内、童心句はヘガキ一枚に三句以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は五圓、童話には一圓づつ、特選の場合には童話には拾圓、童話には五圓づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入題」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿は返しません。

定價 壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
 三ヶ月分三冊 (送料共) 壹圓貳拾錢
 半年分六冊 (送料共) 貳圓四拾錢
 一年分十二冊 (送料共) 四圓八拾錢
 但し新年號は特別號で五十錢です。御注文の時は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
 振替口座東京五九五九六番
 廣告料は御照會次第お答へ致します
 昭和二年八月九日印刷納本(毎月一回)
 昭和二年九月一日發行(日發行)
 東京市本郷區神田町中區三十七番地
 編輯兼發行人 齋藤 謙 保
 印刷人 小 端 丁 安 之 助
 印刷所 安 進 堂
 東京市本郷區神田町中區三十三番地
 發行所 金の星社
 振替口座東京五九五九六番
 電話小石川五三三七番

磨^{みが}齒^はニオイラ

「今日はうれしかったわ。
みなさんで私のお齒が綺麗になった、どんな
秘傳があるのなんて、ひやかすのも、
だから私言つて上げたわ。」

私の秘傳は朝も晩も

ライオン煉齒磨で磨く事ですの。

あなた方もそんなにうらやましかったですら

ライオン齒磨で磨きなさいなつて！」

